

第二章

アジア太平洋地域



浦添出身者が入植した満州の青雲開拓団本部
の前で（1940年代）
宮城高進提供



サイパンから引き揚げてきた当山出身の女性
（後方左側の女性）。手前の少女たちが着て
いる洋服はその女性が仕立てたもの
平敷寿恵子提供

第二章 アジア太平洋地域

概要

第一節 フィリピン

一	フィリピンの概況とその歴史	井口学
二	フィリピンへの渡航と定住	井口学
三	戦争と引揚げ	井口学
四	引揚げ者たちの戦後史	三木健
五	戦後移民の連続性と非連続性	三木健

石川朋子

第二節 南洋群島

一	南洋群島の歴史と概要	崎浜靖
二	南洋群島への渡航	崎浜靖
三	渡航先での生活	石川朋子
四	戦争と引揚げ	石川朋子
五	戦後の渡航	石川朋子・仲地清

第三節 台湾

一	台湾の歴史	又吉盛清
二	台湾への渡航と生活	野入直美
三	戦争と引揚げ	松田良孝
四	引揚げ者たちのいま	野入直美

第四節 満州

はじめに	又吉盛清
一 沖縄と満州	又吉盛清
二 満蒙開拓移民	又吉盛清
三 移民先での生活	謝花直美
四 戦争と引揚げ	謝花直美
おわりに	又吉盛清

コラム 沖縄の日本復帰が生んだ沖縄系人のグアム移住

コラム 「ラサン神山」の子孫たち	仲地清
コラム ニューカレドニアの沖縄移民	三木健

第二章 アジア太平洋地域 概要

本章では、アジア太平洋地域への「移民」¹として、フィリピン、南洋群島、台湾、満州について取り上げる。南洋群島や台湾、満州へは、ハワイやブラジル等への渡航とは異なり、パスポートや出国手続きが不要であったため、渡航したウラシーンチュの正確な数はわからない。第二次世界大戦後、浦添に引揚げた者たちの申告記録「引揚者在外事実調査票」によると一九四五年（昭和二〇）年頃、アジア太平洋地域には、三九九世帯一〇七八人のウラシーンチュが移民していた。そのなかでも南洋群島が二四一世帯六八五人で、続いてフィリピン九二世帯二三七人²、満州四二世帯一二三人、台湾十八世帯三五人となっている。その他に中国（三世帯十二人）や朝鮮（二世帯四人）、東印度（一世帯一人）などへも渡航している（口絵表7）。

これらの地域に最も多く送り出した集落は城間の六〇世帯一七三人で、つぎに伊祖五六世帯一七三人、仲間三八世帯九八人、西原四二世帯九六人、宮城三九世帯九四人となっている。出身字別・居住地別人口をみると、南洋群島へは城間四八世帯一五〇人、フィリピンへは宮城二五世帯五四人、満州へは西原七世帯二七人、台湾へは内間五世帯十一人となっている（口絵表4・5）。

フィリピンへの渡航は「海外旅券下付表」によると一九〇八年（明治四一）が最初の渡航である。南洋群島や満州、台湾への最初の渡航者は先述したとおり、パスポートや出国手

続きが不要であったため、最初に渡航した時期等についての記録はまだみつからない。正確ではないが「引揚者給付金請求書処理表」でウラシーンチュの渡航年をみると、南洋群島へは一九一四年（大正三）、台湾へは一九一五年（大正四）、満州へは一九三六年（昭和十一）が最初となっている³。

口絵表11でみると、渡航先でのウラシーンチュの職業は、農業が最も多く、工業、商業、公務・自由業となっている。本章でとりあげている地域でのウラシーンチュの職業はつぎのとおり。

フィリピンでは、ほとんどが農業（八九世帯）で農業就業率が約九七%となっている。フィリピンでの農業は、マニラの原料となるアバカ栽培に従事するウラシーンチュがほとんどであった。フィリピンに渡った移民たちは、麻耕作や麻挽きに従事した後、資金を貯め、数人で「独立自営」に転じ、麻山経営で成功する者もいた。太田興業株式会社（以後、太田興業）設立後からは麻山ごと栽培・収穫を請け負うようになっている。またウーコーヤー（麻のバイヤー）を指し英語とタガログ語を勉強した者もいた（第一節）。

南洋群島での職業は、農業が約六七%（一六二世帯）、工業約十五%（三七世帯）、商業約五%（十一世帯）、鉱業約四%（九世帯）となっている。多くのウラシーンチュは、製糖事業を行っていた南洋興発株式会社（以後、興発）の製糖工場や農場で働いていた。南洋群島に日本人移民が増加すると、蔬菜の需要が増え、組合をつくって蔬菜栽培していたウ

ラシンチュや雑貨屋や豆腐屋、菓子店等の商売を行う者も増えていった。これらの職業は渡航前の沖縄での経験が活かされた。昭和十年代に入ると高賃金労働を求め、燐鉱夫として働くウラシンチュもいた（第二節）。

台湾に渡った人々は、台北、基隆などの都市部に居住することが多く、農業や漁業よりも官公吏、教員、会社員、工場労働者、商店の従業員などが多かった。台湾に渡航したウラシンチュが従事していた職業をみても、公務・自由業や商業が多いが、単身渡航した女性のなかには「女中」をして家族に仕送りをした者もいた。朝鮮への渡航も公務が多かった（第三節）。

満州でも、農業が約九〇%（三八世帯）となっている。満州に渡ったウラシンチュは、青雲開拓団の一員として農耕に従事していた。青雲開拓団は第十二次二百戸開拓団で、浦添村、真壁村、知念村等で構成されていた。満州での農業は一年一作で、大豆とトウモロコシが主作物で他にはコーリヤン、粟、米、バレイショ等を栽培していた。農業以外に満鉄社員、鉄道員、会社員等の仕事に就いている者もいた。（第四節）。

以上、ウラシンチュの渡航先での職業等を概観したが、アジア太平洋地域への移民は、日本の軍事・外交政策によって展開されていた側面が強い。つまり個々人の渡航動機とは異なり、日本が、欧米諸国と競い合ったアジア太平洋地域への領土拡大と植民地支配の展開でもあった。そのため第二次世界大戦終結によって、これらの地域に移住していた日本

人は全て送還されることになる。ウラシンチュたちも日本本土や沖縄への引揚げを余儀なくされた。

本章では、これらの地域への渡航や生活、そして戦争と引揚げを取り上げた。さらに引揚げ者の戦後にも触れている。フィリピン、南洋群島、台湾、満州での実態に入る前に、それぞれの地域について概観する。

日本からフィリピンへの移民が本格化するのには、アメリカのフィリピン領有後、⁴道路工事やマニラ麻栽培の労働力として日本領事館へ要請してからである。領有当初は、日本政府は移民法によってフィリピン移民は禁じていたが、移民保護法改正（一九〇一年）によって、フィリピンへの渡航も許可されるようになる。沖縄からフィリピンへの移民は、ルソン島山岳部のバギオへの道路工事建設のためのベンゲット移民（一九〇四年）から始まっているが、ウラシンチュは確認できていない。太田興業（一九〇七年設立）等が麻栽培に着手し、マニラ麻の栽培が本格化していくなか、大正期の「アバカ・ブーム」を契機に多くのウラシンチュが渡航していった。一九二七年（昭和二）、一九三七年（昭和十二）には、浦添村出身が集団で渡航している。これらの集団は宮城や伊祖の出身者が中心であった。太平洋戦争が勃発すると、米国領であったフィリピンの日本人移民は、日本軍がダバオに上陸するまでの約二週間、各施設に強制収容される。日本の占領後は麻栽培も再開され、一九四三年（昭和十八）には日本軍から「遊休労力」を活用して軍需包装用麻繩の生産が要求されるが、食糧補給のための畑へと変わり、麻栽培の労

働者の半数以上が軍事施設建設へ動員されていた。一九四二年（昭和十七）には兵役法改正によりフィリピンでも徴兵検査が行われるようになり、男性は現地召集された。残された女性や子ども、高齢者は、山奥のタモガンへ避難した。避難途中に米軍の攻撃や日本兵の襲撃、マラリア等の病気で亡くなった人も数多くいた（第一節）。

南洋群島へは、第一次世界大戦後にミクロネシア（グアム、ナウル、キリバスを除く）が国際連盟委任統治領となり、受任国となった日本が「南洋群島」と称し統治してから日本人移民が本格化していく。「南洋群島移民規則」（一九一八年）を制定し、殖産興業に着手する。興発（一九二二年設立）が沖縄から移民を募集すると多くの人が南洋群島へ渡った。興発の製糖事業が成功し、事業を拡大していくなか渡航者が増加していった。南洋群島には国際連盟規約やワシントン条約で軍事制限が課せられていたが、日本は国際連盟を脱退し公然と軍事施設を建設していく。昭和十年代には南洋群島が軍需景気に湧き、さらに渡航者も増加していく。ウラシynchュが最も多く渡航したのもこの時期であった。徴兵忌避で南洋群島へ渡ったウラシynchュも、現地召集、軍事徴用へと駆り出されていく。この頃、沖縄から出稼ぎや移民意識の流れで南洋群島に移住した沖縄出身者は四万五〇〇〇人を超えていた。沖縄移民の流れと日本の「南進政策」が重なり、その結果沖縄移民は「南進」の担い手としての役割をもつことになる。生活の場であった南洋群島が戦場へと変わり、ウラシynchュたちも戦争に巻き込まれていく。地

上戦となったサイパン島やテニアン島では、住民が戦闘に巻き込まれ多くの人が犠牲になった。両親を失った子どもも少なくなかった。地上戦のなかったパラオ島やボナペ島などでは、空襲や餓えによって多くの生命が奪われた（第二節）。

沖縄にとって台湾は地理的な隣接地域であり、旅券を必要としない植民地であったため統計で掌握できないほど多かったという。日清戦争後、日本は台湾を植民地経営として領有し、台湾総督府を設置し総督が全権を握っていた。一九三〇年代に入って日本の南進政策が具体化されるようになると、台湾は日本の南進基地として重視された。日本の台湾経営は、台湾を独占的な植民地市場とし、政府の保護援助の下、糖業を中心に台湾製糖株式会社（一九〇〇年設立）等の大資本の進出を進めた。製糖工場十一か所十三工場、アルコール工場二か所をもち、台湾では粗糖・アルコールを生産し、日本本土で精製糖・角砂糖・グラニュー糖を生産、その販売は三井物産が独占した。製糖業の労働者として、また漁業者として沖縄からも大量の出稼ぎが出ている。沖縄から台湾への渡航は、植民地の下級官吏や「公学校」教師、農業・漁業従事者、植民地官僚の家事使用人（女中奉公等）等が多く、大資本をもって農場経営や商業に従事する者は少なかった。このほか台北帝国大学等へ進学する者も多かった⁵⁾。

アジア太平洋戦争末期には、奄美大島、徳之島、沖縄島、宮古島、石垣島から老幼婦女子の台湾への疎開が実施された。台湾へ疎開した人びとは食料難だけでなく、マラリアや栄養状態の悪化で亡くなった人も少なくなかった（第三

節)。

満州への移民は、「満州国」樹立(一九三二年)に合わせて、本格的な植民地支配として満蒙開拓の名の下「農業開拓移民」が開始され、沖縄からの渡航者も増加していく。「第一次試験移民」は武器を携帯した武装移民で、ソ連を仮想敵国としてソ満国境の警備を主にした軍事的な使命を担っていた。満蒙移民の軍事的な役割は、最初の入植から引揚げの最後まで、国策の一貫として通底したものであった。しかし、このような軍事的な意図は巧みに隠され、国民を動員していった。「二〇カ年一〇〇万戸送出計画」(一九三六年)に基づき、開拓団が送出される。訓練を終えた開拓団団長と指導員、先遣隊が本隊受入れの準備をするため先に入植地に渡った。青雲開拓団の本隊呼び寄せは、一九四四年(昭和十九)から本格化し、浦添村出身は四グループに分かれ、那覇港から鹿兒島、下関、釜山、フラルギを経由し、青雲開拓団の入居地に入った。開拓団の経営は共同経営から、三年目には集落ごとの経営、四年目には四〇六戸の組(班)経営、五年目から個人経営とされた。開拓団は二年半の間に二度の収穫と二度の厳冬期を村で経験した。太平洋戦争が勃発すると、満州の関東軍から南方や沖縄、日本、中国へ次々と部隊が抽出され、関東軍の兵力不足を補うため、開拓団のなかから男性が召集され、女性や子ども、高齢者は軍の後方に取り残された。ソ連軍が国境を越え、満州に進軍してくると、青雲開拓団は退避命令を受けチチハルの避難所に向かった。難民収容所にたどりついて、病気や栄養失調、餓えによって

亡くなる人もいた(第四節)。

アジア太平洋地域に移民した人たちは、渡航先で戦争に巻き込まれ、一年または一年半にわたって収容所での生活を余儀なくされた。収容所は、民間人と軍人に分けられ、さらに民間人を日本人と朝鮮人、そして現地の人に分けられていたところもあった。収容所内には、学校・病院・警察・孤児院などのさまざまな施設があり、農作業、大工、看護婦、通訳など、いろいろな仕事があった。南洋群島では、日本空爆の拠点となる飛行場建設に駆り出された住民もいた。広島、長崎に投下された原爆は、テナアン島ハゴイ飛行場から飛び立ったB二九戦闘機であった。

敗戦によって、これらの地域から一九四五年(昭和二〇)九月から引揚げが開始され、沖縄や日本本土へと送還された。沖縄への引揚げ船の多くは中城村久場崎へ、一部は那覇港へ入港し、インヌミ収容所(現在の沖縄市高原)で数日過ごした後、それぞれの郷里に帰っていった。浦添では、一九四六年(昭和二一)年三月九日に南洋群島からの引揚者十五人を皮切りに受入れ業務が開始され、四七二世帯九七四人の海外引揚者を受け入れている⁶。ちなみに沖縄では一九四五年(昭和二〇)十月から一九五二年(昭和二七)までに、沖縄島を中心に約十七万人の海外引揚者を受け入れている⁷。フィリピン、南洋群島、台湾、満州からの引揚者は、消息を尋ねあい、沖縄県ダバオ会、南洋群島帰還者会、沖縄県台湾会、沖縄満州会等の引揚者を中心にした組織を結成し、旧交を温め親睦を深めている。また現地を訪れ、慰霊祭や現地の人び



パラオに移住した屋富祖出身の比嘉良徳（後列右より2人目、1940年頃）比嘉良徳提供

との交流も行っている。引揚者が高齢化する現在、記録・記憶の継承活動も行われている。

本章で取り上げた移民は、日本の敗戦によって築いた資産、肉親を失い、沖縄へ帰ってきたが、これらの経験は消えることはない。渡航先では、異文化を受容し、自文化を相対化させてきた。さらに引揚げ後は、負の遺産である過酷な体験をプラスに転化させ、より深く自らのものとしてきたと考えられる。「フィリピン経験」「南洋経験」「台湾経験」「満州経験」は、それぞれの人生に影響を与え、戦後の沖縄を生き抜いてきた。その生き様はウラシーンチュの財産であり、地域の財産である。「移民経験」は、現実（いま）を生きる私たちに多くのことを気づかせてくれるだろう。

1 パスポートなしでの出国・入域ができた南洋群島や台湾、満州の渡航は、本来ならば「移住」「出稼ぎ」「殖民」とすべきであるが、ここでは「移民」を使用する。

2 フィリピンは、「海外旅券下付表」（浦添市移民史編集委員会『浦添市移民史証言・資料編』浦添市教育委員会 二〇一四年二三七―三〇五頁）によると三三九人で、一九二七年（昭和二）一〇月一日現在のダバオ在住者（同書三一四―三七七頁）は、一〇二人となっている。

3 『浦添市移民史 証言・資料編』四七六―五二二頁。

4 一八九八年の米西戦争に勝利した米国は、スペインの植民地であったフィリピン、グアム、プエルトリコを領有した。

5 金武町史編さん委員会『金武町史 第一巻 移民・本篇』金武町教育委員会一九九六年 四二九―四三〇頁

6 浦添市史編集委員会『浦添市史 第一巻通史編 浦添のあゆみ』浦添市教育委員会 一九八九年 一五五―一五六頁

7 安仁屋政昭『移民政策』『沖縄戦研究Ⅰ』沖縄県教育委員会 一九九八年 一二七頁

第一節 フィリピン

一 フィリピンの概況とその歴史¹⁾

フィリピンは東南アジアの太平洋側に位置する国で、南北約一八〇〇キロ、東西約一〇〇〇キロに及ぶ範囲に、七〇〇〇近くもの大小様々な島々で構成されている。そのうち、多くの日本人や沖縄人が移民したミンダナオ島は、フィリピンの南島側に位置する大きな島である。熱帯気候に属し、年平均気温は二七、一℃で、水分さえあれば植物は一年中成長を続けることが可能となる。

もともと、フィリピン内部はバランガイ（元々は小船の意味）と呼ばれる三〇〜一〇〇戸単位の集落が点在する社会であった。そこにイスラム文化も入りはじめ、フィリピン南部のスールー諸島には、十四世紀後半からイスラム社会が形成されていた。

一五四三年には、フィリピンの中央部に位置するサマル島とレイテ島に、スペインの遠征隊が到着し、これらの島々をスペイン王子フェリペ二世にちなんで「フェリペナス」と名づけた。これが全諸島の名称となり、フィリピンの国名になった。

その後はスペインの支配下となり、同じくスペインが支配するメキシコを通しての管理が一五八四年まで続いた。後の一八二一年にメキシコが独立すると、スペイン本国の直轄となった。スペインはフィリピンを中継基地にし、中国の物資をメキシコに送り、それを中南米産出の銀と交換する交易をおこなった。

その後、一七六二〜四年にかけて、進出してきたイギリスによってマニラが占領され、それ以降はスペインが独占的な経済活動ができなくなる一方で、一七八九年にアジアの産物を運ぶ外国船がマニラ港に入ることが許可される。その後、フィリピン各地の港が開港され、外国貿易が発達し、フィリピン内部からはマニラ麻や砂糖、タバコ等の商品作物が輸出され、かつ大量のイギリス製の商品が輸入されることになる。

商品作物の輸出は、それを生産する仕組みとして、大土地所有制を発生させた。十九世紀後半には、カトリック修道会やスペイン人、さらにはスペイン系や華人系のメステイソー（混血）が大地主となり、土地をなくした農民が大地主の下で働く小作農や農業労働者

図1 フィリピン位置図



作成：宮内久光

1

概要については、綾部恒雄・石井米雄『もっと知りたいフィリピン 第二版』弘文堂、一九九九、鈴木静夫『物語フィリピンの歴史』中央公論社、一九九七を使用した。ここでは、フィリピン移民が担うことになったマニラ麻栽培をめぐる土地等のあり方に引き付けて、概況をまとめた。

に転落していった。一方で、富を蓄えた富裕層のなかには、知識階級も生まれ（その多くがメステイソー）、そのなかからホセ・リサールを初めとする知識人が誕生し、フィリピンの独立を訴えるようになる。

一八九八年四月に、スペインとアメリカとの間で戦争がぼつ発し（米西戦争）、亡命していたフィリピンの知識人アギナルドが同年六月に国内で革命政府を樹立した。そして、同年十二月にアメリカとスペインとの間で和平条約が結ばれ、その後はフィリピンに独立した国家が誕生する。

ところが、今度はアメリカがフィリピンへ攻め入り、一八九九年二月に戦争となり（比米戦争）、一九〇二年七月にはアメリカがフィリピンでの戦争終結を宣言するが、山地や他の地域での戦闘が続いた。

その後、アメリカもまた貿易による儲けを目指すようになる。一九〇九年に制定されたペイン＝オルドリッチ関税法により、アメリカからフィリピンへの輸出品（工業製品等）は全面的に無税となり、さらにフィリピンからアメリカへの輸出は、一時的な規制はあったが、砂糖やココナツ製品、タバコ、そしてマニラ麻が無税で輸出された。

日本人移民がフィリピンに入るようになったのは、アメリカのフィリピン占領後、道路工事やマニラ麻栽培の労働力としてのことである。（井口学）

二 フィリピンへの渡航と定住

（一）初期の移民―ベンゲット移民を中心に

明治二〇年前後には、日本国内でフィリピンへの移植民を主張する人々がおり、そのなかでサトウキビ等の栽培を担う農業出稼ぎ移民の送り出しが提案された。²

日本人が本格的に移民として参加するようになったのは、フィリピン北部のバギオへの道路工事（いわゆるベンゲット道路）であった。³これは避暑地として注目されたバギオに向けての工事で、一九〇一年（明治三四）から工事ははじまったが、工事の停滞と労働力不足により、その二年後から日本人労働者を本格的に雇い入れた。日本人だけでなく、

2

早瀬晋三『タバオ国』の在留邦人『日本占領下のフィリピン』岩波書店
一九九六 二九二―三頁

3

以下のベンゲット移民の内容は、早瀬晋三『ベンゲット移民』の虚像と実像』同文館出版 一九八九を参照した。

フィリピン人や中国人、アメリカ人も参加して工事が進められた。労働者の出入りが激しい工事で正確な人数の把握は難しいが、それでも四年間の間に月平均約二八〇〇名の労働者（うち日本人は月平均約七五〇名）⁴が働いた。

こうして一九〇五年（明治三八）に道路が開通した。

沖縄のフィリピン移民は、このベンゲット道路開発に伴う労働力として渡航したのがはじまりで、工事終了の一年前の一九〇四年（明治三七）から渡航している。移民会社の渡航者名簿からは、沖縄からベンゲット移民が一〇八名いたことが確認できる。⁵ただ、旅券下付表を見る限り、このベンゲット移民に浦添出身者は確認できない。

この労働も危険と引き換えに儲かるとの話はあったが、沖縄人移民にとっては一年弱の労働でしかなく、その多くがマニラ麻栽培の中心地となるダバオに移動した。

（二）マニラ麻栽培をめぐる

後に日本人移民の労働を支えることとなるマニラ麻栽培であるが、ベンゲット移民以前にもそれに関わる日本人移民がいた。⁶一九〇〇年代初期のフィリピンのマニラ麻産地（十州）では、労働者不足とその短い労働時間（一ヶ月に一〇〇十五日間の労働）のため、麻の収穫が間に合わず、そのまま腐ってしまうのが全体の過半数までに至ったという。そのなかで、麻栽培をしているアラビヤ人のアワド氏がマニラに行った際に、現地で仕事もなく困っている日本人移民三〇名を一年契約で雇い、ダバオで働かせたのが日本人移民のマニラ麻栽培のはじまりであるという。ただし、その労働者も契約終了後には、継続の要請があったにもかかわらず、ベンゲット工事や他の麻栽培へ行ってしまった。ただ、その後からダバオの麻栽培事業が盛んになり、そこで日本人労働者を希望する者が続くようになった。

その理由として在マニラ領事によると、刈り取った麻を挽いて繊維をとる仕事では、現地のモロ族が挽く麻よりも日本人が挽いたほうが色白く高価で売ることができからだと言っている。それゆえに、麻栽培の仕事では、植え付けは現地のモロ族かボルネオ地方

4 早瀬前掲書（一九八九）六九頁の「月別、国別ベンゲット道路工事労働者数（月平均）」からの算出である。

5 名護市史編さん委員会『名護市史本編・五 出稼ぎと移民Ⅱ』名護市役所二〇〇八 六二頁 新聞記事にはこれよりも多い人数が出てくるが、その根拠は不明である。

6 以下は「明治三十七年中 比律賓島来着本邦移民ノ概況」明治三十八年三月二十三日付（『米国比律賓群島へ本邦人出稼一件』第三巻所収）からの引用である。

の原住民がおこない、麻挽きは日本人が担うのが良いと現地では認識されていたという。賃金は他の麻耕地と同じく、収穫された麻売り上げの半分を受け取る方式で、報告内では基本的な日本人労働者は一ヶ月もすれば平均して日収が一ペソ三〜四〇銭はあるとしている。

こうしてスペイン人やフィリピン人の麻山主十二〜三名がベンゲット工事後の日本人労働者約三四〇名を雇い入れ（麻山一件につき約二六名）、報告のあった一九〇五年（明治三八）三月現在では、帰国や病没により二七〇〜二八〇名が麻山での労働に従事しているところとある。

マニラ麻の周辺⁷

フィリピンのマニラ麻は、当初、現地からの輸出貿易品に入るものではなかったが、一八八一年に初めてアメリカに輸出され、それ以降は好調に輸出されていった。後にはロシア麻が品薄になったことを受けて、イギリスもマニラ麻を求めるようになり、アメリカと競争になったが、結局はアメリカがマニラ麻を独占することになった。

麻栽培地では、かつてスペインの造船所があり、そこに船舶用綱の材料を提供していたビコール地方が主要な位置にあった。第一次世界大戦以降は、ビコール地方での現地人による麻生産は衰え、代わりにダバオ地方で低コストかつ高品質の麻生産が日本人を中心にして急増した。

一方でアメリカの製綱業者は、ダバオに限らず低コスト高品質のマニラ麻を常に求めており、パナマ運河地帯で麻栽培を試みたが失敗し、結局はダバオのマニラ麻に頼ることになった。

こうした麻に対するアメリカ側の思惑が、一貫してダバオの麻栽培の背景にあった。

麻の栽培者側に、目を転じると、刈り取って繊維を取りだした麻は業者へと売却し、売上の約一割を土地所有者（邦人会社⁸、もしくは地主）に支払った。麻の売却価格は、当初は邦人会社の言い値であったが、後になると、麻の景気を見極めたうえで、麻が高く売れ

7

以下の内容は、早瀬晋三「殖民統治下のフィリピンにおけるマニラ麻産業」『東南アジア 歴史と文化』十五 東南アジア史学会 一九八六を参照した。

8

戦前の各種文献には、日本人会社のことを「邦人会社」と表記しており、本論もこれに従った。

る時期に栽培者自身が売却するまでになった。

ダバオの自営者の平均持ち株は一万株の麻畑（一〇町歩⁹分）となっており、この規模で新しい開墾地で栽培をすると、麻価格を一ピクル（五ペソ）計算で、かかる総費用は一万六七〇〇ペソ、売却価格が二万五〇〇〇ペソで、先の総費用を差し引くと八三〇〇ペソの収入となる。実際は麻の売却価格によって、収入は大きく左右された。

マニラ麻労働と土地の入手の現場をめぐって

一九〇四年（明治三七）にフィリピンへ渡航したある移民は、当初は風土病にかかって二年間を過ごしたが、その後の一年近くは「麻製造仕事」で一日三〜五円（原文も円表示）を得て、資金を貯めた。そして一九〇七年（明治四〇）に、六人で組合（一人あたり一株一〇〇円）をつくり、麻畑一〇〇〇坪を「買受」¹⁰けた（実態は土地の租借）。そして、組合の名前を「農事資本合名会社」と名づけた。これは後述するように、現地法人でなければ、土地の租借ができない事情によるものであった。このように、借りた工地で朝麻の栽培や製造に従事してお金を貯めてから、集団でお金を出し合って麻栽培の土地を手する方法が取られた。

ただ、ジャングルを切り開いて開墾した土地のため、ある日本人移民は、「山にはさる、大蛇、トカゲ、川には例の鰐という風に動物園で仕事をしてゐるやうでした」と証言している。¹¹浦添出身者からも、麻畑の川でワニを捕ったり、イモを盗みに来たサルを追い払った、さらには自宅の麻倉庫に鹿が飛び込んだことの話も出てくる。¹²

なお耕地の土地は生産を続けると地力が衰えるため、より生産力のある耕地を求めて移動することが頻繁にあった。当然、そのために麻生産のなかで資本を貯めていく。新しい耕地への移動の際には、別の人に土地（の麻山そのもの）を売り払い、さらなる未開拓地へと進む。

9 一町歩は約一ヘクタール



アバカ工場跡に残された
まのハゴタンの車輪
(2011年) 三木健撮影

10 伊宜清六「比律賓通信」『琉球新報』
一九〇九年十二月二七日付 一頁

11 後藤章孝「ダバオ風土記（二十）」『ダ
バオ新聞』一九四三年五月十一日付
二頁

12 浦添市移民史編集委員会編『浦添市移
民史 証言・資料編』浦添市教育委員
会 二〇一四 一〇九〜一六頁

(三) 太田興業の設立とその周辺

ここでダバオのマニラ麻栽培を確立させたのは、太田恭三郎である。¹³元々、太田はベンゲットで働く労働者に物品を販売する仕事をしていたが、工事終了後に日本人労働者と共にダバオへ移動した。一九〇六年（明治三九）に、バゴ区域にて官有地を購入し、マニラ麻栽培をはじめた。ところが後にダバオ州知事から土地の退去命令が出され、収穫の一割を政府に上納することで退去は免れたが、今後の土地利用は厳しくなった。そこで官有地（一〇二四町歩）の購入と租借が法的に可能な現地フィリピンの法人設立を計画する。

なお、このマニラ麻栽培の土地利用をめぐる現地の法律との摩擦は、これ以降も続き、日本人移民を悩ますことになる。外国での土地利用は、現地の法律とそれを制定する政治状況に左右される側面が大きく、その点で植民地と異なることに注意が必要である。

こうして、一九〇七年（明治四〇）年五月三日に、現地法人である太田興業株式会社を設立し、本格的なマニラ麻栽培をはじめた。太田興業には、沖縄出身の大城孝蔵が役員としていたため、多くの沖縄人移民が採用されることになった。

太田興業が設立された時期から、次第に麻挽きのための労働から、麻山ごと栽培と収穫を請け負うシステムに変化していったようである。この請け負いのことを一般に「自営」と呼んでいた。実際、同年七月十六日に太田興業が東洋移民会社に宛てた文書のなかに、通常の麻挽き業の説明と共に麻耕作の「自営」についても言及しており、それを希望する者には太田興業から耕地を貸して、収穫高の一割を地租として会社に支払わせるとあった。¹⁴これ以降の外務省文書にも、麻挽き業等の説明と共に麻の「自営」について掲載されるようになる。

後にはフィリピン人や原住民の土地でも同様に、開墾から麻栽培までを日本人に請け負わせる「自営」がおこなわれた。ある小湾出身の移民は、土地はフィリピンの人から借りただけだが、「所有権がないだけで、使用权はこつちが握っています」と述べているの¹⁵は、的確な表現だろう。

一九〇八年（明治四一）二月の時点で、ダバオにいる麻挽き労働者三〇〇名のうち、二

13 以下の内容は、蒲原前掲書 八一～六頁並びに海外研究所編『太田恭三郎氏追想録』同刊 一九三七を参照した。

14 「太田興業株式会社所要労働者 東洋移民合資会社取扱之件」明治四十一年七月（『移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自明治三十八年至四十二年』所収）

15 法政大学沖縄文化研究所・小湾字誌調査委員会『小湾字誌―沖縄戦・米占領下で失われた集落の復元』浦添市小湾字誌編集委員会 一九九五 五四七頁

〇〇名はベンゲット道路工事に従事した人で、このなかに沖縄人移民が数十名いた。そして残り一〇〇名は太田興業の募集によるもので、半分以上が沖縄人移民であった。¹⁶

(四) ダバオ渡航をめぐる

マニラ麻栽培の組織的な経営をきっかけに、多くの日本人移民がダバオに渡航することになる。ただ、ここでも米国の法律との兼ね合いがあり、現地の会社との契約による移民（契約移民）が米国法で禁止されていた。そこで渡航希望者は本人の「自由意志」で申し込むと、会社がその便宜を図るとの建前になっていた。¹⁷ もちろん、実態は現地の邦人会社との契約に基づく労働であった。

さらにフィリピン側からの警戒をさけるため、一度に多くの人数を渡航させずに、一ヶ月一五〇名以内でかつ毎船五〇名を越えない範囲での乗船を求めている。¹⁸

ちなみに、旅券下付表から確認できる浦添で初めてのフィリピン渡航は、宮城牛と宮城陸山の二人（両者とも城間出身）で一九〇八年（明治四二）三月三十一日の旅券下付となっている。

後にダバオで初期に大規模なマニラ麻栽培を担い、戦後に妻方の実家がある浦添へ移住した真栄平房仁（首里出身、移民当時は与那原在住）は、旅券下付表には一九〇四年（明治三七）四月三〇日にマレーシアへ渡航の旅券が下付された¹⁹とあり、マレーシアからフィリピンに渡ったようである。「南洋と本県移民 自由移民歓迎」との記事（『琉球新報』一九一六年十一月二六日付）には、台湾経由で香港に行き、そこから北ボルネオ、フィリピンのセブ島へと移動し、ダバオのあるミンダナオ島へ渡る人々が多いとある。²⁰ 具志川市の調査によると、正式な手続きの渡航では長い日数がかかるため、正式な旅券ではない形での渡航に流れたらしく、それに移民周旋会社も簡単に手助けをしたとある。筆者の私見では、こうした渡航には、前出した大多数の渡航によるフィリピン側からの警戒をさける意図もあったのではないかと思われる。

このような他地域からフィリピンに向かうあり方は、浦添でも明治末期から大正初期に

16

「号外 移民事項調査報告書提出ノ件」明治四十一年二月十四日（明治三十八年二月 同明治四二年四月 マニラ領事館報告書）所収

17

「第八四四号ノ三 移民募集ノ件報告」明治四十年九月廿日付（『移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自明治三十八年至四十二年』所収）

18

「第六六一号 比律賓群島行農夫及大工取扱認可ノ件」明治四十四年二月一日付（『移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自明治四十五年至大正元年』所収）

19

与那原町史編集委員会『与那原町史資料編一 移民』与那原町教育委員会二〇〇六 一四二頁

20

この記事は、具志川市史編さん室『移民・出稼ぎ関係新聞集成』具志川市教育委員会 二〇〇二に依った。以下の文章は同書の「解説」（二七頁）からの引用である。

かけて、その形跡が見られる。

一九一二年（大正元）十二月七日付で、石川常増（宮城出身）が東洋移民会社の扱いでフィリピンへの旅券が下付され、その前日にも同じ東洋移民会社で宮城出身者一名と屋富祖出身者三名がマレー半島への旅券が下付されている。²¹これらの渡航者も、実際はフィリピンへ渡ったのではないかと思われる。

（五）第一次世界大戦前後の好景気と不景気²²

第一次世界大戦が一九一四年（大正三）に勃発し、四年後の一九一八年（大正七）まで続いた。その間は戦争による特需で、マニラ麻の好景気がその翌年まで続いた。

まず戦争直前の一九一三年（大正二）には、麻相場が三年前の一九一〇年（明治四三）と比べて、約六割も高くなり、これと平行して太田興業では東洋移民会社に対して、農夫一〇〇名の追加を申し出ている。²³

さらに一九一四年（大正三）には、同じように太田興業が東洋移民会社に農夫二〇〇名の追加を申し出ている。なお、ここでは麻相場の好調により、麻耕作の「独立自営」に転じる人も少なくなく、農業労働者が不足していた。²⁴一方で、同年に農業労働者の数名に「小作式農業」をさせたところ、労働能率が増加し収入も増え、「地主」として定着したため、賃金労働で働く農業労働者以外にも、こうした「小作方式」による移民を呼びたいとしている。ちなみに、この方法は先に多額の資金が必要で、かつ初期には賃金もないが、後の収穫により、賃金労働よりも収入が多いとしている。²⁵

好景気の後押しもあり、一九一五年（大正四年）時点で、太田興業は租借していた官有地一〇二四ヘクタールのほとんどを開墾し、さらに事業拡大のため、現地法人会社二社（ミントルプランテーション株式会社、リバーサイドプランテーション株式会社）の名義で、官有地一六〇〇町歩を二五年間租借し、それらの開発と麻栽培のために移民二〇〇名を東洋移民会社に募集するまでになった。²⁶

なお同年の十二月時点で、麻耕作や麻挽きに従事していた人の多くが、蓄財を経て「小

21 浦添市移民史編集委員会 前掲書 二五七頁

22 以下にあげていくマニラ麻の景気に関する概要は、蒲原廣二『ダバオ邦人開拓史』日比新聞社、一九三八、並びに柴田善雅『南洋日系栽培会社の時代』日本経済評論社 二〇〇五を参照した。

23 『「ダバオ」行農夫渡航許可方稟請ノ件』大正二年十一月十二日付（「移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自大正二年至四年」所収）

24 『「ダバオ」太田興業會社行農夫移民渡航許可方稟請ノ件』大正三年二月二十八日付（「移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自大正二年至四年」所収）

25 太田恭三郎が東洋移民業務代理人に宛てた文書（大正四年十月十八日付）による。（「移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自大正四年至五年」所収）

26 「太田興業株式會社行農業移民渡航許可方稟請ノ件」大正四年一月四日付（「移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自大正四年至五年」所収）

作自営者」になる傾向があり、約三〇〇人がこうした「自営」に従事していた。²⁷ベンゲット道路工事が終わってダバオのマニラ麻に、日本人移民が関わりだしてから、約九年後のことである。

一九一五年（大正四）時点で、太田興業やその他の日本人が所有し租借した土地は一万町歩になったが、その三分の一しか開墾できず、ここに「小作式移民」を送れば三〇〇〇人を受け入れる余地があったとしている。²⁸

一方で、一九一六年（大正五）には、神山鴻吉（名護出身）と真栄平房仁の二人が、現地の土地八〇〇ヘクタールを租借し、ラサン拓殖会社を組織し、浦添出身者の拠点の一つとなった。真栄平房仁は、字宮城出身で麻山経営で成功した翁長武太（大正二年六月旅券下付³⁰）の二女武子（昭和六年一〇月に再渡航のために旅券が下付³¹されている）と昭和八年に結婚。房仁・武子夫妻の長男である真栄平孝さん（屋富祖在住）の証言によれば、房仁はラサン拓殖株式会社の社長を務めながら、当時、ラワン材の輸入のためにフィリピンに進出していた三井物産で、スペイン語、タガログ語、ビサヤ語の通訳の仕事の本業としていたという。三井の社宅に住み、フィリピン人のメイドに食事の用意をしてもらっていた。食事は洋食が中心で、朝食は中国人が売りに来たパンと牛乳であった。学校へはスクールバスで通い、英語の授業もあったという。戦争が近づくと、房仁・武子夫妻、孝さん、二人の妹たちは沖縄に引き揚げてきた。房仁はフィリピンに戻ろうとしたが、熊本で足止めされた。孝さんたちは、従兄弟や親戚も一緒に、本島南部に避難し戦闘に巻き込まれたが、幸い亡くなった人はいなかった。戦後、孝一家は屋富祖に移り住み、父房仁も一九四六年に家族と再会できた。³²

しかし邦人会社が申請した土地には原住民が住んでおり、配慮もなく開発したことが原因で、原住民に襲撃されることも増えた。このため一九一八年（大正七）年の麻の好景気から一九一二年（大正一〇）の不景気に至る間に、殺害された（沖縄出身者を含む）³³日本人が百名を突破するまでになった。



真栄平房仁の家族 1939年ダバオの写真館にて
真栄平孝提供

- 27 「公第三〇七号 小作移民渡航許可方稟請ノ件」大正四年十二月四日付（移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 自大正四年至五年「所収」）
注26に同じ。
- 28 村山明德『比律賓概要と沖縄縣人』ダバオ時報社 一九三九 四一頁 同頁によると、こうした拓殖会社と小作人（自営者）との間で、麻の買い取り価格をめぐる軋轢がしばしばあり、ラサン拓殖会社も例外ではなかったようである。
- 30 浦添市移民史編集委員会前掲書 二五八頁
- 31 浦添市移民史編集委員会前掲書 二九七頁。
- 32 二〇一四年（平成二六）四月に浦添市内で実施した聞き取り調査により得られた情報
星篤比古「ダヴァオ開拓の人々」『海を越えて』第五巻七号 一九四二五九～六三頁
- 33

浦添出身者の集中渡航―宮城出身者を中心に―

麻の好景気を背景にして、一九二二（大正元々四）の間に、はじめて浦添出身者の集中的な渡航が旅券下付表から見られる。この間に十四名の渡航があり、そのうち十二名が字宮城出身者であった。

このなかには、麻栽培で成功し、後の『現代沖縄県人名鑑』に登場する翁長盛重と翁長（戦後は吉長姓）武太（いずれも字宮城）がおり、二人とも大正二年にダバオに上陸し、太田興業の耕地であるバゴ耕地で働いている。現地では、武太が三ヶ年マニラ麻栽培の自営をし、盛重が二年間現地で働いていた（おそらくマニラ麻栽培関係の農業労働³⁴）。

一九〇八年（明治四一）の最初期の渡航者二名を含めて、一九一五年（大正四）までのこれらの渡航者は、太田興業が管理する耕地（バゴ等）で働いていたものと思われる。

こうした好景気による後押しもあったと思われるが、前出の翁長盛重、武太は、太田興業のバゴ耕地を離れる。盛重は一九一五年（大正四）にタギヤ耕地に移動して、水車を利用した麻挽き機を利用して、麻の生産に励んだ。武太は一九一七年（大正六）にラサン神山耕地に移動して、開墾に従事し、麻山の自営者となった³⁵。

好景気時には労働者不足も招き、一九一七年（大正六）には、麻収穫の労働者が足りず、やむなくミンダナオ島北部のセブ島からフィリピン人労働者を雇うまでになった³⁶。

こうして、麻の好景気が移民の導入の呼び水となった。

麻好景気の末となる一九一八年（大正七）から一九二〇年（大正九）にかけても、浦添出身者が集中的に渡航し、この間には十三名の渡航があり、ここでも宮城出身者が九名を占めた。

ここで重要なのは、妻となる女性四名が、同伴並びに呼び寄せで渡航しており、この時点で家庭を築きつつあることが確認できる。これもまた好景気によって経済基盤が固まったことも、その背景にあると思われる。ちなみに、これら四名の妻のうち、二名の夫については、これ以前に旅券の下付が確認できない。

ただ、第一次世界大戦が一九一八年（大正七）で終わった後、その反動による不景気で



ダバオ港棧橋『ダバオ開拓35周年記念写真帖』1940年



旧ダバオ港の棧橋（2011年）三木健撮影

34 大宜味朝徳『現代沖縄県人名鑑』海外研究所 一九三八 八六頁、九五頁

35 大宜味前掲書 八六頁、九五頁

36 「公第二八号『ダバオ』行農業移民渡航方稟請ノ件」大正六年一月廿九日付『移民取扱人ヨリ米領比律賓群島行移民取扱方許可出願雑件 大正五〇六年』所収

麻価格が暴落し、不況が一九二三年（大正十二年）まで及んだ。

このなかで麻山を持たない者はすぐに帰国したが、食糧不足等も重なり、止むを得ず麻山（正確には麻山の麻そのもの）を手放す自営者も出てきた。こうして、一九一八年（大正七）には三二〇〇人いた自営者が、その八年後の一九二六年（大正十五）には、その約半分の一四一九名までになった。³⁷

この間の沖縄人移民の生活は厳しく、例えば名護のとある移民は、過労で失明寸前になり、帰国を希望する手紙を郷里に何度も送っていた。³⁸ 大正末期からダバオで麻栽培を営んだ翁長盛俊（宮城出身）も、不況下に麻栽培の傍らで野菜作りをしながら耐えたという。³⁹ おそらく、他の浦添出身者も同じような過酷な生活であったと思われる。

（六）原住民の土地への入植―大正末期～昭和初期―

第一次の不況からようやく立ち直り、マニラ麻の第二次好況が一九二四年（大正十三）から一九二八年（昭和三）まで続いた。そして、その反動として不景気が一九二九年（昭和四）からはじまり、一九三四年（昭和九）まで続いたとされる。

不景気が峠を越えつつあった昭和初期には、原住民の土地への入植も目立つようになる。⁴⁰ これは、原住民の女性と内縁関係を持つて、その名義で公有地の払下げや租借をして、そこで麻栽培をおこなうものであった。一方で、原住民（バゴボ族）やフィリピン人に、こうした土地に対して同様の申請をさせる場合もあった。

その理由には、邦人会社の耕地は十数年たち土地が衰え、未開発の土地がすでになかったこと。さらに原住民の土地が肥えており、収穫高が高かったこと等が、領事館の報告にあがっている。

原住民の土地への入植地では、ダバオ南西のアポ山麓近くのカテガン、バラカタン、サントクロースの西方山麓地帯が多く、これらの場所の入植件数は約三〇〇件で、うち原住民女性との内縁関係に基づくのが約六〇名いたという。耕作面積は約二〇〇〇町歩で、植え付けされた麻株が約二〇〇万本に達した。

37 蒲原前掲書 一四〇～一四六頁

38 名護市史編さん委員会前掲書 八〇頁

39 久志助親『ダバオ開拓三十五周年記念写真帖』一九三〇 久志真美館「マナイ 翁長盛俊」の項目 ※ここでは再発行版を使用した。

40 以下は、「蕃人利用ニ関スル邦人ノ土地法違反ニ関スル件」昭和七年七月、並びに「『ダヴァオ』ニ於ケル蛮人耕地入植邦人状況（高田書記生視察報告）」昭和七年八月か（『本邦移民関係雑件 比島ノ部』昭和十二年十二月所収を踏まえたものである）。

ただここでもやはり原住民とのトラブルが発生し、一九二七年（昭和二）頃から沖縄出身者を含む日本人が殺害される事件が再発する。⁴¹

浦添出身者の第一次渡航ピーク

耕地が原住民の土地へと移動するなか、浦添出身者の第一次渡航ピークが一九二六年（大正十五）から一九三〇年（昭和五）の四年間にかけて発生する（口絵表2参照）。

当時は、一九二七年（昭和二）の金融恐慌、一九二八～九年（昭和四～五）の昭和恐慌という立て続けの不景気が背景となつて、フィリピンへ渡航する向きもあった。ある移民周旋業者は座談会のなかで「本縣は経済疲労し比島渡航希望者は非常に多い」と発言している。⁴³ 例えば、一九三〇年（昭和五）五月に渡航（旅券の下付は一九二九年六月十五日）した宮城茂（仲間出身）は、地元で働いてもお金が貯まらないなかで、（移民の）募集がきっかけで土地を売って渡航費を工面したという。⁴⁴

さらに、一九二四年（大正十三）の排日移民法によるアメリカ本土とハワイへの移民禁止（配偶者等の渡航は除く）があり、これらの地域に行けなくなった人々が他国に渡航するようになった。実際、一九二六年（大正十五）に渡航した宮平仁王（小湾出身）は、当初はハワイ渡航を希望したが、それができなくなりフィリピンへ渡ったのだという。⁴⁵ 一九三〇年（昭和五）に渡航した平良仁和（経塚出身、旅券下付表では前田出身とある）も、ハワイ渡航のつもりが、なぜかフィリピンで降ろされたとの話が伝わっている。⁴⁶

これは南米も同様の状況があり、一九二九年（昭和四）にフィリピン渡航したある移民は、移民会社と相談したところ、フィリピンは行けるが、南米のペルーやブラジルは呼び寄せ以外はダメだと言われたという。また、渡航費も南米よりはフィリピンが安いとの話もあった（それでもフィリピン渡航は四〇〇円だったという）。⁴⁷

前述のピークのなかでも一九二七年（昭和二）が最大のピークで、四四人の渡航が確認でき、ここでも最大の渡航数は字宮城であった。またこの間は、牧港、城間、仲間、伊祖でも多くの渡航者が目に付く。

41 星前掲書 六三～四頁

42 琉球政府『沖縄県史 第三卷各論編二 経済』同刊 一九七二 六五四～六五五頁を参照した。

43 「松本日本人会長を中心に 比島移民事情（上） 懇談会開かる」『沖縄朝日新聞』一九三〇年（昭和五）十一月八日付なおこの発言のなかで、渡航に必要な見世金六五円を調達する困難を訴えている。

44 字仲間字誌編集委員会『字誌なかま』浦添市字仲間自治会 一九九一 四二一頁

45 浦添市移民史編集委員会前掲書一〇九～一一〇頁

46 浦添市移民史編集委員会前掲書一一三～一一五頁

47 親泊元信『カミジュー自伝』同刊 一九九〇 五二～五三頁 なお移民会社では、移民希望者から受け取ったお金を高金利で貸し付けて、さらなる利潤を得たとの話もあったという（五四頁）。

宮城出身者では引き続き妻の呼び寄せが続くが、一方で牧港、屋富祖、前田、内間、小湾、沢岬、西原といったこれまで旅券下付表から出てこなかった地域からの渡航者も確認できるようになり、渡航者の出身地の幅が広がった。ただ、これらの地域は単独の渡航が主で、妻の呼び寄せは見当たらない。

一九二六年（大正十五）に渡航した又吉蒲戸（牧港出身）は、その三年前の一九二三年（大正十二）に発生した関東大震災の片付けで上京した後に、フィリピンへ渡った。

なお一九二七年（昭和二）一〇月一日現在の「ダバオ在留の縣人調」からは、この時点での浦添出身者の動向が確認できる。⁴⁸

これによると、浦添出身者の数は一〇二名（そのうち妻や子供は十五名、以下の概算では妻子の人数は省く）で、そのうち麻山を経営する者（自営者）が十四名、妻子を持つ者が七名である。さらに、妻子を持つ人がかつ麻山経営者は三名⁴⁹だけで、石川仁王、翁長武太、翁長盛重（いずれも宮城出身）で、いずれも初期の渡航者である。

耕地で見えていくと、この時点でも初期の開拓地であったバゴ耕地（太田興業の開拓地）に牧港（十一名）を筆頭に二六名もの人々が依然としており、おそらく麻山の経営よりは農業労働者としての活動が主であっただろう。一方で、原住民の土地で一九一七年（大正六）から開拓されたラサン神山耕地には二三名おり、宮城出身者が十六名でかつ麻山経営者が三名いた。続いて多いのはタギヤ（タギア）で、バゴ耕地南側に位置する耕地で、宮城一〇名（うち麻山経営者四名）、伊祖七名（うち麻山経営者二名）となっている。またラサン神山耕地の東側に位置するイホ（元々は名護の神山鴻吉の会社（イホ会社）の土地で、一九二七年（昭和二）以前に太田興業へ譲渡）にも宮城と伊祖出身者が各二名おり、全員が麻山経営者である。

他にもバヤパス、ローヤン、ベニト、テガト、ダバオ、ビエダット、ドムイ、バンガスで、少数の浦添出身者が農業労働者を中心に行っていたことが確認できる。

図2 ダバオにおけるウラシーンチュの分布（1928年）



『北中城村史』第3巻 移民・本編（2001年）444頁の地図をもとに『比津賓概要と沖縄県人』徳山明德著、文明社より宮内久光作成。

48 村山前掲書 六一～六四頁

49 同一覧にて、「麻請負」と表記されているが、耕作地の面積がない者は省いた。

50 ラサンは広い地域であったようで、そのなかの耕地ごとにラサン〇〇と呼ばれる。

その後、一九三二年（昭和七）年頃のダバオは、日本人が約一万人に達し、そのなかで原住民の土地に入植したのが一二〇〇名に達し、沖縄人移民も多かったという。⁵¹

一九三四年（昭和九）一〇月一日現在には、ダバオ州の日本人一万三〇六五名のうち、栽培業や耕作請負業が七四六四名、耕地労働者二六〇〇名となり、これらのマニラ麻栽培関係者と思われる人数が一万六四人（家族込み）となった。こうして、ダバオ在住日本人の約八割がマニラ麻栽培の関係者となった。⁵² 耕地労働者はこの当時はすでに現地の労働者を雇い入れる状況になっていたため、ここである耕作請負業よりもずっと少ない人数となっている。

浦添出身者の第二次渡航ピーク

一九三四年（昭和九）から一九三八（昭和十三）にかけて、浦添出身者の渡航が二回目のピークを迎える（口絵表2参照）。その最大のピークは一九三七年（昭和十二）で、伊祖が十一名と最大の渡航数となった。昭和初期にフィリピンで生まれた男性からは、フィリピン移民は伊祖が多いとの話も聞かれるが、この第二次渡航ピークにおける伊祖出身者の増加がそうした印象を持たせるまでになっていた。

また一九三五年（昭和一〇）から一九三六年に旅券が下付された人の中に、漁業関係でフィリピンに渡航した人を八人確認できる。⁵³

一九三七年（昭和十二年）には暴落した麻価格も持ち直しつつあった。⁵⁴ また、当時のフィリピン通貨（ペソ）と日本円のレートの関係で、ペソを日本円にすると倍の価格になった。⁵⁵ 同年に渡航した手登根順正（小湾出身）によると、戦争の気配が出てくるなか、アメリカがマニラ麻を買い取ったため景気がよくなり、借りた旅費もすぐに返したと証言している。⁵⁶ また大正末期に渡航したある男性は、渡航後に地元の土地を処分する程であったが、後には麻栽培で儲けて地元の土地を新たに入手しており、こうした好景気が背景にあったと考えられる。

数年後にアメリカとの戦争に直面するとはいえ、特需的な景気も含みつつ、当時の好景

51

以下は、『ダヴァオ』ニ於ケル蛮人耕地入植邦人状況（高田書記生視察報告）昭和七年八月か（『本邦移民関係雑件 比島ノ部』昭和十二年十二月所収）を踏まえたものである。

52

「昭和拾年六月 ダヴァオ邦人事情概要」（『本邦移民関係雑件 比島ノ部』昭和十二年十二月 所収）

53

浦添市移民史編集委員会前掲書二九八～三〇一頁

54

蒲原前掲書「ダバオ邦人開拓史年表」を参照。ただしこの表は一九三七年（昭和十二年）までの記載である。

55

字仲間誌編集委員会前掲書 四一三頁

56

法政大学沖縄文化研究所・小湾字誌調査委員会前掲書 五五六頁、五六二頁

気も渡航ピークの背景になった。

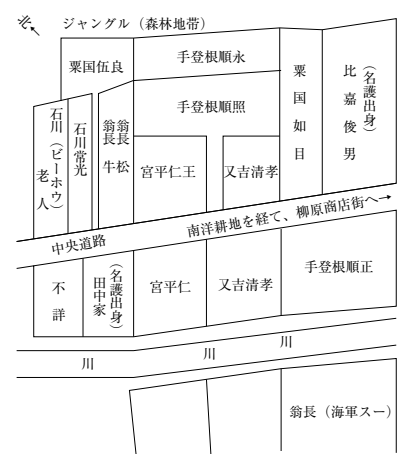
ここで目をひくのは、マナイ耕地という新しい開拓地の登場である。これはラサンの耕地内にあり、アタ族という原住民が居住していた。ここには一九二九～三六年（昭和四～十一）にかけて、浦添出身者の入耕が確認できる。⁵⁷ここに宮平仁王だけでなく、手登根順照、順正をはじめとする多くの小湾出身者がいたことも確認できる。⁵⁸これもやはりグループを組んでの麻栽培ではないかと思われる。いったん新たな拠点を築くと、そこに関係者が集まっていた。

ちなみに、小湾出身者はほとんどラサンとの証言もあるが、前出の「ダバオ在留の縣人調」（一九二七年一〇月一日現在）にてラサン耕地に小湾出身者が二名のみであったことを踏まえると、一九二七年（昭和二年）以降にラサン耕地（そのなかのマナイ耕地も含めて）で働く小湾出身者が増えたことがうかがえる。

また一九三八年（昭和十三）には、お金を貯めて帰郷し、事実上の「故郷に錦を飾る」人も出てくる。これは生産した麻だけでなく、所有する麻山の権利を売ることによる換金化もその要因で、麻山の自営者を目指す後続の人々の需要に根ざしたものである。一九二八年（昭和三）に渡航した宮里重安（城間出身）は、各地の麻山での労働を経て、バギオ耕地に持っていた麻山を全部売って三〇〇〇円を得て、一九三七年（昭和十二）に帰郷し、地元で赤瓦の家を建設し、雑貨商を営んだ。⁵⁹また一九三〇年（昭和五）に渡航した比嘉栄松（小湾出身）も、年齢のこともあり、戦前末期にはお金を貯めて沖縄に戻る準備をしていたようである。⁶⁰

このように沖縄出身者のほとんどが、麻栽培の仕事に直接従事していたが、それに直接係わらない仕事を模索する人もいた。一九三六年（昭和十一）に渡航した石川常次郎（宮城出身）は、その二年後に麻の入札に係わる仕事ウーコーヤー（麻の仲買人）を目指して、二〇歳で現地の小学校へ入学し、子供たちと一緒に英語とタガログ語を勉強した。ちなみに、当時の沖縄人人夫の給料が二〇～二五ペソであったのに対して、本土出身者のウーコーヤーは六〇ペソもあったという。⁶¹（井口学）

図3 マナイ耕地（アータ島）一部配置図



『小湾字誌－沖縄戦米軍占領下で失われた集落の復元』小湾字誌編集委員会、1995年より転載

57 久志助親前掲書を参照。

58 加藤久子『小湾生活誌 小湾字誌（戦中・戦後編）』小湾字誌編集委員会、二〇〇八 四九二～四九三頁

59 浦添市史編集委員会編『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』浦添市教育委員会 一九八四 四五二～四五三頁。「若い頃は役立たずと言われ、逃げるようにしてダバオに行ったんだが、帰ってきて信用を得ることが出来たわけです。三四歳の時には村会議員にも選出されました」（四五三頁）とある。

60 法政大学沖縄文化研究所・小湾字誌調査委員会前掲書 五四九頁

61 浦添市史編集委員会前掲書 四五九～四六〇頁

三 戦争と引揚げ⁶²

(一) 戦時下のダバオ

昭和一〇年代半ばになると、迫り来る戦争を危惧して、沖縄に引き揚げる動きがあった。

一九三九～四〇（昭和十四～五）年頃、知念英太郎さん（父親は内間出身）は迫ってくる戦争を心配し、沖縄が安全ということで、母親や兄弟と共に台湾経由で沖縄に戻り、父はそのままフィリピンに残った。⁶³

一九四一年（昭和十六）頃に、又吉英仁さん（父親は牧港出身）の一家も、父がフィリピンに残ったうえで、沖縄に引き揚げている。なお、又吉の一家は沖縄に引き揚げた後に、沖縄も危ないから疎開するようにとの手紙がフィリピンの父親から届き、フィリピンから持参したミシンを持って、終戦まで熊本に疎開した。熊本でもミシンを使って商売をおこない、戦後に沖縄へ戻った後もこのミシンを使ったという。⁶⁴

一九四一年（昭和十六）十二月八日に日本軍の真珠湾攻撃により、日本とアメリカの戦争が始まると、米領であったフィリピンの日本人は各地の施設に強制収容され、約二週間後の同月二〇日頃に日本軍がダバオに上陸するまで隔離された。

その後、日本軍がフィリピンを支配することになり、これまで日本人に課された仕事や経済活動の制限が撤廃されたが、日本軍への協力を常に求められた。

日本の占領後には、日本人会ダバオ支部から自警団を組織する命令がだされ、石川常次郎（宮城出身）も自警団に所属した。後には海軍建設部の嘱託で通訳として働き、捕虜収容所でフィリピン兵や米兵への通訳や、ニューギニアにも通訳の仕事で派遣された。⁶⁵

一方で、現地のフィリピン人に対する日本人や日本兵の横暴もあり、日本軍や領事館の上層部がこれを問題視するまでになった。

一九四三年（昭和十七）当時のダバオの様子について、ある男性（一九三五年生）は、収容所から開放された日本人家族が家々に戻っても、以前のようなのびのびとした雰囲気はなく、フィリピン人の態度もよそよそしく何かに脅えているような目つきに変わってい

62

この章については、早瀬晋三前掲書一九九六並びに大野俊「『ダバオ国』の日本帝国編入と邦人社会の変容」『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』二〇〇八を参照した。

63

浦添市移民史編集委員会前掲書一一一～一二頁

64

浦添市移民史編集委員会前掲書一一一～一二頁

65

浦添市史編集委員会前掲書 四六一～四六二頁

たと記している。⁶⁶同年十一月の『ダバオ新聞』からは、二回目のダバオ防空訓練が実施される⁶⁷ことが確認でき、切迫した時勢がうかがえる。その後も、防空訓練は繰り返し実施された。

日本軍政のなか、マニラ麻栽培は続けられた。聞き取りでは、日本兵が労働者を探してきて、マニラ麻を増産させていたといい、このため、麻価格が上がって儲かったとの話も出てくる。一九四一年（昭和十六）直前まで、トンカラ耕地で麻栽培をしていた又吉英仁さん（父親は牧港出身）の家には、日本軍のトラックが来て麻を買い取ったという。

一九四三年（昭和十八）になると、日本軍から「軍需包装用麻縄」作製の規格（一束一ペソ三〇セントの買い上げ）が出され、各家庭の「遊休労力」（おそらく女性や子供のこ）を活用して生産することを訴えている。⁶⁸なお、マニラ麻で、兵士が草履や背負い子をつくることもあった。⁶⁹

だがマニラ麻生産も取りやめになり、食糧補給のための畑として、野菜や穀物を植える場所に変えられた。実際、一九四四年（昭和十九）八月の『ダバオ新聞』には、ラサン神山耕地での畑仕事の写真が掲載されている。⁷⁰そして、麻栽培の労働者の半数以上が軍事施設の建設に動員された。

また時期は不明だが、オヤングリン付近に日本軍の飛行機が墜落し、そこにいた知念盛助さん（内間出身）がブテリア（石油を用いた明かり）を持って現地に駆け付けたところ、飛行機の燃料に引火し、そのやけどで亡くなっている。⁷¹

一九四二年（昭和十七）には、兵役法改正により、フィリピン等の占領地において、そのまま現地で徴兵のための身体検査ができるようになった。⁷²

一九四四年（昭和十九）七月にはサイパン島の日本軍が全滅し、ダバオによりいっそう戦争が差し迫ってきた。七月二一日には、ミンダナオ島軍人援護会が結成され、軍人遺家族への支援を実施することになり、上原仁太郎をはじめとする沖縄人有力者も役員に加わった。⁷³ダバオの日本人男性が戦地へ赴くための体制づくりといえよう。実際、これ以降の『ダバオ新聞』でも、日本人男性の軍事訓練の記事が見受けられる。

66 當眞洋一『さらばダバオよ 大東亜戦争僕は負けなかった』新星出版二〇一三 四四～四五頁

67 「常に空襲下の心構へ ダバオの民防空まだまだ」『ダバオ新聞』一九四二年（昭和十七）十一月十六日付 一頁

68 「軍需麻縄の規格」『ダバオ新聞』一九四三年六月二日付 二頁

69 村田禎造『ダバオ戦記 第百師団と橋部隊』橋部隊ダバオ会 一九七九 二二頁

70 「一姓から百姓に」『ダバオ新聞』一九四四年八月十五日付 頁不明

71 浦添市移民史編集委員会前掲書 一一～一二頁

72 「兵役法改正 南方在住者も徴集現地で身体検査」『マニラ新聞』一九四三年一〇月一日付 一頁

73 「ミ島軍人援護会結成 後顧の憂ひと掃へ」『ダバオ新聞』一九四四年七月二二日付 頁不明

八月一日には、ダバオに超非常措置令が出され、軍関係の仕事に従事する者全員が軍属扱いされることになった。⁷⁴

一〇月に、フィリピンのレイテ島に米軍が上陸し、太平洋戦争の行方を左右すると言われたこの戦闘で、圧倒的な物量の米軍を前に、同年末あたりで日本軍が壊滅的な打撃を受ける。⁷⁵翌年の四月からは、ダバオのあるミンダナオ島に米軍が上陸する。

同月時点で、老人や女性、子供だけでも現地在住の日本人が一万二〇〇〇人いるなか、フィリピン在留の日本人全員が山側に避難したとされ（これは誇張のある表現であろう）、その保護について日本軍や総領事館はいずれも対応できなかったという。⁷⁶

(二) 戦闘の経過とタモガンへの避難・投降⁷⁷

一九四五年（昭和二〇）四～五月にかけて出された避難命令に従って、奥地のタモガンに向けて避難をはじめ。ちなみに、避難命令が出された日時は、記録や証言によって異なるのが現状で、ダバオの地区ごとに命令の到着時期が異なった可能性もある。

タモガンに移動した人々や日本兵も、米軍の攻撃だけでなく、食糧難にも苦しみ、日本兵や時に一般男性による食糧の強奪も発生した。水を大量に含む葛を切って、そこから出る水を飲んだとの話も浦添出身者の証言に出てくる。⁷⁸その道中では、平良俊太郎（経塚出身）の一家が、麻畑で麻の葉でつくった小屋で休んでいると、米軍機の爆撃で小屋の周りが吹き飛んだが、奇跡的に一家にケガはなく助かったという。⁷⁹

六月十九日には、避難命令で集合場所とされたタモガンの川に米軍の部隊が到着する。

六月三〇日に東ミンダナオでの戦闘終了を米軍側が宣言したが、日本軍は九月に入ってからようやく本格的な投降をはじめた。後に日本の収容施設でフィリピン移民と面談してまとめられたレポートによると、避難民は八月二〇日頃にビラで終戦を知り、九月中旬に山中を降りて投降したという。⁸⁰実際の動向には個人差があるが、一般的な動向はこの通りである。

米軍に投降した人々はダリアオンの収容所に移動するが、その際に、日本軍やその関係

74 「超非常措置成る」『ダバオ新聞』一九四四年七月二十九日付 一頁

75 大岡昇平『レイテ戦記』（上）（中）（下）中央公論社 一九七四 なお下巻の「太平洋戦争年表」も本章で参照した。

76 福島慎太郎『村田省藏遺稿比島日記』原書房 一九六九 一七五頁

77 この節では、Robert Ross Smith「Triumph in the Philippines United States Army in World War II: The War in the Pacific」Office of the Chief of Military History Department of the Army, Washington D.C. 1963 pp.629～648並びに、村田禎造前掲書を参照した。なお村田禎造前掲書は、ダバオにおける日本軍（主に陸軍）の戦闘を知るうえで参考になる。

78 法政大学沖縄文化研究所・小湾字誌調査委員会前掲書 五五八頁。長女の知念和子さんの証言にも同様の話がある。

79 二〇〇九年（平成二一）一〇月に浦添市内で実施した知念和子さんへの聞き取り調査により得られた情報。

80 幸地新政「三重四重の犠牲 ダバオ引揚者の窮状」『戦後の日本における沖縄県人情勢報告』一九四六

者から虐待を受けた怒りから、フィリピンの人々から投石され、「バカヤロ！」等と日本語で罵声を浴びせられることが頻発した。⁸¹

民間人と兵隊はそれぞれ別の収容所に入れられたという。ダリアオンの収容所の第二〇号には、比嘉という伊祖出身者が倉庫整理の仕事をしていたとの証言もある。⁸² 日本軍で通訳の仕事をした石川常次郎（宮城出身）も、収容所で引き続き通訳の仕事にあたった。⁸³

（三）引き揚げ―フィリピン、日本、沖縄―

フィリピンから引き揚げた人々は、日本各地の施設に収容された。主要な引き揚げ地は、浦賀、名古屋、大竹、博多、佐世保、鹿児島で、その他にも横浜や宇品があつた。⁸⁴

なお引き揚げでは、事務上の手違いで、家族であっても成人男子と婦女子が別々に送還されることになったとの話もある。⁸⁵

一九四五年（昭和二〇）一〇月下旬に、広島の子品港へ八七一名と一三〇〇名がそれぞれ上陸して、福岡市内の各国民学校に収容された。同年十一月中旬に、埼玉の浦賀の収容所にも引揚者が収容されるが、引揚者のほとんどが栄養失調やマラリア患者であつた。寒さに震えるなか、引揚者から待遇改善要求が出された。⁸⁶ ここには、又吉蒲戸（牧港出身）がいた。また日本軍で通訳をしていた石川常次郎（宮城出身）は横須賀に到着し、その後長崎に移った。⁸⁷

十一月時点の鹿児島では、ダバオからの沖縄人引揚者が六〇〇〇人おり、その大多数が病氣と予測されていた。⁸⁸

平良俊太郎（経塚出身）の一家は、病氣だった母が大分に移動し、残った父と子は鹿児島に移動したが満員ということで、横須賀に移動した。横須賀では学校に滞在し、シベリア帰りの人々と共に生活した。⁸⁹

宮城ウシヤ（仲間出身）の一家は、妻と子供が鹿児島に上陸して大分に移動した一方で、夫は広島の子品に上陸した。夫は現地にてマラリアで亡くなり、同行していたところが夫の遺骨を大分まで持ってきたという。⁹⁰

81

戦後、浦添にあったコカコーラの会社には、フィリピン人の幹部がおり、沖縄人従業員に対して厳しい態度で臨むところがあつたという。また、別の場所でも働くフィリピン人のなかには、日本語で「この野郎」と言われると激しく怒り出すこともあり、戦時中にフィリピン人が受けた傷跡が、戦後の沖縄にまで続くことがあつた。

82

比嘉三郎『負戦の老兵 今だ消えず現役なり―比国ミランダオ島ダバオ戦の生き残り兵―』同刊 二〇一二 三二―三頁 ただし、旅券下付表からは比嘉姓の伊祖出身者は確認できない。

84 83

浦添市史編集委員会前掲書 四六二頁 『方面別受入港一覧表（昭和二五、一、一八調製）』厚生省『引揚援護の記録』クレス出版 二〇〇〇 八三頁

86 85

「ダバオ引揚民の待遇改善要求承認さる」『福岡におけるダバオ引揚民』『自由沖縄』（第一号）一九四五年（昭和二〇）十二月六日付 四頁

88 87

浦添市史編集委員会前掲書 四六二頁 『INCOMING MESSAGE』（16 November 1945）"Repatriation from Areas Controlled by CINCPAC and AFWESPAC (1945・9 - 1946・3)" (GHQ/SCAP文書（参謀第三部）所収 沖縄県公文書館所蔵資料（U90002876B）

89

二〇〇九年（平成二一）一〇月に浦添市内で実施した知念和子さんへの聞き取り調査により得られた情報。

90

浦添市史編集委員会前掲書 四五八頁

なお吉長武司さん（父親は宮城出身）は、ダバオからアメリカの船舶で移動し、航海中はチキンライス等の米国製缶詰が配給されたなか、名古屋に向かっている。名古屋では、進駐軍の仕事をおこない、下水道掘りの仕事に従事した。⁹¹

一九四六年（昭和二一）以降、日本本土の鹿児島や名古屋等の各地から、沖縄島中城のインヌミヤードゥイに引き揚げた。そして、短い滞在の後に浦添の各地域に戻っていた。（井口学）

四 引揚者たちの戦後史

ダバオからの引揚者たちにとって、戦後の人生は戦争を引きずってきた歴史であった。いな、戦争はまだ終わっていない、と言ったほうがいいのかもしれない。ある者は親を亡くし、ある者は子を亡くし、兄弟を失って命からがら引き揚げてきたが、なぜ自分だけが生き延びてきたのか、を問いつける戦後であった。タモガンの山中を四か月もさまよい、生き地獄を見てきた悪夢がいつまでも脳裏から抜け切れなかった。四〇〇〇人とも五〇〇〇人とも言われるタモガンの戦死者たちは、いまでも眠り続けている。

かろうじて米軍の捕虜となり、トラックでダリアオンの邦人収容所に収容された人たちも、悪疫が蔓延し、栄養失調でたくさんの命を落とした。何か月かがたち、ようやく日本に引揚げが実現したものの、船中でもまた死んでいく人たちが絶えなかった。誰もが生き残ったのは、奇跡だと思った。

引揚船は沖縄に直行ではなく、鹿児島や熊本、広島、神奈川県の浦賀など各地に散らばっていた。引揚者はそれぞれの地域にしばらく滞在し、沖縄への引揚船で本島・中城の久場崎（通称・インヌミヤードゥイ）につき、それぞれのふるさとへと散っていった。

米軍占領下の沖縄で、再び厳しい生活を余儀なくされたが、お互いの連絡を取り合い、いつしかダバオ引揚者会も結成された。全国的に結成の動きがあり、東京に全国の支部を統括する「全国ダバオ会本部」が設置された。本部主催の総会が支部の順番制で開催されたが、戦後二三年目を迎えた一九六八年（昭和四三）に、ダバオ募参旅行計画が発表され

91

二〇〇九年（平成二一）九月に浦添市内で実施した聞き取り調査により得られた情報。

た。東京発で四〇人、沖縄発で四〇人の合計八〇人がマニラ空港で合流する形で、初めての墓参が実現した。

当時、沖縄ツーリストに勤めていたダバオ引揚者の中村源照氏が、旅行の手配をした。中村氏によれば、本土側の参加者の中にはフィリピン行きを恐れる人もいた。戦時中の仕返しをされないか、というのである。しかし中村氏は「私も兄弟をタモガンで亡くしており、みんなと同じだ。何も怖いことはない」と説明。事実、ダバオでは現地の人たちが理解をしてくれ、トラブルは起きなかった。これが初めての慰霊祭となり、以後、毎年沖縄からチャーター便を飛ばして、現地での慰霊祭がおこなわれた。

慰霊の旅ではミンタルの「沖繩の塔」や、ダリアオン捕虜収容所で亡くなった戦没者を祀った「供養之塔」を訪れ、沖縄から持参したお菓子やお酒などをそなえた。ミンタルの「沖繩の塔」は、一九七〇年（昭和四五）に当時の琉球政府によって建立された。フィリピン地域の全沖縄県人戦没者を祀るもので、毎年追悼式が行われた。長方形の墓が並ぶ墓地に一メートルほどの塔がたっている。塔の周辺には「比国日本人会貢献者之塔」や「在留先亡同胞霊塔」などがある。前者はミンタル日本人墓地にたくさんあった日本人墓が破壊されたため、ダバオ領事館の計らいで遺骨を収集したもの。後者は先亡犠牲者を弔うため戦前の一九三七年（昭和十二）に建立されたが、過去に幾度となく破壊され、修復されて現在に至っている。

毎年の追悼式には沖縄県知事の代理や、沖縄県遺族連合会会長、日本国ダバオ領事、現地のダバオ市長らも参列。読経は二〇〇〇年（平成十二）ごろから浄土真宗本願寺派の網代正孝延浄寺住職（日本フィリピンボランティア協会会長）が無料奉仕をしている。

いつしか追悼式の周りには地元の子供たちや、子供を抱いた女性たちが大勢集まり、式典を眺めていた。それが終わると慰霊団の人たちは、持参したお菓子などを子供たちへ分け与えた。子供たちはうれしそうに目を輝かせて受け取った。こうした光景は、墓参の先々で見られ慣例となった。

「供養之塔」は、ダリアオン日本人捕虜収容所での戦死者を祀るものだ。同収容所は、



1968年7月の第1回ダバオ墓参団40人の参加者
『ダバオ記念誌』2005年

元はダリアオン小学校である。タモガンの山中から脱出できたものの、戦傷やマラリア、栄養失調などでたくさんの人が同所で亡くなった。収容所の近くに仮埋葬されたが、その後、ダバオ市の土地整理でドブガンの墓地に移葬された。塔は一九八六（昭和六一）年に沖縄ダバオ会の浄財で建立された。周りには現地の人たちの十字架の墓がひしめいている。

慰霊祭は毎年絶えることがなかった。山中をさまよったタモガンを訪れ、今も同地に眠る父や母、兄弟たちに、丘の上から溪谷に向かい手を合わせ、涙を流した。タモガンの溪谷は、戦後の森林開発で一抱えもあったラワンの大木は切り倒され、かつての面影はなかった。

毎年、現地の慰霊祭に参加した訪問団は、滞在中、自由行動の二日間を、かつての「我が家」のあった耕地を訪れた。元の家がそのまま残ったところもあった。家には戦前共に働いたダバオの人が住んでいることもあった。それでも快く受け入れ、一夜泊めてもらい心ゆくまで語り合った。戦争を超え国境を越えた心あたたまる交流であった。

浦添市から参加している知念和子さん（旧姓平良、一九三八年生まれ、字経塚）もそのひとりである。知念さんの祖父、平良仁和さん（字経塚出身）は一九二八（昭和三）年三二歳のときに妻子を残し、単身ダバオ市のバカカ耕地に開拓移民として渡り、五〇〇〇株の麻山を借り受けてマニラ麻の栽培に当たった。

一九三七年（昭和十二）に息子の俊太郎夫婦を呼び寄せた。その翌年に和子さんはバカカ耕地で生まれた。続いて一九三九年に妹・淑、一九四二年に弟・俊夫が生まれ、高床式の家で暮らしていた。近くには同じ浦添の安波茶出身の宮城三郎夫婦も暮らしていた。異郷の地で同郷の人がそばにいて心強かったという。

和子さんは八歳になり、小学校に入学したが、その数日後から戦争が始まり、日本軍もやって来た。しかし、日本軍が来るとアメリカ軍による空爆が始まった。祖父も父も日本軍に招集されたが、ほどなくして戻って来た。空襲が激しくなり、タモガンの山奥を目指して逃避行が始まった。奥深いタモガンのジャングルに入ったが食糧にこと欠き、やがて



「沖縄の塔」に参列した墓参団の人びと（2011年）三木健撮影

妹と弟が栄養失調で命を落とした。晴着を着せて埋葬した。母は流産で体調を崩した。別行動をとっていた祖父も亡くなったことを知らされた。

敗戦を知らされ下山したが、母は野戦病院に、和子さんと父親は収容所に入れられた。母はアメリカの病院船でひと足早く内地に送還され、数日後には和子さん父子も鹿児島に送還された。大分県で母が健在なのを知って、父が迎えてきた。家族三人がそろって一九四六年に沖縄の久場崎（インヌミヤードイ）にたどりついた。タモガンはいまも祖父と弟と妹の三人が眠っている。第三六回の慰霊の旅に参加して以来、毎回、和子さんはバカカ耕地やタモガンを訪れている。

供養は生き残ったものの義務として、毎年の慰霊祭に参加してきた遺族も、高齢化が目立つようになり、それとともに気になるのがタモガン溪谷に眠る遺骨のことである。同地では数千人もの日本人がなくなつたとみられている。いつの日かその遺骨を探し出し、納骨したいというのが遺族の偽らざる気持ちである。

そしてそのチャンスが訪れた。二〇〇三年（平成十五）八月、ダバオ移民一〇〇周年記念式典がダバオ市で開かれたことだ。式典でダバオ市のドテル市長は「今日のダバオの発展は、かつての日本人の開拓の歴史にさかのほるものである。かつてダバオはリトル東京と言われていた。昔の夢よ、もう一度の思いで日本人の再渡来により、ダバオの新しい時代の活性化を図りたい」と述べた。

当時、沖縄ダバオ会の会長として式典に参列していた中村源照氏はこの言葉に感動し、日比友好のシンボルとなるような「平和友好の碑」の建立を思い立つ。

二〇〇五年（平成十七）三月、記念碑の計画立案、用地調査のため中村会長はダバオを訪れた。用地選定のため昼間は遠くタモガンなどを歩き回り、ダバオ市内のインシュラホテルに宿泊した夜のことだった。中村氏はすさまじい夢におそわれた。

それは多くの戦死者たちが、両手を高く差し伸べながら「早く納骨堂に入れてくれ」と悲壮な叫び声を上げながら、丘を駆け上がってくるさまであった。みな着の身着のままだった。意外なことに先頭を切ったのは、フィリピン人だった。その後ろでは子供たちが

大きな声を張り上げている。そのさらに後ろから大人たちが我先にと谷間からスワワン川を横切り駆け上がってくる。おびたらしい数だ。みなはだして裸同然だった。すると先頭の子供が中村氏の足元に手を伸ばしてきた。思わず足元をすくわれ、尻餅をついた。と、そのショックで目が覚めた。

体中が冷や汗でぬれていた。ベッドに起き上がると、脳裏にはタモガンの山を背景に「納骨堂を台座にした平和友好の碑」がクッキリと描かれていた。急いでフロントから鉛筆と紙を借りてきて、これを図面に書いた。すでに午前二時を回っていたが、さらに具体的に地図に落として書き上げた頃には、夜が白々と明け始めていた。これをダバオ日系人会のオステロ会長に見せると、賛同してくれた。そこでタモガンの地主・ボン・サントス氏をたずねて説明し、協力を求めたところ、土地の無償提供を約束してくれた。中村会長の目から涙がこぼれた。¹

実はサントス氏は、タモガンの山を望む自分の敷地に、一九九〇年代の終わり頃から日本人がよく訪れ、観光ではなく谷間に下りてお祈りをする姿を見かけるようになった。また、二〇〇五年（平成十七）に果樹園に木を植えようと掘り起こしたところ、人骨が出てきた。そのとき靈感を覚え、多くの日本人が自分のところへやってくる夢を見た。そこで土地を貸している人たちの協力を求め、夏の日本からの来訪に備え、六八〇平方メートル（約三〇〇坪）の広場を整地し、ベンチを置くなど整備しようとしていた。

そこへ中村会長とオステロ会長が訪れて、納骨堂と記念碑の話が持ち込まれた。自分の見た夢と同じだと思い、即座に土地の無料提供を承諾したのであった。沖縄県内外のダバオ会やダバオ日系人会の協力を得て、その年の九月十二日に「平和友好・納骨堂」が、タモガンのマランバマリログの丘に完成した。建立まで僅か六か月の期間だった。²

除幕式では中村会長はじめオステロ日系人会長、土地を提供したサントス氏、遺族会から玉城カメ、多嘉良愛子の各氏により幕が下ろされた。戦後六〇年、引揚者たちが夢見た納骨堂の完成である。碑は「納骨堂」と書かれた黒御影石のお堂の上に「平和友好」と刻まれた将棋のこまの形をした白い石碑がすえられた。それは日比の平和友好が、この地に



完成したタモガンの「平和友好・納骨堂」に手を合わせる知念和子さん（2011年）三木健撮影

1 山城平士郎沖縄県ダバオ会理事「納骨堂及び日比平和友好の碑の完成を喜ぶ」『沖縄県ダバオ会刊「ダバオ記念誌」所収

2 中村源照沖縄県ダバオ会顧問「記念事業遂行に対する御礼」同上『ダバオ記念誌』所収

骨をうずめた人たちの礎の上に成り立っていることを形にしたものだ。

しかし、納骨堂は出来たものの、遺骨の収骨作業は進んでいない。これまで見つかった遺骨は十四柱に過ぎない。収骨作業はこれからだが、沖縄ダバオ会や遺族会がその作業をすることは諸般の事情で難しい。加えてタモガンの戦後七〇年に近い開発が、さらに困難にしている。今のところタモガンの五地区の自治会長に対し、日系人会長を通じて収集を依頼しているところだ。とはいえ遺族にとっては納骨堂が出来ただけでも、精神的な拠りどころとなっている。

遺骨収集とともに日比間に残された課題として、残留日系人二、三世の消息捜しと日本国籍取得の問題がある。これはダバオに限ったことではないが、戦前、フィリピンに渡った日本人と現地女性との間に生まれた二世が、今もなお父親の消息がわからず捜し求めているケースである。

戦時中、フィリピン在住の日本人は、国家総動員法の適用を受けて徴用され、昨日まで一緒に働いていたフィリピン人と敵対関係となった。フィリピン妻との間に生まれた子供も激しい反日感情にさらされた。戦後しばらくまで、日系人であることをはばかるほどであった。

日本財団やNPO法人フィリピン日系人リーガルサポートセンターがこうした人たちの支援をしているが、一世の高齢化が進み、国籍が確認される前に亡くなるケースが増えている。

二〇一一年（平成二三）八月、県系二世の三人の女性が、親族捜しと日本国籍取得のため来沖したが、一人（六九歳）は父親が見つかり六六年ぶりの対面を果たしたものの、他の二人は親族を捜すことができなかった。見つかった父親は九五歳の高齢だった。戦前にフィリピンに渡航し、娘は一九四一年（昭和十六）に生まれたが、父親は日本軍に従軍していたため、敗戦でそのまま強制送還され、生き別れとなったという³。

このように父親も二世も高齢化し、親族探しは年々難しくなっているのが現状だ。

これまでもしばしば取り上げてきた「ダバオ日系人会」でも、活動の第一に親族捜しを



多くの沖縄出身者が犠牲となったタモガン
(2011年) 三木健撮影

3

「六六年ぶり父と再会」『沖縄タイムス』
二〇一一年八月七日

挙げている。一九八〇年に創設された同会は、オステロ会長によれば延べ会員数は七二〇〇人で、このうち四〇%がダバオだという。会長自身、日本人の祖父を持つ三世で、四二歳（二〇一一年当時）という若さである。約三〇〇人が親族捜しを希望しているが、いまだに実現していないという。同会は一九九〇年に日本人学校を創設し、幼稚園から大学まで一貫校を経営するまでになった。

フィリピンのボランティア団体は、一人でも多く捜し出し、日本国籍を取得させたいとしている。国籍取得は日本への渡航や就労を可能にするだけに、生活ともかわる切実な問題でもある。しかし、親族捜しの資金的な問題もあり厳しい状況だ。

沖縄においては一九七二年（昭和四七）三月に、糸満市摩文仁の丘に「ダバオ之塔」が建立された。沖縄ダバオ会が建立したもので、毎年五月一五日の沖縄の日本復帰記念日に、慰霊祭が行われている。年々、引揚者が高齢化し、ダバオへの慰霊の旅に出かける参加者が減る中で、年に一度（五月十五日）の「ダバオ之塔」（糸満市摩文仁の平和祈念公園内）での慰霊祭は、引揚者たちの大切な顔合わせの場となっている。

また、ダバオの日本人学校「カリナン小学校」の同窓会が、一九七二年以来続けられてきたが、二〇一三年（平成二五）十一月二二日、四一年間の歴史に幕を閉じた。同窓生の高齢化によるものだ。同会は恩師の還暦祝いで始まり、多いときで二〇〇人もの参加者がいたが、年々減少し最後の同窓会には二期生から十二期生までの二四人が集い、会に別れを告げた⁴。

カリナン小学校に二年生までいたという宮平民子さん（昭和八年、ダバオ生まれ、宜野座村出身）によると、学校は高等科二年までであり、教科書も日本国内と同じであったが、週に一時間だけ英語の授業があり、アメリカ人が教えるにきていたという。

毎年続けてきたダバオへの慰霊の旅も、二〇一四年（平成二六）で五〇回の節目を迎えた。参加者の減少でチャーター便もなくなり、ダバオ行きは那覇―台北―マニラ―ダバオと三回も乗り換えが必要で、それがまた高齢者の負担となり、今では数十人規模に減っている。五〇回の節目が、最後の団体訪問になるのでは、ともいわれている。たとえそれが

4 「カリナン小学校同窓会、四一年の歴史に幕」『琉球新報』二〇一三年十一月二十九日

最後となるにしても、引揚者たちのダバオへの思いは絶えることはない。

第五〇回となった慰霊祭に、知念和子さんも参加した。ひざ関節が痛み、杖をついての参加であったが、祖父や弟妹の眠るタモガンを訪れ、体力の許す限り訪れたいと思うのだった。遺族たちの慰霊の旅はこれからも続く。(三木健)

五 戦後移民の連続性と非連続性

戦前、多くのフィリピン移民を送り出した沖縄県だが、戦後のフィリピンへの移民はどうだったのか。戦後移民については、米軍基地で働いていたフィリピン人と結婚した数多くの沖縄女性たちが移住している事実がある。その数は二〇〇〇人ともいわれている。しかし、実態については未調査の分野が多く、「沖縄移民史」の範疇にさえ入っていない、といっても過言ではない。

その原因はいくつか挙げられようが、一つには結婚相手のフィリピン人男性が、米軍基地に関連する軍属でその実態がつかみにくいこと、二つには結婚してフィリピンに渡航する場合、フィリピン人男性の故郷に行くケースが多く、それはフィリピン全土にまたがっていること、三つ目は結婚や渡航は、親の反対を押し切って行くケースがあり、プライバシーの点から調査がしにくい、などが挙げられる。

それでも近年、これらの未開拓分野に関する調査報告や論文も出され、少しずつではあるが、その実態が明らかになりつつある。たとえば大野俊『ハポン―フィリピン日系人の長い戦後¹』、鈴木規之・玉城里子「沖縄のフィリピン人―定住者としてまた外国人労働者として―」、杉村信「沖縄に戻れなかったフィリピン人たち―米軍統治下における沖比国²」、『沖縄研究―仙台から発信する沖縄学』所収)、細田亜津子「沖縄ウーマンからみえる沖縄戦後史―フィリピンに生きる沖縄ウーマンの聞き取りを中心として―」³などの調査報告がある。

いずれもフィリピンでの困難な調査のなかまとめられたもので、貴重な調査である。こ

参考文献

『ダバオ記念誌』(沖縄県ダバオ会、二〇〇五年)

1 一九九一年、第三書館

2 『琉大法学』五七 一九九六年九月
同 五八 一九九七年三月

3 『長崎国際大学論叢』第一〇巻
二〇一〇年三月

これらの先行調査研究も参考にしながら、戦後のフィリピン移民について、その概略をまとめておきたい。

結論を先に言えば、戦前の移民がアバカ（マニラ麻）の栽培を中心とする家族単位の出稼ぎ移民であるのに対し、戦後の移民は米軍基地を介在して、フィリピン人男性と結婚して渡航した女性中心の移民であった。その点に関して言えば、戦前移民と戦後移民は連続性を持たない移民であるといえる。

ただ、戦後の初期の頃には、戦前にダバオに入植した一世移民と現地のフィリピン女性と結婚してできた二世たちが、父親を訪ねて米軍ルートで沖縄に来て、沖縄女性と結婚したケースもあり、その意味では連続性を持っている、ということもできよう。

いずれにしても戦後のフィリピンへの移民は、米軍基地を介在し、大量のフィリピン人労働者が沖縄に渡航してきたことに始まっているので、その実態からみておく必要がある。

（一）米軍占領と基地建設

「鉄の暴風」とまでいわれた地上戦がようやく止み、収容所暮らしをしている間に、沖縄を占領した米軍は、対本土戦のために基地を確保していた。避難民が収容所から解放されて、かつての居住地に戻ろうとしたが、そこにはすでに米軍が金網を張り巡らして、立ち入りはできなかった。軍政が敷かれ、沖縄島の南北を縦断する一号線がすでに出来上がっていた。人々はフェンスの外に掘立小屋のような家を建て、生きるための必死の生活が始まった。

そうこうしている内に、国際情勢は米ソの冷戦が次第に表面化してきた。一九四九年八月、ソ連が原子爆弾の実験に成功し、核兵器が米国の独占物でないことを見せつけた。国民党と共産党の内戦が続いていた中国大陸では、この年一〇月に毛沢東の率いる共産党が勝利し、国民党の蒋介石軍は台湾に敗走した。その翌年、南北分断の朝鮮半島では、北朝鮮軍が中共軍の支援のもと、休戦ラインを越えて南下し、朝鮮戦争が勃発した。東アジア

をめぐる国際情勢の激変は、アメリカの対沖縄政策を変えさせ、新たな基地建設へと突き進むことになる。

一九四九年（昭和二四）末にシートツ軍政長官⁴は次のような発表をしている。

軍施設はできるだけ整理統合して嘉手納、ズケラン、牧港、那覇港付近に集める。嘉手納、牧港間は三線道路、牧港、那覇間は四線道路に拡張する。ズケランの南側に病院と発電所、牧港に陸軍の倉庫を設ける。那覇港は水深三二フィートに築港し、小船舶用に泊港を改修する⁵。

今日までなお続く嘉手納基地以南の、米軍基地の骨格が示されていた。軍政長官はこれらの基地建設に、地元沖縄の労働者や資材をあて、並行して戦災復興計画を進めることを発表した。これも今日まで続く基地政策の「アメとムチ」の原型が示されていた。これといった仕事もなく、国際情勢にも疎い沖縄住民の多くは、基地が整理され、仕事も得られるとあって「シートツ善政」と受け止めるむきもあった。

しかし、その「善政」は、ほどなく裏切られることになる。基地建設にやってきたのは、本土の大手建設会社であった。基地は整理縮小されるどころか、逆に拡張されたのである。沖縄からは国場組が参入したが、他はほとんど本土や米国の企業であった。沖縄の中小企業は下請けに回された。住民は生活のため、横流しの「戦果⁶」をあげるのに相変わらず余念がなかった。

（二）フィリピン労働者の沖縄渡航

アジア情勢の大きな変化を契機に、沖縄では基地の建設が一九五〇年（昭和二五）代に急速に進んでいく。このため米軍は手に技術を持ち、英語の話せる軍雇用員を必要とした。そこで目を付けたのがフィリピン人である。アメリカは米西戦争でスペインからフィリピンを割譲し、その支配下に置くと、フィリピンの「アメリカ化」に力を入れ、言葉も英語を公用語に指定し、英語の普及に力を入れている。そこで、これらの人材を活用し、基地建設の促進を図る政策を取っている。

4 ジョセフ・R・シートツ軍政長官在任

一九四九年一〇月～一九五〇年七月
沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』中
巻 一九八三年

5 沖縄タイムス編『沖縄の証言』上、
一九七一年 二八三頁

6 米軍からかすめ盗って得た物資のこと。
沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』
中巻 一九八三年

この時代に沖縄の基地で働いていたフィリピン人は六〇〇人に上るとみられる。一説では一人に上るといふ見方もある。なぜこのように多くのフィリピン人が、沖縄の基地を目指してきたのか。この点について鈴木規之・玉城里子「沖縄のフィリピン人―定住者としてまた外国人労働者として―」（『琉大法学』五七）は、次のような諸点をあげている。

アメリカ側の要因としては、さきほどの英語教育がある。「米軍は、外国人労働者を雇用する際に問題となる言葉の障害をなるべく小さくするために、フィリピン人のこの語学力を非常に重要視し、あらゆる職種でフィリピン人を雇用していた」とし「散髪屋や軽食バーの店員といった、英語をうまく話すことの出来ない沖縄の住民にでも勤まるような職種でさえフィリピン人を多く採用していた」という。

二つ目の要因として「米軍がフィリピン人労働者の建設技術や工業機械を扱う知識を非常に高く評価していた」ことを挙げている。当然それに支払う賃金は沖縄人のそれより高くなるが、沖縄人を時間かけて教育することを考えれば、手っ取り早くすむ、というわけである。

送り出すフィリピン側からの要因として、第一に「沖縄行きが自国における生活より、よい生活を手に入れる手段であったこと」を挙げている。さらに米軍では、沖縄人ができないような技術や資格を持っている者に対しては、他の労働者を管理・指導するスーパースーパーとして、ホワイトカラー職を得ることができたことも大きな魅力であった、という。

このため三つ目の要因として、「沖縄での基地労働の賃金がフィリピンにおける相場よりもかなり高かったこと」である。マニラの賃金に比べ、二倍から三倍は稼いだという。しかもそれは沖縄人の賃金の数倍も高かった。

さらに四つ目の要因として、「沖縄への移動が簡単であったこと」を挙げている。米軍の旅行命令書があれば、軍用機を利用し、しかも無料で渡航ができたのである。沖縄にいた彼らは、エンジニア、設計士、電気技師、基地内店舗のマネージャーとして働き、ホ

ワイトカラーとして生活した。羽振りの良い生活は、沖縄からすれば、うらやましい限りであった。特に沖縄女性の目には、ぜいたくな暮らしはあこがれでもあった。

論文「沖縄のフィリピン人」では、一九五〇年（昭和二五）代に沖縄に来たフィリピン人を「オールドカマー」と呼び、一九八〇年（昭和五五）代後半からきたフィリピン人エリタインナーたちを「ニューカマー」と呼んで区別している。「オールドカマー」たちは、朝鮮戦争のときで男性が中心、「ニューカマー」たちはベトナム戦争後で、女性が中心であった。

ところで「オールドカマー」のフィリピン募集時に、真っ先に応募したのが、日系孤児であったという。一般のフィリピン労働者に混じって、沖縄出身者の孤児たちが来沖していたことはあまり知られていない。戦災孤児たちは、フィリピン社会でさまざまな差別や虐待と闘いながら、己のアイデンティティーを求めて生きてきた。そんなおり沖縄行きのチャンスが訪れたのである。前引の「沖縄のフィリピン人」はこう書いている。

「彼らにとって在沖米軍基地で職を得ることは沖縄行きの唯一の手段であり、その目的は自らのアイデンティティーを否定しなければならぬフィリピンでの生活から脱出し、沖縄での家族や親戚を捜し出し、沖縄人として生きていくことにあった」

しかし、戦後間もない混沌とした沖縄で、親戚を捜し出すことは容易ではなかった。それはまた「沖縄人として生きていくこと」が難しいことをも意味していた。それにこのケースの沖縄系戦災孤児たちの数がどれほどのものであったのか、その把握すら難しいのである。

（三）沖縄女性との結婚

空前の基地建設ブームで、基地周辺の街や村には、米兵やフィリピン人軍属を相手とするバーやレストラン、飲み屋などが立ち並んだ。ドルの札束が飛んだ。軍票のB円時代⁷からドルを円に交換して支払われるが、繁華街にはドル交換所が設けられていた。基地周辺には特飲街もたった。

7

米軍が発行した円表示、B型軍票のこと。一九四八年七月から五八年九月までの一〇年間にわたり、沖縄で唯一の法定通貨として使用された。沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』下巻一九八三年

一九四七、八年ごろから米軍人やフィリピン人軍属相手の沖縄女性たちがはばをきかせるようになった。これがやがて国際結婚へと発展していく。

当時、米軍と通じることは、豊かな（今からいえば）物資の供給を意味した。さまざまな缶詰やメリケン粉などの食料品をはじめ、衣類、タバコ、ウイスキーなどノドから手が出るほど欲しいものがつぎつぎ手にはいった。将校のオンリーにでもなれば、家族だけでなく、親せき、近所の人までもその恩恵に浴することができた⁸。

米軍将校ほどではないにしても、フィリピン人軍属の場合でもそれは同様であった。先に紹介したように、沖縄に来たフィリピン労働者の賃金は、沖縄人労働者の数倍も高く、それだけ生活水準も高かったからだ。こうしてフィリピン人軍属と内縁もしくは結婚をしていた沖縄女性は、二〇〇〇人から三〇〇〇人はいたとみられる。

事態を重く見た米軍政当局は、一九四八年（昭和二三）、米軍人と沖縄人女性との婚姻関係を禁止する特別布告を出している。この布告では「琉球住民が占領軍軍人と結婚しようとすることは不法である。琉球諸島の民政官吏が結婚届けを受理することは不法である」とうたい、それに違反すると一万円以下の罰金、または五年以上の禁固、またはその両方の刑を科すとしていたが、効果はなかった。布告を出した背景には、性病の流行防止もあったというが、禁止令は効果を上げることができず、一年後には廃止された。

杉井信によれば、一九四八年から五一年（昭和二三―二六）までの国際結婚の大部分がフィリピン人男性との結婚であるが、五二年になるとハワイ出身の日系人や沖縄系人が増え、五三年になるとほとんどが米国人との結婚に代わったという。その理由として、次のように書いている。

「五〇年に米兵配偶者の入国人数制限が撤廃され、五二年に市民権も獲得できるようにになると、国際結婚志向の沖縄女性は米兵を選ぶようになり、結果的にフィリピン人との結婚が少なくなったのではないかと推測される」（「沖縄に戻れなかったフィリピン人たち」）。

ともあれ、フィリピン人と結婚した沖縄女性たちは、夫の高給に支えられて、普通の沖

8

琉球新報社編『ことばに見る沖縄戦後史』パート①一九九二年、ニライ社一四一頁

9

宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所編『沖縄研究 仙台から発信する沖縄学』同研究所、二〇一〇年

縄人には住めないような高級住宅に住み、当時まだ一般には普及していなかった電化製品に囲まれ、はた目にもうらやむ生活をしていた。

(四) フィリピン人軍属労働者の大量解雇

しかし、一九五五年（昭和三十）になると沖縄におけるフィリピン人の生活に、大きな転機が訪れる。米国民政府が一九五五年以降、一〇年間でフィリピン人労働者を削減する計画を打ち出したからだ。その理由について大野俊は「沖縄住民に対するアメリカ式教育が浸透し、英語の堪能な住民が飛躍的に増え、フィリピン人労働者を雇用する意味が薄れたこと¹⁰」を挙げている。

確かに戦後一〇年がたち、軍関係で働く沖縄人労働者の間にも、英語や技術の習得が進んだのは事実だろう。また、米軍当局も政策的に米国学制度による留学生の派遣や、各界の指導者を「国民指導員」と称して米国視察に派遣するなどして、アメリカナイズを推進してきた。もはや英語が堪能だからというだけで、フィリピン人を雇用しなければならぬ根拠は薄れていた。

それに賃金の安い沖縄人で間に合うとなれば、賃金の高いフィリピン人軍属を雇用することは、基地の安上がり維持からも、見直しは望ましいことであつたに違いない。このため米軍当局は、フィリピン人軍属の昇給をストップして退職を促進し、雇用期間や在留期限がきた者を解雇している。

その際、沖縄の女性との内縁関係や、結婚については配慮されることなく、厳しく退去を迫っている。沖縄女性にとっては、家族が引き裂かれることで、絶えられないことである。やむなく一旦は退去してフィリピンに戻り、改めて大使館を通じて沖縄の妻を連れ戻したい旨の嘆願書を出し、沖縄への再入域を求めても、「沖縄で仕事をしてはいけない」、「妻のフィリピンへの入国許可が下りるまでの期間に限る」などの厳しい条件が付けられた。

杉井信は、こうした措置について「占領下とはいえ、これは理不尽な対応であろう」

10

大野俊「沖縄の戦争花嫁」『ハボン―フィリピン日系人の長い戦後』第三書館、一九九一年

と、次のように指摘している。

雇用（就労）目的で入域した者であれば、長期滞在が可能で、滞在中に結婚しようが家族を持つが自由であるが、家族を持つ者が家族と暮らすことを目的として滞在し雇用されることは認められない。もしも就労を目的とし家族をその一手段とするのではなく、家族を目的とし就労を手段とするのであれば、沖縄ではなくフィリピンに行きなさい、ということなのである。けっきょく米軍・民政府はフィリピン人や沖縄人を、沖縄に居住・滞在する限りは、人間である以前に道具の如き存在だと見なしていたということではなかろうか。¹¹

こうして戦争で生き残った沖縄女性たちは、フィリピン人夫と共に異郷の土地へと追われるように沖縄を後にしたのである。

戦後、数十年も続いた米軍支配の中で軍人・軍属との交流が進み、当時「国際結婚」と呼ばれたカップルが誕生していくが、一見、豊かな生活を営んでいるように見えても、内情は深刻な問題を抱えていた。福地曠昭は次のように指摘している。

「一般的には祝福さるべき国際結婚も、その実態は多くの深刻な問題をはらんでいる。言語や風俗習慣が大きく違い、それらが原因となって結婚が失敗する例が非常に多い。現在年間に約四〇〇件の国際結婚が誕生しているが、いっぽうで毎年約一五〇件の離婚相談がISA¹²Oに持ち込まれており、国際結婚に泣く女性が多いことがわかる」¹³

もともとここで挙げられているデータは、一九六〇年代から七〇年代のベトナム戦争をはさんでの頃も含まれているが、状況としてはそう変わりはないであろう。福地はまた「これまでの累積数からすれば、アメリカ人やフィリピン人の夫は、沖縄人の妻と約三〇〇人の混血児たちを沖縄に残したまま帰国している。ほとんどは意図的に捨てたものとしかれない状態である」とも書いている。しかし、先に見たように、米軍政当局は政策的に沖縄女性との婚姻を認めなかった時代もあるので、個人が「意図的に捨てた」とばかりは断言できないであろう。

11

杉井信「沖縄に戻れなかったフィリピン人たち―米軍統治下沖縄における沖比国際結婚家族へのまなざし」『沖縄研究仙台から発信する沖縄学』宮城学院女子大学附属キリスト教文化研究所、二〇一〇年、一四六頁

12

ISA¹²O 沖縄国際福祉事務所
International Social Assistance
Okinawa Inc

13

『月刊青い海』六月号 一九八〇年、四三頁

(五) フィリピン全土に散らばる「沖縄ウーマン」

戦後の混沌と苦悩を背負って沖縄を後にした沖縄女性たちは、その後、どこへ行ったのだろうか。たいていはフィリピン人の夫と共に引き揚げていたので、夫の故郷に行くケースが多かった。しかし、その行く先についての調査は、これまでなされていなかった。二〇〇七年から二〇〇九年にかけて長崎国際大学の細田亜津子が琉球大学と共同で、その追跡調査を行っている。それらは「沖縄ウーマンからみえる沖縄戦後史―フィリピンに生きる沖縄ウーマンの聞き取りを中心として―」¹⁴にまとめられた。

それによると、フィリピン人と結婚した沖縄女性たちは、現地では「沖縄ウーマン」と呼ばれ、日本人女性とは区別されているという。これら「沖縄ウーマン」は、マニラを中心に、バギオ、ダバオ、セブ、レイテ、ネグロス・オリエンタル、ジェネラル・サントスなど広範囲にまたがっており、集団で集落を形成して暮らしているわけではない。

戦前の沖縄フィリピン移民が、バギオやダバオで集団生活していたのとは大きく異なっている。また戦前の移民が、男もしくは家族で移住していたのと比べると、戦後の移民は女性を中心であった。それも両親もしくは片親を戦争で亡くした女性が多かった。しかも、戦後の移民は米軍基地を介在して成り立っていることも、戦前との大きな違いである。

フィリピンに渡った「沖縄ウーマン」たちは、このように戦争や米軍基地などの社会問題を引きずりながら海を渡ったのである。しかし、沖縄を逃れてきたフィリピンも決して楽園ではなかった。フィリピンでは「ハボン・ハボン」と言われ、戦争中の日本軍人や日本人の行為の裏返しとしての抗議や反発を、一身に背負ってきたという。

沖縄ウーマンの中には「私は日本ではない。沖縄だ」と主張する気丈夫な女性もいたというが、フィリピン人同様に戦争に苦しめられた沖縄女性としては、やりきれない思いであつたに違いない。近くに沖縄人がいるわけでもなく、孤独のうちにウチナーグチ（沖縄方言）も記憶から消えていく人もいた。多くの沖縄女性はカトリックの教会に通い、子や孫たちに囲まれて平穏な生活を送っているが、いずれも高齢化している。



フィリピン人に嫁ぎマニラ市に住む沖縄県出身の女性達（1987年）仲地清提供



マニラ市の市場風景（1987年）仲地清提供

14 前掲 注3に同じ

そうしたフィリピン社会に、沖縄ウーマンやその子や孫のよりどころとなる「フィリピン沖縄県人会」がマニラで結成されたのは、一九八二年二月のことである。マニラ市近郊の沖縄ウーマンや留学生、企業家たちが協力して立ち上げた親睦団体である。初代会長の親泊正幸（フィリピン・マリコス社副社長・当時）たちがその基礎を築いた。今は二世、三世たちの時代である。

¹⁵ 一九八八年にフィリピン大学に留学していた仲地清は、レポート「フィリピンの沖縄人」の中で、こうした二世たちの活躍を紹介している。

その一人、二世部会会長のソリスさんは、浦添市仲西小学校を卒業した後、父親のヌヌエル・ブスマンさんとフィリピンへ転住。母親は七つの時に病気で亡くなったが、父親のヌヌエルさんは「日本語はお母さんの母国語だから、絶対に忘れないでほしい」と話した。ソリスさんはその教えを守り、今では日本語の名ガイドとして勤め先の旅行会社で重宝されているという。苦勞した母親たちを乗り越え、二世、三世たちはまた、新しい歴史を切り拓きつつある。（三木健）



マニラ市公園で綱引き（1987年）
仲地清提供



フィリピン沖縄県人会の第7回運動会（1987年）
仲地清提供

19 『沖縄タイムス』一九八八年二月十二日
から六回連載

第二節 南洋群島

一 南洋群島の歴史と概要

(一) 現在の南洋群島

太平洋地域の中にあるミクロネシアは、最も日本に近い赤道以北の地域名称である。ミクロネシアの島々は、東経一三〇―一七五度の間にある「マリアナ諸島」「カロリン諸島」「パラオ諸島」「マーシャル諸島」「ギルバート諸島」の諸島群と、孤島のナウル島で構成されている。¹日本はこのミクロネシア地域を、「南洋群島」と称して、海軍による統治（一九一四―一九二二）、C式委任統治機関（一九二二―一九四五）の約三〇年間統治した（図1）。

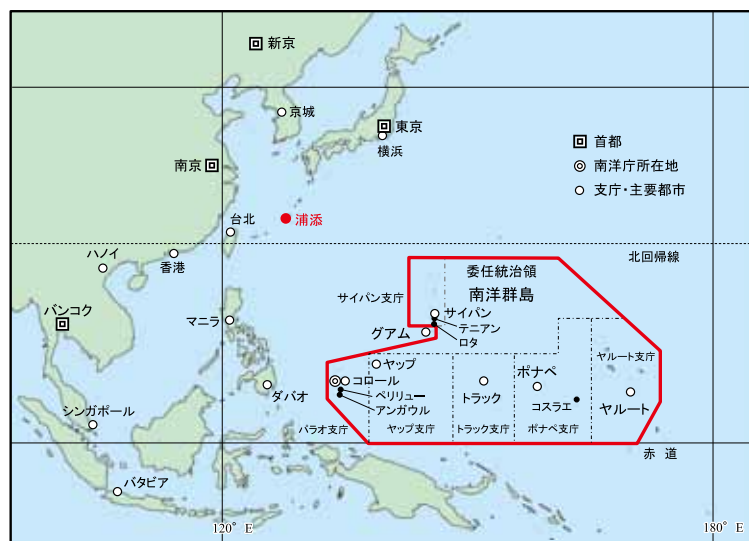
現在のミクロネシアは、マリアナ諸島は北マリアナ連邦とグアム（アメリカ領）、カロリン諸島はミクロネシア連邦、パラオ諸島はパラオ共和国、マーシャル諸島はマーシャル諸島共和国、ナウル島はナウル共和国として、それぞれ独自の政治システムを有した国家として成立している。

これら日本が「南洋群島」として統治した地域は、北マリアナ諸島が一九八六年にアメリカの自治領（Commonwealth）となり、マーシャル諸島共和国・ミクロネシア連邦共和国が一九八六年に、パラオ共和国が一九九四年に、それぞれアメリカとのあいだで自由連合協定を発効させたことにより、国際連合が管理する信託統治から、すべて独立を達成した。²

(二) 日本統治前の南洋群島

オセアニアのなかで、早くからヨーロッパ人との接触を持ったのがミクロネシアであった。一五二〇年―二一年にかけて太平洋を最初に横断したマゼラン一行は、「航路があまりに北寄りだったため、これほどたくさんの島があるにもかかわらず、住民の住む島をただ一つしか発見することができなかった。これがマリアナ諸島のグアムだった³」とある。

図1 日本が委任統治した「南洋群島」



宮内久光作成

1 印東道子編（二〇〇五）『ミクロネシアを知るための五八章』明石書店、一九
2 千住一（二〇〇八）「南洋群島」『日本植民地研究の現状と課題』アテネ社、一九〇
3 印東道子編（二〇〇五）七〇

その後、スペインは、グアムをフィリピンのマニラとメキシコを結ぶガレオン船の中継地として、さらにキリスト教・ジェスイット教団の布教地として重視する。スペインは一六六八年に正式にグアムを領有化すると、ミクロネシアの植民地活動を活発化させ、キリスト教の布教も本格化し、言語、生活様式などのヨーロッパ文化の移入が拡大した。

グアム以外のミクロネシアの島々については、当時のヨーロッパ、アメリカの国々の貿易商からは、「魅力の乏しい島」として認識されていた。ところが、十九世紀初頭から捕鯨業の需要の高まりによって、ミクロネシアの島々に多くの捕鯨船の出入りがみられるようになる。そのため、ミクロネシアの島々は、薪炭、水、食料の供給地として役割が高まり、乗組員の休息のための格好の場所としても利用されるようになった。とくにポンペイ（ドイツ占領期にポナペと称された）とコスラエは食料資源に恵まれ、良港を備えていたこともあって、捕鯨船がたびたび訪れるようになった。しかし、欧米人との接触の増加は、疾病の蔓延、アルコールが引き起こす暴力事件などが頻発する事態となった。ついに一八五〇年代に入ると、人口一万人の半数が病死する事態となった。⁴

その後、捕鯨業の衰退した一八六〇年代になると、ミクロネシアの島々に新たな動きがみられるようになる。鯨油の代わりとして、コブラ⁵の商品価値が高まり、その需要が増し、ドイツ商社がこの地へ出入りする状況が増えてきた。これまでのドイツ商社はサモアやニューギニアで事業展開していたが、国際社会におけるコブラの需要増加に伴い、新たな開拓地としてマーシャル諸島・カロリン諸島まで進出するようになっていた。

一方、早くからこの地域へ進出していたスペインは、その動きを警戒し、一八七四年にはカロリン諸島における占有権を主張する。ドイツもミクロネシアの保護領化を宣言し、両国の間には島の管理をめぐる泥沼化の様相を呈するようになる。しかし、両国の領土争いは、一八八五年に法王レオ十三世の裁定によって、スペインにはカロリン諸島の領有権が、ドイツにはミクロネシア全域における経済活動と航海がそれぞれ認められることになり、ひとまず収束することになる。

その後、一八九八年四月になると、アメリカとスペインの間で米西戦争が勃発する。こ

4 印東道子編（二〇〇五）七四―七五

5 ココヤシの果実の胚乳を乾燥したもの。六五―七〇%の脂肪分を含み、菓子・マーガリン・せっけんなどの原料に用いる。

の戦争は、アメリカ海軍の戦艦メインがハバナ湾で爆発して、二六〇人余の乗員が亡くなる事態が発生したことに起因する。爆発の原因については不明な点も多くあったものの、アメリカ世論の高まりも加わり、キューバに駐屯していたスペインとの全面戦争にまで発展し、アメリカが勝利した。この戦いは三か月半の短い期間で幕を閉じたが、アメリカ側にはキューバ・フィリピンも加わり、戦火の場はスペインの管理下にあった西インド諸島、太平洋地域にも及んだ。

当時、スペインの植民地であったグアムにおいては、アメリカ海軍の巡洋艦チャールストンを中心に、その他の輸送船三隻の艦隊が島を砲撃する事件が発生した。この戦闘でスペイン側がすぐに降伏し、グアムはアメリカに占領されることになった。

その後、米西戦争に敗れたスペインは、翌年の一八九九年にフィリピンとグアムをアメリカに割譲し、マリアナ諸島・カロリン諸島・マーシャル諸島をドイツに売却した。これによりミクロネシアにおけるスペインの植民地政策が事実上、破綻した。

スペインに代わってこの地に参入したドイツは、ポンペイとヤップに政庁を置き、数人の官吏と軍隊による「間接統治」を開始した。このドイツの統治形態は、群島の政治・社会的制度を温存させながら経済開発を行うことを目的にしたものであった。

政庁の主な事業を挙げると、社会基盤の整備においては、ココヤシの植栽、コブラの搬出のための道路・運河の建設事業がある。他にはパラオのアンガウルにおける燐鉱石の採掘なども挙げられる。文化政策としては、プロテスタントの布教による教会建設を進め、布教とあわせてドイツ語の教育も行われた。他には火器保持、アルコールの禁止など、島社会の秩序維持にもドイツ政庁は努力した⁶。

しかし、「間接統治」とはいうものの、一九一〇年、ポンペイのソケース地区においては、土地の私有化政策の断行から、道路工事の視察にきた総督と官吏が現地住民に銃殺される事件が発生した。その他に政庁の建物を焼き払い、数人のドイツ役人も殺害された。この事件を受けてドイツは、一〇〇〇人のドイツ軍を島へ派遣し、首謀者の王以下十三人を処刑して、ソケース地区の四〇〇〇人の住民をパラオに流刑した。この事件は、ドイツの



スペイン統治時代のカトリック教会（奥）と現在の教会（手前）（ボナペ、2012年）
石川朋子提供

植民化政策の行きづまりを象徴するものであった。その後のドイツは、この地域における近代化をはかるため、土地の私有化政策を広げることを目論むものの、第一次世界大戦が勃発したため、その計画は頓挫した。

(三) 日本統治領となるまでの南洋群島と島民への関与

日本において、太平洋地域に関心を向けた啓蒙家・知識人を挙げると、志賀重昂^{しがしげたか}がいる。志賀は明治中期から大正期に活躍した啓蒙的な地理学者でもあった。とくに『日本風景論』は、日本人のナショナリズムを刺激した著作として知られている。

志賀と太平洋地域との関わりは、一八八四年に札幌農学校を卒業し、長野中学校教諭、長野師範学校講師を経て、一八八六年にカロリン諸島・オーストラリア・ニューギニア・フィジー・サモア・ハワイを一〇ヶ月にわたり巡航したことに始まる。

太平洋巡航から翌年、二五歳になった志賀は、博學で鋭い地理的分析力を駆使して、視察記『南洋時事』（丸善商社）を刊行する。この本が刊行された時代は、前述したように、太平洋地域に遅れて登場したドイツとアメリカの動きが顕著になり始めた時期でもあった。志賀はこの中で、このような時代状況をふまえて、カロリン諸島、サモア諸島におけるドイツの進出状況と政策について詳細に分析している。他にはオーストラリアの白豪主義の評価、多くの日本人が移住していたハワイの諸事情を紹介し、日本人の海外展開の可能性についても論じている。この書は、多くの日本人が太平洋地域への地理的・歴史的知識をひろげるきっかけとなった。

志賀重昂が巡航してから二八年後、日本の太平洋地域への進出が現実のものとなる。第一次世界大戦において、日本が戦勝国となったからである。

ミクロネシアにおける日本統治の端緒は、一九一四年（大正三）八月二三日にドイツへの宣戦布告を行い、第一次世界大戦に参戦することから始まった。いわば「日英同盟」によるドイツへの宣戦布告により、赤道以北のドイツ領を無血占領したことに起因している。その後、この地域を日本は「南洋群島」と称して、同年十二月には海軍南遣技隊を母体と

7

岡田俊裕（二〇一一）『日本地理学人物事典近代編二』原書房、一二五



南方への渡航案内として出版された『圖南遊記』（梶原保人著、1913年）の広告
浦添市立図書館所蔵

する臨時南洋群島防備隊をトラックに設置し、南洋群島の統治がスタートする。一九一五年（大正四）四月までに、サイパン、ヤルト、ポナペ、トラック、ヤップ、パラオの六行政区に分割して統治を開始した。一九一八年（大正七）には軍政から民政へ統治形態を移行した。

一九一九年（大正八）四月二八日、パリ・ヴェルサイユで開催された講和会議において、国際連盟規約第二二条が成立した。その後、五月七日には、旧ドイツ植民地は国際連盟C式委任統治領「南洋群島」として、統治受任国を日本とすることが正式決定される。C式統治は、南西アフリカや太平洋諸島のような人口希少、面積狭小で、「文明の中心より遠き地方」に適用される。この受任国の承認は、日本による南洋群島統治が国際的に認知されたことを意味するものである。委任統治条項のなかには、地域住民の経済的・社会的進歩と住民福祉の増進に加えて、「軍事活動」の禁止が義務づけられていた。

こうした動きに連動して、日本政府は一九二一年（大正一〇）六月一〇日の閣議において、防備隊の撤退と南洋庁の新設を決定する。さらに翌一九二二年四月一日には、南洋庁が南洋群島の委任統治機関としてパラオのコロールに設置される。この南洋庁の設置によって、一九三三年（昭和八）三月二七日に日本が国際連盟を脱退するまでの「委任統治体制」による南洋統治が開始された。

南洋群島における日本統治の特色は、島民の教育への関与に見て取れる。例えば、一九二三年（大正十二）に「南洋庁公学校規則」を發布し、八歳から十四歳の島民子弟への教育が行われた。とりわけ授業の大半を日本語教育に時間を割き、修身、地理、歴史、算術、体育などの教科を学ばせている。一九三〇年代までに二四の公立学校に七四〇〇人の児童が通い、全群島の就学率は五〇%を超した。とくにパラオでは、就学率が一〇〇%にも達した⁸。

一九三〇年代後半からウチナンチュを含む日本人移民が増加するようになると、それにあわせて、日本人子弟の通う実業学校、高等女学校の設置も増えるようになる。しかし、これらの学校では、島民への就学の機会が少なく、中・高等教育を受けるには、日本



サイパン実業学校の碑（2012年）
石川朋子提供

8 印東道子編（二〇〇五）七九



旧南洋庁。現在はパラオ裁判所（パラオ、2012年）仲地清提供

留学以外の道しかなかった。とりわけ優秀な島民子弟の中には、日本の旧制大学へ留学し、そこで学んだ知識・技術を生かして、戦後の島の発展に寄与した人物もいる。

日本の南洋委任統治政策は、一九三三年（昭和八）の国際連盟脱退後から戦時体制下に至る過程で、委任統治条項から逸脱した統治形態が強まるようになる。いわば軍事優先の統治体制が敷かれていく。この頃より島民に対しては「日本人」としての同化政策が推し進められるようになる。日中戦争勃発後の一九三七年（昭和十二）以降になると「皇民化教育」が徹底されるに及び、「日の丸」掲揚、「君が代」斉唱、「皇居遙拝」など、日常生活の中まで浸透するようになる。いわば大日本帝国の教育政策がウチナンチュを含む日本人ばかりではなく、島民にも徹底されるようになっていった。（崎浜靖）

二 南洋群島への渡航

（一）大正期沖縄県の社会的経済的状况

南洋移民が多く送り出された大正期の社会的状況を、社会経済史の視点から区分してみると、第一次世界大戦の戦時景気に沸き立つ時期と、第一次世界大戦後における恐慌と慢性的不況の続く時代に大きく分けられる。

まず大正期前半の戦時景気に沸き立つ時期は、一九一四年（大正三）に始まった第一次世界大戦と深い関係がみいだせる。この大戦は、ヨーロッパが主戦場とはいえ、東アジアにもその影響が波及していった。とくに中国への利権獲得をめざした日本は、日英同盟にしたがって一九一四年八月にドイツへ宣戦布告し、参戦に及んでいる。

日本のドイツとの戦争は、ドイツが極東の本拠地としていた広州湾の封鎖に始まる。その後、日本軍は山東省に上陸し、十一月には青島を占領したことで本格的な戦時体制へと移行した。当時、ドイツ領であったミクロネシア（南洋群島）においても、一九一九年（大正八）に委任統治領として日本が占領することになり、後の沖縄県人の移動場所として注目を集めるようになる。

第一次世界大戦の勃発は、国内における輸出増大による「戦時景気」を呼びこみ、日本

経済が活発化するきっかけとなり、沖縄県においては、これまでにない「サトウキビ景気」として沸き立つ状況になる。各村々においては、小規模ながら農家による自家製糖で、砂糖組（与）による共同運営がなされ、サターヤ（製糖場）も次々につくられ、それを後押しするかのように行政も積極的に糖業に関与する。また政治家も県を挙げて砂糖生産を基幹産業として推進すべく、糖業試験場や砂糖検査所などの建設を推進する動きが顕著となった。このような大正期前半の砂糖景気の影響は、官民挙げての事業推進の動きを加速化させ、現金収入の増加による篤農家（ウエーキ）も出現するようになった。⁹

しかし、第一次世界大戦の終結によるヨーロッパ地域の復興・安定は、これまで戦時景気にわきかえっていたアメリカや日本にとっては、「戦後恐慌」の到来とでもいうべき深刻な経済不況をもたらす要因にもなった。

とりわけ戦後恐慌が沖縄を直撃するのは、砂糖相場の急落に始まる一九二〇年（大正九）以降である。この年の一月には、大阪市場における黒糖相場が一〇〇斤当たり三九・〇五円、那覇市場は三五・九五円の最高値をつけて、沖縄社会はこれまでにない砂糖景気に沸いていた。ところが、その後、黒糖相場は急落し、翌年には十七円台まで落ち込む状況となった。この黒糖相場の急落は、これまで順調に推移していた庶民生活に深刻な打撃を与えることになる。

この黒糖相場の急落の影響については、当時の国税・市町村税の滞納率の増加にみとれる。一九一八年（大正七）に〇・三％であった国税滞納率は、一九二〇年（大正九）には七・一％に上昇し、一九二二年（大正一〇）に至っては四七・一％へと急上昇している。わずか三年間で滞納率が大幅に増加している。以後、昭和初期まで高い滞納率が続くことになる。こうした財政の危機的状況は、すぐに沖縄の金融業の中核を担っていた沖縄銀行・沖縄産業銀行・那覇商業銀行の三行破綻という異常事態に直結する。この未曾有の金融危機に対しては、預金の切り捨てと二五〇万円の日銀特別融資による当時の大蔵省の救済もあり、沖縄県は一九二五年（大正十四）に三行を整理・統合させて、沖縄興業銀行が設立された。¹⁰

9 豊見城市 市史編集委員会（二〇一〇）『豊見城市史 第三巻』豊見城市役所、三三〇

10 豊見城市 市史編集委員会（二〇一〇）三三一

また、この時期は食料不足も深刻化するようになる。「ソテツ地獄」と呼ばれる社会的状況である。不況のどん底にあえいだ民衆の多くは、米はもとより常食の芋も食べることが出来ずに、野生のソテツを食べて飢えをしのいだことから、一般に呼ばれるようになった。このソテツは、水洗いや調理の方法が不十分な場合は、腹痛や嘔吐、場合によっては意識不明の症状に陥り、死に至ることもある。その後、「ソテツ地獄」は、大正期後半から昭和にかけての沖縄のきびしい社会的状況を象徴する言葉として広く使われるようになった。

(二) 沖縄県における南洋移民増加の社会的背景

昭和に入ってから、大正期後半からの経済不況は続いた。一九二九年（昭和四）一〇月には、県会議員の湧上聾人による『沖縄救済論集』が発刊される。この本は、湧上がハワイ在の県人会に招かれた時、郷土を紹介するためにまとめたものであり、「ソテツ地獄」といわれた沖縄社会の疲弊をめぐる沖縄救済論の中心的な位置を占めた。

沖縄救済論にみる沖縄県の政策課題は、①砂糖に偏重している産業構造の是正、②移入超過の経済構造、③国税の支払い超過、④極端な金融難、⑤国庫補助金の低下、⑥海外移民や八重山への移民奨励などがある。これらに加えて、離島県であるための地理的環境の不利性からくる経済政策の失敗、さらには税制にみられる全国一律の法制度の施行によって、後発ゆえの貧乏県によるハンディキャップ等も挙げている。

ところで、大正期後半からは構造的な不況が長期化するなかで、県外、海外への出稼ぎ者や移住者が急増する。移動先は日本国内の都市部への移動を中心に、台湾などの日本の植民地、フィリピン、ハワイ、アメリカ合衆国、そしてブラジルなどの南米の国々などである。その頃、沖縄県では、サイパン・テニアン・パラオなどの南洋群島、フィリピンにおける移動も、戦時恐慌の影響によって増加の一途を辿っている。貧しさゆえの海外移住が日常化していた。

すでに多くの移民を送り出していた当時の沖縄県民にとって、南洋群島への移動は沖縄



小学校4・5年生の集合写真。ヤシ、パパイア、バナナの木がみえる（パラオ）仲栄真八重提供

から比較的近くに位置し、気候・植生も似ており、「出稼ぎ感覚」で行けることが大きな魅力であった。それに加えて、移動に関わる事務手続きが国内への移動と同様な方法（旅券なし）で行われたこともあり、多くの移動者を生んだ。とりわけ、糖業・漁業（サイパン・テニアン・パラオ・ポナペ）、パイナップル缶詰生産（パラオ）、製粉・製糖（ポナペ）など、地縁・血縁関係を基盤とした単身男性の移動が主であり、その後、移動先での生活が安定すると家族を呼び寄せるケースが目立つようになる。

（三）南洋群島における拓殖事業の展開——製糖業を中心に——

沖縄から南洋群島へ人口を押し出す力が「貧困」であれば、人口を吸引する大きな力となったのは、南洋庁設置の一年前に設立された南洋興発株式会社の事業開始である。

当時の南洋興発株式会社（以後、南洋興発）は「北の満鉄、南の南興」と称された。設立にあたっては日本政府の強い関与があり、朝鮮の国策会社である東洋拓殖株式会社が大半の資本金を出資している。この会社の陣頭指揮をとったのは、アメリカ、台湾での豊富な製糖事業の経験のあった松江春次である。¹¹

松江によれば、経済的視点からの南洋群島の評価は、「小さな島が広い海域に、遠距離に散らばって分布」し、「周囲の経済市場との連絡も便利とはいえない」としている。¹²

いわば、松江は島嶼地域ゆえの不利性を十分に認識していた。しかし、「南洋群島の経済的不利は、一見開拓を絶望ならしめる程のものであるけれども、仔細に之に対して科学的研究を進めて行くと、其の経済的不利の陰に、一二の非常なる長所の隠れて居るのを発見するのである。故にそれを巧みに活かし出すとき、此の群島は忽ち光を放ち、予想外の経済価値を発揮するに至るのである」としている。¹³これらの文言からは、南洋諸島の経済的不利性を、科学的研究を進めることでプラスに転換しようとする松江の強い拓殖精神が読み取れる。

ところで、現実の南洋群島における糖業は、サイパン島、テニアン島を中心として開発が計画された。それは日本では考えられない熱帯地域の過酷な気候環境にある荒地の開拓

11 沖縄県文化振興会史料編集室

（二〇一二）『沖縄県史 各論編第五巻 近代』沖縄県教育委員会、三五四—三五五

12 松江春次（一九三二）『南洋開拓拾年誌』南洋興発、二

13 松江春次（一九三二）四

でもあった。現に南洋興発が進出する以前に、この地で事業を行っていた西村拓殖・南洋殖産が製糖事業に失敗し、その後を引き継ぐ形で南洋興発が参入した。とくに南洋興発が課題としたのが、先の企業が失敗する原因となった労働力に関するものであった。これについて松江は、「言う迄もなく労力は資本と並んで事業の二大要素である。之を其の土地から求め得ない場合の経営者の苦心は、実際の経験を持つ人でない限り判り得まいと思ふのであるが、此の問題を間違へれば最早其の事業は成功の望みがないのである」¹⁴とし、労働力の確保を南洋開拓の最重要課題としていた。

このような経緯から松江は、人口過剰に苦しみ、早くから海外思想が発達し、すでにサイパン島にも進出していた沖縄県人を移民（労働者）として迎え入れることに目を付けていた。さらに、熱帯に近接する地理的環境で育った沖縄県人は、サトウキビは子供の頃から親しみを持っており、栽培技術の蓄積と経験があることも熟知していた。南洋開拓に松江が手を染めようとした頃の沖縄県は、黒糖相場の急落による経済不況による影響が深刻化し、財政状況が急激に悪化した時期でもあった。

一九二二年（大正十一）になると、すぐに松江は「移民募集」を沖縄県に出願し、サイパン製糖所長である藤田達一を派遣させた。その後、県庁からの募集の許可が下りると、亀井捨之助を募集人に依頼し、栗林汽船の日高丸に成年男子五四〇人を乗せて、六月初旬にサイパン島に直航させている。これが南洋興発による最初の大規模な移民輸送であった。こうしてこの年は、約二〇〇〇人の純労働移民を迎え入れて、前会社から引き継いだ約一〇〇〇人と併せて、島の開墾、工場、鉄道、諸建物の建設にあたらせている。¹⁵

当時の南洋興発による南洋移民には大きく分けて三種類あった。雇用主の企業と契約を結んで渡航する「契約移民」と、南洋庁の指定する入植地への移民、それ以外の「自由移民」である。このなかで「契約移民」は、南洋興発と契約を結んだ移民である。「自由移民」については企業との契約関係がなく、親戚縁者などを頼って渡航する農民や労働者、漁民や独立した商工業経営者などであった。¹⁶

昭和期に入ると、「自由移民」が増え続け、沖縄県出身者は、日本人全体の半数を超え



14 松江春次（一九三二）八一
南洋興発工場事務所 糖度分析所跡（テニアン、2012年）石川朋子提供



15 松江春次（一九三二）八三
南洋興発の砂糖きび運搬用蒸気機関車（サイパン、2012年）石川朋子提供

るまでになった(表1参照)。一九三五年(昭和一〇)を境に、南洋群島では現地住民の数を日本人の数が上回り、一九四二年(昭和十七)には、南洋群島在住者総数十四万五千七二人のうち、現地住民が五万一千九百一人であったのに対し、日本人が九万三千二〇人、なかでも沖縄県人は五万四千五百八十四人を占めていた。沖縄県人は日本人全体の約六割も占めるようになった。その他、東京都、福島県が上位に続いている。

一九三二年(昭和七)ごろの沖縄出身以外の南洋移民については、松江は増加してきた山形県や福島県などの東北地方の「契約移民」の働きぶりを、予想外の好成績を残していると評価している。しかし、熱帯地域でのサトウキビ栽培は、増加してきた東北地方出身の労働者にとっては過酷な労働環境として認識されるようになり、戦中期に入ると沖縄出身労働者への依存度がさらに高まっていた。

一九三〇年代に急増した沖縄県人の渡航目的は、徴兵忌避や高賃金労働を当てにしたものも増え、戦時体制下になると、兵站基地化のための土木労働なども加わり、多様化していった。

(四) ウラシーンチュの渡航

① 渡航ルートと渡航人数

南洋群島への定期船による運航は、南洋庁設置とともにスタートした。政府から日本郵船株式会社に補助金が交付され、定期的に運航できるようになった。大正十三年度には東西連絡線を新設し、昭和三年度には、神戸、横浜から南洋方面へ運航され、昭和四年度には、サイパン線も新設されている。定期運航がスタートした一九二二(大正十一)年度における主な航路

表1 南洋群島在住者人口(本籍地別)

	総数	現地住民	日本人※	うち朝鮮人	日本人中本籍地別上位3位			外国人
					第1位(%)	第2位(%)	第3位(%)	
1922	51,086	47,713	3,310	149	沖縄 702 (21.2)	東京 693 (20.9)	神奈川 120 (3.6) 福岡 120 (3.6)	63
1923	54,358	49,090	5,203	82	沖縄 2,391 (46)	東京 797 (15.3)	神奈川 109 (2.1)	65
1924	55,186	49,576	5,550	93	沖縄 2,508 (45.2)	東京 829 (14.9)	福岡 141 (2.5)	60
1925	56,294	48,798	7,430	98	沖縄 3,894 (48.4)	東京 963 (13.0)	神奈川 175 (2.4)	66
1926	57,466	48,994	8,395	95	沖縄 4,351 (51.8)	東京 979 (11.7)	福岡 262 (3.1)	77
1927	58,816	48,761	9,979	147	沖縄 5,132 (51.4)	東京 1,105 (11.1)	福岡 344 (3.4)	76
1928	61,086	48,545	12,460	176	沖縄 6,615 (53.1)	東京 1,632 (13.1)	福岡 370 (3.0)	81
1929	64,921	48,617	16,202	179	沖縄 8,289 (51.2)	東京 1,815 (11.2)	鹿児島 914 (5.6)	102
1930	69,626	49,695	19,835	198	沖縄 10,176 (51.3)	東京 2,190 (11.0)	福島 985 (5.0)	96
1931	73,027	50,038	22,889	225	沖縄 12,227 (53.4)	東京 2,334 (10.2)	福島 1,188 (5.2)	100
1932	78,457	50,069	28,291	278	沖縄 15,942 (56.4)	東京 2,713 (9.6)	福島 1,357 (4.8)	97
1933	82,252	49,935	32,214	313	沖縄 18,212 (56.5)	東京 2,851 (8.9)	福島 1,450 (4.5)	103
1934	90,651	50,336	40,215	318	沖縄 22,736 (56.5)	東京 3,494 (8.7)	福島 1,610 (4.0)	100
1935	102,537	50,573	51,861	546	沖縄 28,972 (55.9)	東京 4,053 (7.8)	福島 3,160 (6.1)	103
1936	107,137	50,524	56,496	545	沖縄 31,380 (55.5)	東京 4,310 (7.6)	福島 3,425 (6.1)	117
1937	113,277	50,849	62,305	579	沖縄 34,237 (67.3)	東京 4,369 (8.6)	福島 4,068 (8.0)	123
1938	122,969	50,998	71,847	704	沖縄 41,201 (57.3)	東京 4,710 (9.2)	福島 3,795 (7.4)	124
1939	129,103	51,725	77,254	1,968	沖縄 45,701 (59.2)	東京 4,484 (5.8)	福島 3,684 (4.8)	124
1940	135,708	51,106	84,478	3,463	沖縄 49,772 (58.9)	東京 4,554 (5.4)	福島 3,699 (4.4)	124
1941	141,259	51,089	90,072	5,824	沖縄 53,206 (59.1)	東京 4,620 (5.1)	福島 3,726 (4.1)	98
1942	145,272	51,951	93,220	6,407	沖縄 54,854 (58.8)	東京 4,931 (5.3)	福島 3,497 (3.8)	101
1943	148,972	52,197	96,670					105

(出典)『南洋群島統計年報』(1933)、『南洋庁統計年鑑』(1934-1941)、南洋庁『南洋庁公報』、外務省アジア局第五課『日本統治の治績を示す南洋群島に関する統計』(1954)より筆者作成。

※日本人には朝鮮人、台湾人、樺太人(1943年迄)を含む。空欄は統計なし。

を挙げると、以下の通りである。¹⁸

(1) 東廻線(年五回)、横浜、門司、二見、サイパン、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルート間の往復。所要日数が約五五日。使用船は松山丸。

(2) 西廻メナド線(年五回)、横浜、門司、二見、サイパン、トラック、ポナペ、クサイ、ヤルート間往復。但し時間に依り、二見に寄港せず。所要日数が約四四日。使用船は筑前丸。

(3) 西廻アンガウル線(年六回)、横浜、門司、二見、サイパン、ヤップ、パラオ、アンガウル間往復。所要日数が四二日。使用船は泰安丸。

沖縄県人の南洋群島への渡航は、定期運航ができるようになって以後、増加の一途を辿った。浦添からも六八五人もの南洋群島への移住者があり、多い順に挙げるとサイパン(二五二人)、テニアン(二〇七人)、パラオ(一〇〇人)、ロタ(五五人)、ポナペ(三五人)となっている。他には少数ながらトラック(十一人)、クサエ(一〇人)、ヤップ(七人)、パガン(三人)への移動者が確認される。

移動世帯数については南洋群島全域で二四一世帯が確認され、多い順にサイパン(八四)、テニアン(六一)、パラオ(四四)、ポナペ(十六)、ロタ(十六)となっている。また字別の移動者数をみると、城間(二五〇人)、伊祖(一二〇人)、仲間(七〇人)、西原(六六人)、内間(五一人)、牧港(四七人)などが移動者の多い字となっている。¹⁹これら移動数の多い字は、地縁・血縁関係を基本とする「呼び寄せ」による移動パターンが多かったものと推測されるが、具体的に南洋群島へのウラシーンチュの渡航に関わる特性を把握するために、証言資料から検討してみる。

まず沖縄全域の南洋群島への移動者の特性については、前述したように「契約移民」を中心とする製糖業への従事者が多いが、「自由移民」が多くなる昭和一〇年以降になると、漁業・商業従事者が増え、戦時体制下になると、兵站基地化のために、建設業従事者の増加がみられた。

18

南洋庁(一九三二)『南洋庁施政十年史』
四三〇―四三一

19

口絵表4、口絵表5を参照

②証言集からみたウラシンチュの渡航

『浦添市移民史 証言・資料編²⁰』に収録されている証言者の多くが南洋群島で生活した時期は幼少年時代のことであり、移動に関わる動機については亡くなった親・親類から伝え聞いた情報が主である。そのため、渡航を決意した具体的な情報はやや乏しい面もあるが、沖縄県における当時の「ソテツ地獄」の中で、「極貧」暮らしから抜け出すために、南洋行きを選択したと思われる証言が多く確認できる。

証言集から興味深い事象を挙げると、渡航前の肉親の職業については、製糖業以外の職業で、炭鉱労働（ラサ島・西表島）、漁業、写真屋、関西での女工などがある。その中で、移動前の職業経験を生かしたい気持ち強く持って、移動後も同じ職種に従事するケースもみられる。

移動者の大半は、南洋群島へ先行移動した親・兄弟などの生活基盤が安定したところで、妻子や兄弟を呼び寄せるケースが目立つ。

さらに、移動パターンについては、沖縄から直接移動する以外にも、日本本土、台湾、南米（ペルー）を経由して、南洋群島に移動してくるケースがみられる。南洋群島向けの定期航路の拡大によって、移動機会が増加したためであろう。

移動者の多くは、「呼び寄せ」による移動形態が多いことからわかるように、多くの移動者は親・兄弟、親類や同郷の人達の「情報」を頼りにしていたことが証言からは裏付けられた。多くの沖縄県人と同様にウラシンチュにおいても、先行移動した人の「情報」が移動を促す決定的な要因であった。（崎浜靖）

三 渡航先での生活

（一）南洋興発株式会社と移民

沖縄の閉塞状況からの脱却と夢を求めて南洋群島へ渡った当初の沖縄移民は、单身男性がほとんどであった。その後、生活の基盤ができると家族を呼び寄せたりした。

先述した南洋興発株式会社（以下興発と略す）創設後は、沖縄からの移民は年々増加

20

浦添市移民史編集委員会（二〇一四）
『浦添市移民史 証言・資料編』浦添
市教育委員会



家族でピクニックをした時の記念撮影（ポナベ）宮城福正提供

し、「出稼ぎの場」であった南洋群島が「生活の場」へと変化していった(表1)。

南洋群島には南洋庁設置と同時に「南洋庁特別会計」が設けられ、一般会計より多額の国庫補充金が投入され、財政は維持されていた。¹興発が製糖を成功させ、事業を拡大発展させていった結果、赤字続きであった南洋庁特別会計は、一九三〇年度(昭和五)、翌年度と黒字に変え、一九三二年度(昭和七)には国庫補充金が不要となり、財政の独立を達成させた。興発の主力製品である砂糖は、南洋群島の全移輸出額の七〇%を占め、移輸出品目の主要なものは、興発とその関連企業の製品で占めていた。²

移民にとっても興発の発展は、「出稼ぎの場」から「生活の場」へと変化していった重要な要因であり、興発の事業展開を追うことは、当時の南洋群島の社会を映し出すことにもなる。興発の事業展開を、沖縄移民の導入から製糖を成功させた時期を展開第一期(一九二二年～一九二九年)、成功による事業拡大によって南洋群島の財政確保に貢献した時期を展開第二期(一九三〇年～一九三五年)、南洋群島が戦時体制に移行していき、興発の事業が衰退していく時期を展開第三期(一九三六年～一九四二年)と時期区分できる。展開第三期は興発の事業が衰退していくが、南洋群島は軍需景気に沸き、一か所でのベロ万人以上の労働者を必要とする軍事施設の工事が始まり、沖縄からも多くの人たちが渡航した。³

南洋群島への渡航は、旅券が不要であったため、渡航時期・人数について正確に把握することは難しいが、表2の渡航世帯数から推測すると先述した展開第二期後半から第三期に多くのウラシーンチュが南洋へ渡ったことが推測できる。本項では、これらの時期に渡航したウラシーンチュの体験を紹介しながら当時の様子を概観していく。

(二) 南洋興発株式会社とウラシーンチュ

興発の従業員は「社員」と「現業員」からなり、沖縄出身のほとんどは現業員であった。⁴農場で働いた移民たちは、耕作者(小作人)、準耕作者(準小作人)、作業夫(人夫)に分かれていた。⁵城間の比嘉セイホは、興発の移民募集に応募し、大正時代にサイパ

1 南洋庁長官官房『南洋廳施政十年史』一九三二年 七四～八七頁(財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『沖縄県史研究叢書一〇 南洋廳施政十年史(影印本)』沖縄県教育委員会二〇〇一年)。大正十一年度から昭和六年度までの国庫補充金の総額は二千九十九万二千二百円であった(同書八九頁)。

2 安倍惇「南洋庁の設置と国策会社東洋拓殖の南進―南洋群島の領有と植民地政策(二)―」愛媛大学経済学会『愛媛経済論集』第五巻第二号 一九八五年十一月 二七～六四頁

3 石川朋子「沖縄南洋移民に関する一考察」『地域文化論叢第三号』沖縄国際大学大学院地域文化研究科 二〇〇〇年 一〇八～一一一頁

4 一九二九年(昭和四)頃の興発全従業員(三二二〇人)の七九%が沖縄出身(三三六九人)で、現業員(二八八人)の六五%(二二二人)が沖縄出身であった(今泉裕美子「南洋興発(株)の沖縄県人政策に関する覚書―導入初期の方針を中心に―」法政大学沖縄文化研究所『沖縄文化研究』第十九号 一七六頁)。

5 耕作者(小作人)は一戸当たり五町歩から六町歩の耕地割り当てを受け、休閑地や自家用地を除き毎年四町歩内外の蔗作を行い、収穫甘蔗の平均一割二分を耕作料として会社へ納付し、他を興発が買い取るようになっていた。作業夫(人夫)は興発の直営農場または

表2 引揚者給付金請求書処理表名簿にみる
浦添関係者の南洋群島渡航年別世帯数

渡航年	世帯数
大正3 1914	1
大正9 1920	4
大正10 1921	1
大正11 1922	3
大正13 1924	1
大正14 1925	4
大正15 1926	4
昭和2 1927	12
昭和3 1928	10
昭和4 1929	12
昭和5 1930	9
昭和6 1931	25
昭和7 1932	14
昭和8 1933	19
昭和9 1934	26
昭和10 1935	32
昭和11 1936	20
昭和12 1937	43
昭和13 1938	59
昭和14 1939	36
昭和15 1940	24
昭和16 1941	10
昭和17 1942	5
昭和18 1943	10
昭和19 1944	1
合 計	385

注) 「引揚者給付金請求書処理表名簿」
(浦添市移民史編集委員会『浦添市史移民史証言・資料編』浦添市教育委員会
2014年 476～512頁)より作成

ンへ渡った。サイパンでは六町歩（一万八〇〇〇坪）の畑でサトウキビを栽培し、人夫も雇っていた。⁶伊祖の銘苅蒲助は、一九三九年（昭和十四）にテニアン島に渡り、最初は興発の一日二〇銭の人夫として働いたが、五年経て妻を呼び寄せ、一町半から二町程度の耕作地をもらい一町歩小作として働き、その後は五町歩になった。一棟一〇坪位のトゥータンヤ（トタン屋根の家）を真ん中から仕切って、二世帯で住んでいた。生活も楽だったという。⁷このように、沖縄から南洋群島へ渡り農場で働いた者の大半は作業夫（人夫）から始まり、準耕作人（準小作・一町農・一町小作）、小作人へと変わっていった。作業夫には蒲助のように興発と契約した者と親類や小作人の一角に住んで日雇いに働いた者がいた。仕事を決めずに南洋に渡った人たちは、親類や同郷の小作人の下でひとまず働いて、定職を探した。⁸

興発はサイパン島で製糖事業を成功させると、製糖業の規模や農場を拡大しただけでなく、多種多様な事業を展開した。⁹これらの事業は傍系会社を設立したり、既存の会社を吸収合併したりしておこなわれ、さらに南洋群島以外にも進出した（表3）。

以上のような興発の事業展開は、南洋群島へ日本人移民のくらしが持ち込まれ、日本人社会へと変容していくことにもなった。その日本人移民の半数以上が沖縄出身者であっ

耕作農家の下で働くものであった。準耕作人（準小作人）は、耕作人の製糖期の労力を補うためや非製糖期の労働過剰を防ぐために設けられた制度で、一町半の耕地が割り当てられ、三年二期作に従えば毎年一町歩の作付けになることから「一町農」（一町小作）とも呼ばれていた（松江前掲書 二〇二頁）

浦添市移民史編集委員会『浦添市移民史証言・資料編』二〇一四年 浦添市教育委員会 一二三頁

浦添市史編集委員会『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』一九八四年 浦添市教育委員会 四二〇頁。『浦添市史第五巻』では「銘苅蒲助」となっているが、諸資料に基づき、ここでは「蒲助」に改めた。

親類や同郷者を頼って、または呼び寄せられ南洋へ渡ったという話は聴き取り調査のなかでもよく聞いた。桑江秀子の父も最初は人に雇われていたが、家族を呼び寄せる頃には同郷者を雇って、メーヌヤ（一町農）といった人夫小屋もあったという。前掲『浦添市移民史証言・資料編』一二六頁

『南洋開拓と南洋興発株式会社』の現況』南洋興発 一九〇四年 七～八頁

た。サイパン島やテニアン島等には、泡盛酒造所や沖縄芝居の常設館などもあり、沖縄さながらの様相であった。一方、商社が軒を並べ、公会堂、郵便局、その他産業施設、衛生設備、社会事業、文化的設備も整えられ、全く内地と異なることがなかったという¹⁰。他府県からの移民も多く、大和式の生活スタイルを取り入れるウチナーンチュもいた。

興発が事業拡大を順調に進めていくなか、沖縄出身移民を中心に、サイパン島で差別的待遇に対するストライキが起きている。興発の不正行為や差別待遇に対し、県人会を中心¹¹に結束し、闘争資金を用意したという。県人会は漢那憲和¹²、湧上聾人や伊礼肇¹³などの要人をサイパン島へ招聘し、交渉にあたった。

伊祖の渡名喜庸治によると、ストライキ後は給料がよくなり、人夫小屋にも天井が張ら

表3 南洋興発株式会社関連事業一覧

事業地		事業内容
南洋群島（内南洋）	サ イ バ ン	製糖、酒精、糖蜜、水産
	テ ニ ア ン	製糖、酒精、糖蜜、燐鉍
	ロ タ	製糖、燐鉍
	ア ギ ー ガ ン	甘蔗栽培
	バ ガ ン	水産
	ポ ナ ペ	澱粉、水産、無水酒精（計画中）
	ク サ イ	無水酒精（計画中）
	ト ラ ッ ク	水産
	パ ラ オ	水産、海運、造船
	ベ リ リ ユ ー	燐鉍
ト コ ベ イ	燐鉍	
外南洋	ニューギニア	ダルマ樹脂の採取、綿花栽培、緬羊試育、陸稲、玉葱黍、タピオカ、カカオ、カボック、野菜其他各種作物の栽培
	ハ ル マ ヘ ラ	ジュート、ラミー等繊維食物の委託栽培
	バ チ ヤ ン	椰子、鉍物其他（計画中）
	セ レ ベ ス	椰子園の経営、コブラ貿易、海運貿易、緬羊試育、綿花栽培、製糖、水力電気、鉍物（計画中） （南太平洋貿易株式会社）
	ア ン ボ ン	貿易、海運
	セ ラ ム	椰子、水産（計画中）
	ア ロ ー	椰子、製材（計画中）
	ア ラ フ ラ 海	真珠貝採取（海洋殖産株式会社）
	葡領チモール	綿花、護謨、珈琲、蒟蒻薯等の栽培、貿易、海運、鉍業其他
他	比 律 賓	燐鉍其他

注) 『南洋開拓と南洋興発株式会社の現況』昭和12年6月9～12頁より作成

10 サイパン会『サイパン会誌―想い出のサイパン―』一九八六年 一一七～一一八頁

11 野村進『海の果ての祖国』時事通信社一九八七年 一七一頁。「賃金の事から 沖縄人の罷業 四千名の農民人夫ら 南洋興発会社と争う」(『大阪朝日新聞附録九州朝日』昭和二年二月九日付)と報じられる小作争議が起きる(同書一七〇頁)。

12 浦崎康華『逆境の中で―近代沖縄社会運動史』沖縄タイムス社 一九七七年 一八八～一九〇頁

13 前川守仁『湧上聾人とその時代』ひるぎ工房 一九七八年 二四八～二六四頁

14 前掲書『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』四一八頁

15 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一二〇頁

16 前掲書『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』四四一頁

17 一九三二年(大正十一)現在。南洋庁『第一回南洋群島統計年鑑』昭和八年六月 一九二～一九三頁(南洋庁『南方資料叢書一〇一 南洋庁統計年鑑一』青史社 一九九三年)

れ待遇がよくなったという。サイパン島にはウラシンチュが一〇〇人くらいいて、県人会、村民会等にも参加していた。字会、村民会、県人会の順で行われた。年一回、県人会主催の運動会があった。村民会は南ガラパンの料亭で集まり、家族全員で集まる字会は五、六世帯が集まったという。¹⁴父が当山出身の内間安光も年一回の県人会が興発の倶楽部であって一〇〇人くらいが集まり、子供たちの表彰式やウチナー相撲大会、琉球舞踊などが演じられていたことを覚えている。父は同じ当山の人たちと模合もしていたという。¹⁵

また、国策会社の南洋拓殖株式会社（以下南拓）でも、沖縄人差別があり、県人会が交渉をしたことを内間安助はつぎのように証言している。会社には大和人（他府県人）、朝鮮人、沖縄人、島民が雇われていて、賃金差別があり、大和人、沖縄人、朝鮮人、島民の順で賃金格差があった。ポナペ島には、沖縄県人会があつて、六〇〜七〇人の会員がいて、会社と賃上げ交渉などを行っていた。¹⁶

今回の調査では、浦添村会や字会等の同郷組織についての詳細な情報は得られなかったが、少なくとも先述したような証言から同郷組織が存在し、助け合っていたことがわかる。

（三）ウラシンチュと仕事―証言を中心に―

限られたデータではあるが、「引揚者在外事実調査票」によると、ウラシンチュの最も多かった職業は農業で約六七％、続いて工業が約十五％、商業が約五％、鉱業約四％、交通業約三％となっている（口絵表11）。ちなみに一九三九年（昭和十四）一〇月一日現在の南洋群島在留邦人職業別人口では、農業約二一％、工業約九％、商業約七％、其の他有業者約五％、水産業約五％となっている（表4）。口絵表11と表4から南洋群島における日本人の職業は、農業、工業、商業が上位を占めていたことがわかる。また、一九二二年（大正十一）現在、約六八八九ヘクタールであった農耕地が、一九三九年（昭和十四）になると二万三一六八ヘクタールに拡大していることからわかるように逐次農業従事者が増加していった。¹⁷当初、農耕地のほとんどは甘蔗栽培が占め、農産物の約六〇％が甘蔗であった。¹⁷先述したように南洋群島の産業は製糖業の成功によるところが大きく、多くの

表4 南洋群島在住邦人職業別人口

1939（昭和14）年10月1日現在

支庁別	農業	水産業	鉱業	工業	商業	交通業	公務・自由業	家事使用人	其ノ他有業者	無業	総計
サイパン	7,208	570	122	1,422	1,722	625	394	340	1,373	10,810	24,586
テニアン	5,473	88	2	675	1,085	136	153	117	746	7,210	15,685
ロタ	509	40	194	129	249	96	65	18	225	2,064	3,589
ヤップ	87	30	424	110	157	66	122	2	76	636	1,710
パラオ	1,777	1,652	1,176	3,745	1,308	450	825	297	1,136	8,365	20,731
トラック	54	898	-	212	479	103	102	7	113	1,682	3,650
ポナペ	1,342	428	2	727	395	44	144	28	252	3,331	6,692
ヤルート	3	28	15	57	122	36	54	0	10	289	614
合計	16,453	3,734	1,934	7,077	5,517	1,556	1,859	809	3,931	34,387	77,257

注)南洋庁内務部企画課『第9回 南洋庁統計年鑑 昭和十四年』昭和16年刊行より作成

ウラシーンチュも甘蔗栽培に携わっていた。

日本人移住者が増えると、蔬菜の需要が高まると同時に内地への移出も増え、南洋庁は栽培者へ奨励金や種子等を給付したり、日本人蔬菜栽培組合をつくらせ、奨励金を給付したりして品質改良と増産を奨励した。¹⁸ 当山の内間三郎は、マタンシヤでキュウリや南瓜、冬瓜、大根、ネギ等の野菜づくりをしていた。¹⁹ 野菜づくりは組合で行われ、組合長が各家庭をまわっていたという。¹⁹ 伊祖の渡名喜庸治は、移出用の南瓜を栽培していた。²⁰ またオライ部落で野菜組合を作って、一回一円五〇銭で肥料運搬も請け負っていた。²⁰

甘蔗や蔬菜以外の農作物には、タピオカ、パイヤ、綿花、パイナップル、コーヒーなどがあり、製造業の原料となった。例えばタピオカは澱粉原料、パイヤはパイナップル原料として栽培されていた。西原の比嘉佑幸は、一九三九年（昭和十四）頃、パイナップル畑で働いていたが、一日一円にもならなかったので、海軍省の請負仕事に移った。²¹ この頃になると南洋群島は軍需景気に沸き、より高い給料を求めて転職をするものも多かった。

南洋群島の工業は、サイパン支庁管内の製糖業及びこれに附帯する酒精・酒類の製造が主であった。²² 製糖業については先述したとおりで、南洋群島の財政を担う産業であった。

酒精及び酒類製造も製糖事業の副産物の糖蜜を利用して製造され、南洋群島内で消費する程度のものであった。酒精（エタノール）は、一九二六年（大正十五）には設備を整え、移出の目的で製造したが、工業用とは区別していなかった。一九三〇年（昭和五）に南洋庁がその製造方法を規定し、燃料用エタノールの製造に着手し、製造量が四倍にも増えた。酒類製造は、一九三〇年（昭和五）の製造量をみると、焼酎、ウイスキー、泡盛、糖酒、日本酒、葡萄酒の順になっている。泡盛は、サイパン、テナアン、ロタ、ヤップ、パラオ、トラック、ポナペの各島で製造され、南洋群島の至る所で販売されていた。²³ その他に清涼飲料、澱粉、鳳梨缶詰、農水産加工、手芸品等の製造業があった。

南洋群島の開発に伴い、日本人移住が逐年増加していくなか、商業も急速に発展していった。一九三六年（昭和十一）年末の商業戸数は一五〇〇戸を数え、雑貨販売業が多かった。南洋庁設置当初は洗濯業、製靴業、理髪業、仕立業、旅館業等の日常的なものさ

18 前掲書『南洋庁施政十年史』二八〇～二九〇頁

19 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一一九頁

20 前掲書『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』四一八頁

21 同上書 四二四～四二五頁

22 前掲書『南洋庁施政十年史』三三〇～三四四頁

23 大宜味朝徳『南洋群島案内』一九三九年（『アジア学叢書』一一二）南洋群島案内』大空社 二〇〇四年）七八頁

えなかったが、一九二二年（大正十一）九月に「商工業補助規則」を制定し、一九二二年（大正十一）から一九三二年（昭和六）までの間に、二七業種一四二人に、合計十六万八三六三円を補助している。²⁴ サイパン、テナアン、パラオ等の市街地は繁栄し、内地の状況とほとんど変わりなかった。²⁵ ウラシーンチュからの聴き取り調査から、豆腐屋、八百屋、食糧雜貨店、菓子店、写真屋等を営んでいたことがわかる。²⁶

以上、ウラシーンチュの上位三位までの職業について概観した。四番目に多かった鉱業は、燐鉱やボーキサイト等の採掘事業が主であった。当初、職工や採鉱夫の大部分は島民²⁷で、採鉱運搬等の作業を行っていた。日本人は技能を有する作業であったが、昭和一〇年代に入ると多くの日本人が採掘事業にも携わるようになる。²⁸ 字内間の内間盛助もロタで農業をしていたが、高給職を求めペリリュー島に移り燐鉱夫として働いた。²⁹

（四）南洋群島の学校とウラシーンチュ

軍政・民政時代は島民子弟に対する教育がほとんどであったが、南洋庁時代には学齡児童も年々増加し、本格的に日本人子弟教育が行われるようになる。一九二二年（大正十一）四月一日、南洋庁設置と共に南洋庁小学校官制が發布され、島民子弟教育と区別された。³⁰ 一九四一年（昭和十六）には内地と同様に南洋群島でも小学校は国民学校と改称された。同年四月末の全群島の国民学校は三四校で、児童数は一万一〇〇〇人余となった（表5）。

南洋群島の公立の中等教育機関は、男子の場合、南洋庁サイパン実業学校（一九三三年開校）と南洋庁パラオ中学校（一九四二年開校）、女子の場合は私立南洋家政女学校（一九三六年開校、一九三九年に南洋庁サイパン高等女学校となる）と南洋庁パラオ高等女学校（一九四一年開校）で、いずれも対象は日本人子弟であった。当初、南洋群島の公立学校は、その内容においては内地の学校とほとんど同じであったが同等には扱われなかった。そのため、内地各学校への入学・転学等ができなかったが、南洋庁国民学校児童及び卒業生に対しては一九二一年（大正一〇）三月五日（文部省令第十三号）、中等教育機

24 前掲書『南洋庁施政十年史』三四四～三四七頁

25 同上書『南洋群島案内』七三頁

26 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一一九～一七〇頁参照

27 日本統治時代に現地住民の国籍について「南洋群島の住民は、之を島民と称する。日本帝国臣民とは其の身分を異にし、帰化、婚姻等其の本人の意思に依り、正規の手続きを履まなければ、日本帝国臣民たる身分を取得することが許されない。」（前掲書『南洋庁施政十年史』十一頁）とされた。現在、「島民」という呼称は、差別的用語とされ使用を控えられているが資料に基づいて当時の呼称を使用した。

28 『南洋庁統計年鑑』によると、一九三四年（昭和九）の現住民職業別人口数の鉱業人数は日本人が一〇一人、島民は二八二人であったが、一九三九年（昭和十四）には日本人が一九三四人、島民が八九五人で、日本人が十九倍に増加していることがわかる。

29 前掲書『浦添市史第五巻資料編四 戦争体験記録』四三四～四三五頁

30 財団法人南洋経済研究所『南洋資料第二三五号昭和十八年四月 南洋群島内地人子弟教育状況概要』（以下『南洋資料第二三五号』）七～八頁。

表5 南洋群島国民学校一覧 —1941年（昭和16）年当時—

支庁別	学校名	職員数	学級数		児童数		
			初等科	高等科	初等科	高等科	合計
サイパン	サイパン第一国民学校	24	19	4	1,115	195	1,310
	サイパン第二国民学校	12	9	2	453	69	522
	マタンシャ国民学校	8	7	2	419	70	489
	アスリート国民学校	13	9	2	493	74	567
	チャッチャ国民学校	11	8	2	354	60	414
	チャランカ国民学校	13	11	2	598	100	698
	タロホホ国民学校	12	9	2	402	61	463
	テニアン国民学校	21	17	3	903	131	1,034
	バガン国民学校	1	1	-	68	-	68
	マルボ国民学校	4	3	1	211	24	235
	カーヒー国民学校	14	11	2	549	58	607
	ハゴイ国民学校	11	9	2	369	64	433
	ロタ国民学校	9	7	1	364	65	429
	タルガ国民学校	5	3	1	120	30	150
	シナパール国民学校	3	3	-	86	0	86
ヤップ	ヤップ国民学校	3	2	-	95	0	95
	ヤップ国民学校フハユス臨時教室	1	-	-	4	0	4
パラオ	パラオ第一国民学校	15	12	2	798	87	87
	パラオ第二国民学校	5	12	2	474	58	532
	清水国民学校	4	3	1	131	38	169
	朝日国民学校	4	2	1	108	35	143
	瑞穂国民学校	4	2	1	98	16	114
	アンガウル国民学校	4	1	1	96	10	106
	ガラスマオ国民学校	2	2	-	79	-	79
	ベリリユー国民学校	2	1	-	54	-	54
	大和国民学校	1	1	-	71	-	71
	ガスパン国民学校	2	1	-	34	-	34
トラック	マルキヨク国民学校	2	1	-	58	-	58
	トラック国民学校	5	3	1	204	19	223
水曜島	水曜島国民学校	2	2	-	52	-	52
ボナベ	ボナベ国民学校	8	7	1	390	56	446
	ボナベ国民学校クサイ臨時教室	1	-	-	10	-	10
	春来国民学校	3	1	1	60	28	88
	マタラニーム国民学校	9	6	1	294	20	314
	マタラニーム国民学校ポーラガン臨時教室	1	-	-	15	-	15
ヤルート	ヤルート国民学校	2	1	-	42	-	42
計		257	185	38	9,671	1,368	11,039

関においては一九三八年（昭和十三年）二月十六日（文部省令第三号）により内地同様に扱われるようになった³¹。その後は、内地各学校への入学、転学、進学等が可能となった。サイパン生まれの上間芳子は、チャッチャ小学校に通っていた。学校には日の丸が掲げられ、登校すると門の前でお辞儀をし、帰りも正門でお辞儀をした。日の丸は上級生が当番制で掲揚していて、その際はトランペットが吹かれていた。教室には教育勅語が額に飾

注）財団法人南洋経済研究所『南洋資料第235号 昭和18年4月 南洋群島内地人子弟教育状況概要』1943年6月5日より作成

られていていつも席に座って斉唱していたので日常的に覚えていった。多くはなかったが沖繩出身の教員もいた。授業は教科書を使って読み書きをしたりして楽しかった。音楽は軍歌が多く、修身の授業もあった。教室は床張りでも立派な建物だったという。³² 学校での日章旗掲揚、皇居遥拝、教育勅語暗唱など、「皇民化教育」は公学校でも行われていた。

当時の子供たちから、学校はとても充実していたとよく聞かれる。小学校二年にポナペ島に転校した松原勝吉も学校や島の様子をつぎのように話す。

ナット村からボンボン船でコロニアにある学校へ通学していた。コロニアには南洋貿易のカツオ船の波止場があって、カツオ工場もあった。大通りには食堂、大橋写真館、双葉屋というお店や神社があり、学校では国語や算数の他に習字や絵、音楽の時間にはピアノの構造も学んだ。運動場には鉄棒もあり校舎の設備も充実していた。在学中にはポナペ支庁から表彰されたこともあった。卒業後は、パラオ中学に進学した。入学当初はパラオ国民学校の仮校舎で学んでいたが、しばらくして本校舎と寮が南洋神社の近くに完成し落ち着いた環境で授業を受けることができたという。寮は三人部屋で八畳くらいの広さで、一人ずつ机と布団があった。掃除は当番制で、食堂での配膳や洗い物も自分たちで行った。³³

前出の内間安光は、マタンシヤ国民学校からサイパン実業学校へ進学した。入学試験は筆記試験ではなく、国民学校での成績と口頭試問であった。マタンシヤ国民学校からは四人が入学した。午前中は勉強し、午後は学校の農場で家畜用の草刈り等実習が主だった。実業学校卒業後は軍の幹部候補になれるといわれていた。³⁴

南洋群島には、公立教育機関以外に興発附属の幼稚園や専修学校、専門学校等の私設教育機関もあった。当山の平敷寿恵子は兄たちからサイパン高等女学校への進学を勧められたが、洋裁が好きだったのでガラパンにあった三和洋裁学校に入学した。洋裁学校は、六か月間で午前と午後に分かれて授業が行われ、一〇人くらいのクラスだった。学校へは自転車³⁵で通っていた。サイパン島ではほとんどの人が一人一台の自転車を持っていた。洋裁学校で得た技術は、収容所でも戦後沖繩に引き揚げてからも活かされた。

32 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一三四頁

33 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一五七～一五八頁

34 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一二〇頁

35 同上書一四三頁

南洋群島が戦時体制下になると、学校も軍に徴用され、子供たちも軍事基地建設に動員されるようになる。(石川朋子)

四 戦争と引き揚げ

(一) 「南進政策」とウラシーンチュ

一九三三年(昭和八)、日本は国際連盟を脱退し、一九三六年(昭和十一)八月七日の五相会議で「国策の基準」決定し、南洋群島の今後の進路を方向づけ、「国防軍備ノ整備」を具体的に示した。³⁶つまり日本の軍事的意味においての「南方進出」が政府によって公式に発表されたことになる。さらに一九四〇年(昭和十五)七月二六日に「基本国策要綱」(閣議決定)、翌日に「世界情勢ノ推移ニ伴ウ時局処理要綱」(大本営政府連絡会議決定)が決定され、「大東亜共栄圏」の範囲に南洋群島も含まれることになる。³⁷南洋群島には、国際連盟規約第二二条の基地・要塞の建設禁止と、ワシントン条約の軍備の現状維持、の規定によって、軍備制限がなされていたが、日本は国際連盟を完全離脱したことによって、これらの条約による拘束がはずれ、公然と基地構築を始めていく。

軍備制限のあった一九三六年度(昭和十一)までの南洋群島の土木建設は、南洋庁がすべて興発に工事を請け負わせ、興発は請負師に下請けさせていたが、軍備制限がなくなると海軍が直接工事を担当した。南洋群島の土木建設は、第一期を南洋庁直接実施時代(昭和三十一一年)、第二期を横須賀海軍建築部時代(昭和十二十五)、第三期を第四海軍建築部時代(昭和十五年末以降)の三期に区分できる。³⁸表2の渡航年別世帯数からわかるように、第二期の横須賀海軍建築部時代(昭和十二十五)に最も多くのウラシーンチュが渡航している。一九三九年(昭和十四)から翌年にかけては、南洋方面の工事が全盛期で、労務者は一万人を超え、傭船は五〇隻に近かった。この頃の労務者は、業者、囚人、南方開発勤労隊、現地住民および工員という人たちが構成されていた。

ペルー生まれで当山出身の富名腰祥健も一九三六年(昭和十一)の移民募集に応募し、ペリリュー島に渡り、海軍省の飛行場建設の仕事をした。建設工事は、突貫工事で進めら

36

「一九三六年(昭和十一)八月七日、五相会議(抄)」『日本外交史ハンドブック―解説と資料』一九九九年四月一〇一頁

37

矢野暢『日本の南洋史観』中央公論社一九七九年 一八二―一八三頁

38

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦(一)』昭和十七年五月まで』朝雲新聞社一九七〇年 五二―六二頁を参考にした。

れた。沖縄での日当は四〇銭から四五銭程度であったが、ペリリューでは一円三〇銭で、二時間残業をすれば三〇銭が追加されたという。一九四一年（昭和十六）までに六回も沖縄から移民団がやってきて約一六〇〇人の沖縄出身の夫が来て、十一月頃までに飛行場は完成したので、給与が高かったマラカル島の燃料貯蔵槽建設労務に移り、開戦前までには二万トンの貯蔵能力がある燃料貯蔵槽を二基完成させたという。³⁹

沖縄県でも戦時体制への移行とともに、昭和一〇年代に入ると出先地として「南洋」への植民が積極的に推進され、太平洋戦争が始まると、「国策遂行の先兵」として南洋への移住が全県をあげて唱導されることになる。⁴¹一九四二年（昭和十七）には、「南方建設戦」再送出のため、南方引揚者名簿を作成するとともに南方進出に備えて農家の特技調査等も行われた。また拓南展や座談会、講演会等が開催され、南進熱を煽った。⁴²一九四二年（昭和十七）頃には、県の構想として「六〇万県民の半分の三〇万人を南方に進出させる」案も出た。⁴³しかし、国策として南方への移民政策が確定していないことや県内の労働不足等を理由に実現しなかった。

このように国も、県も南洋への進出を積極的に推進していくなか、南洋群島に公然と軍事基地が建設され、一九四一年（昭和十六）十二月八日の開戦時までは、陸上航空基地が九か所、水上基地が一〇か所も完成していた。⁴⁴航空基地以外にも燃料貯蔵施設、港湾施設、防備砲台等の軍事施設の建設によって、一か所で延べ一〇万人以上の労働者が必要とする大工事が始まり、南洋群島全体が軍需景気に湧き、沖縄からも多くの人たちが渡ってきた。

一九四一年（昭和十六）年頃になると、沖縄県では「出稼抑制策」がとられ、県外渡航が許可制となり、市町村の証明書や職業訓練指導所の証明書のない三〇歳以下の男子、二五歳以下の女子は乗船が許可されなかった。⁴⁵一九四一年にサイパンへ渡航した平敷寿恵子も、直接渡航するためには許可が必要だったため、村長に一九四一年以前申請としての許可を依頼したが断られ、一旦神戸に渡り、横浜に滞在してからサイパンへ向かったという。⁴⁶

39 前掲書『浦添市史第五卷 資料編四 戦争体験記録』四二七～四二九頁
一九四〇年（昭和十五）年頃、海南島を視察した貴族院議員伊江朝助は、政府の期待にこたえて「南進国策の第一線には沖縄県人が立ち上がるべきだ」として沖縄県人の南方進出を積極的に説いた。さらに翌年には南拓の理事長が沖縄を訪れ「沖縄県民は、わが南進国策の第一線戦士として、戦線勇士にも劣らぬ気持ちで進出せよ」と南方への進出を激励した（大田昌秀『近代沖縄の政治構造』勁草書房、一九七二年、二九〇頁、三三四頁）。

41 南洋以外にも本土への軍需工場の強制徴用、満州への分村計画の推進などによって、沖縄戦直前には県内の労働不足が生じた（安仁屋政昭「第四章 県外出稼と県内移住」沖縄県教育委員会『沖縄県史 第七巻各論六移民』一九八九年、四四〇頁）。

42 西原文雄「第五章 国策としての拓殖移住」沖縄県教育委員会『沖縄県史 第七巻各論六移民』一九八九年、五五七～五五八頁

43 同上書
前掲書『戦史叢書 中部太平洋方面海軍作戦（一）昭和十七年五月まで』六一頁

44 許可条件は、公出出張、婦人等の附添、応召入営者、国民指導所の就職斡旋した者、その他特殊事情のあるもの等とされた（西原前掲書、五五九頁『朝日新聞』鹿児島沖縄版、昭和十六年五月二十九日、六月十一日付）。

45 前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一四二頁

昭和一〇年代には徴兵忌避で南洋群島に渡ってきたウラシーンチュも少なくなかったが、このような戦時体制のなかで現地召集、軍事徴用へと駆り出されていく。この頃になると、沖縄から出稼ぎや移民意識の流れで南洋群島に移住した沖縄出身者は、四万五〇〇〇人を超えていた。沖縄移民の流れと日本の「南進」が重なり、その結果沖縄移民は「南進」の担い手としての役割をもつことになる。生活の場であった南洋群島が戦場へと変わり、ウラシーンチュたちも戦争に巻き込まれていく。

(二) 戦争とウラシーンチュ

一九四一年（昭和十六）十二月八日、日本軍はマレー北部に上陸、ハワイの真珠湾攻撃を開始し、太平洋戦争が勃発した。以後四年間に渡って本格的な全面戦争となる。

連合軍の反撃が本格的となり、日本軍側は次々と要塞を奪われ、一九四三年（昭和十八）九月三〇日の御前会議で、「帝国絶対国防圏」をマリアナ・西カロリン・西ニューギニアを結ぶ絶対国防線に撤退させることが決定された。この決定にもとづいて、マーシャル、ポナペ、トラック地区の老幼婦女子の内地引揚げを命じた。

一九四三年（昭和十八）末までにはマーシャル諸島では軍の要員を除き、徹底して内地送還は行われたが、クサイ島やポナペなどでは、農耕が可能なため、軍用の野菜づくりや航空基地建設のための労働力が必要であったため引揚げは強制ではなかった。マリアナ諸島やパラオ諸島は海の生命線として「帝国の絶対国防線」として考えられ、婦女子は農耕生産に従事させるため、引揚げではなく残留させる方針が取られた。⁴⁷

内間の当間盛助は、徴兵忌避で南洋群島へ渡り、ロタ島で農業、ペリリュー島とフワエス島で燐鉱夫として働き、一九四〇年（昭和十五）頃にはヤップ島に移って、同郷の女性を呼び寄せて結婚した。太平洋戦争が勃発し戦時体制になり、一九四四年（昭和十九）二月、ヤップにも海軍設営隊が駐屯するようになった。その頃に婦女子は全員引揚げることになり、妻も二人の子供を連れて沖縄に帰った。残った男は現地召集されたり、海軍に徴用されたりしたという。⁴⁸

48

前掲書『浦添市史第五巻 資料編四 戦争体験記録』四三七頁

47

この間の引揚者は一万六一七六人で、そのうちトラック諸島が三二四六人、ポナペ島が二二〇八人、サイパン島は二五九六人、テニアン島は一六五八人、ヤップ島は八二〇人、パラオ島は四九二〇人、ロタ島は三八七人、ヤルート島は三六二人であった（安仁屋政昭「移民政策」沖縄県教育委員会『沖縄戦研究Ⅰ』一九九八年 一二二～一二三頁）。

一九四四年（昭和十九）年、マーシャル諸島ルオット、クエゼリンの日本軍守備隊は全滅し、米軍に占領され、ついでトラック諸島が空襲を受け、基地として機能を失うことになる。この頃になって、トラック、マリアナ、パラオ等の各諸島の老幼婦女子の内地引揚げが取り上げられるようになった。しかし、その時はすでに米軍の潜水艦によって海域は支配され、引揚げ船が撃沈され、一五八〇人が犠牲になった。一九四四年（昭和十九）前半、軍は方針を換えてサイパン地区とパラオ地区の、十六歳未満、六〇歳以上の老幼婦女子に限定して、引揚げを強行した。⁴⁹

比嘉トシ子は、一九四〇年（昭和十五）に許婚者のまつパラオ諸島に渡った。一九四四年（昭和十九）に子持ちと妊婦は引揚げよう命令が出たので、次男がまだ赤子だったので港で待機していると引揚げ船は危険が迫っているということで妊婦と子持ちの乗船を禁止し出航したが、その船は撃沈されたという。⁵⁰

南洋庁職員は海軍嘱託に、興発従業員は軍属に、徴収され自由退職は一切認められなかった。工場・学校・資材・食糧・住宅等は接収された。抑留同様となった住民は、基地建设、戦闘要員として徴用されていた。また国民学校や公学校に通う生徒たちも、飛行場建設や整備に動員され、基地整備と防衛体制の強化が進められた。

表6をみると、ウラシーンチュは戦後浦添に引揚げた人が多かったことがわかる。つまり多くのウラシーンチュが戦場に残された。

一九四四年（昭和十九）六月十一日、米軍はサイパン、テナアン、グアムに対して一斉に空襲を開始し、飛行場、築港、対空陣地、海岸線の施設、建物を徹底的に攻撃した。六月十五日には第二海兵師団、第四海兵師団がチャランカノ海岸へ上陸し、⁵¹米軍は七月八日、九日の両日、島の北端に向かって掃討作戦を行い、手榴弾、火炎放射機、爆薬等で洞窟を撲滅し、焼き払いながら前進し、日本時間の一九四四年（昭和十九）七月九日午後三時十五分、サイパン占領を報告した。⁵²七月十八日午後五時、大本営はサイパン島の「玉砕」と「二『サイパン』島の在留邦人は終始軍に協力し、大凡戦ひ得るものは敢然戦闘に参加し概ね将兵と運命を共にせるものの如し」と発表した。⁵³「在留邦人」とまとめられた

49 安仁屋前掲書「移民政策」一二四頁

50 前掲書『浦添市史第五巻 資料編四 戦争体験記録』四三二頁

51 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 マリアナ沖海戦』朝雲新聞社 一九七〇年 五四六～五四七頁。

52 同上書 五一〇頁。日本軍はサイパン失陥によって「絶対国防圏」の作戦構想はやぶれ、本土での地上戦を想定し、太平洋正面における次期作戦指導方針として比島、台湾、南西諸島、本土、千島にわたる新防衛線の防衛を強化することになる（同書五四八頁）

53 同上書 五一〇頁。この「玉砕」発表とともに、七月十八日東条内閣は退陣した。サイパン失陥は、日本軍そして国民にとって、戦争の前途に不安を与え、重臣のなかにも和平の道を講じようという動きもでてきた（同書五一頁）。

54 一九四三年当時の南洋群島在留邦人は、九万六六七〇人であった。各島々の在留邦人数の詳細はわからないが、約六、七割は沖縄出身であったと言われている。

多くは沖縄県出身の移民であった。⁵⁴

守備隊玉砕後、日本軍の残存兵はタツポチョー山付近や山地、河岸等のほら穴、岩陰に潜入し、遊撃戦を続けた。⁵⁵ 戦線の北上に伴い、北へ北へと遭難した多数の在留邦人は、最後に残存兵とともにバナデルに追い詰められ、「心理的強制集団死」⁵⁶を試みる者あるいはマッピ山の断崖から投身する者やマッピ岬から海中に身を投じて命を絶つ者も多かった。

サイパンを占領した米軍は、七月十七日のうちにグアムへ上陸し、その日のうちにほぼ全島を制圧した。三日後にはテナアンへ上陸した。⁵⁷ 米軍は、占領した島々をB二九による日本空襲の基地とし、日本への空襲が本格化していく。南洋群島の戦闘は、地上戦闘のあった島と地上戦闘のなかった島に大別される。これら地上戦闘のあった島は製糖業を中心とした地域であり、在住者の約六、七割が沖縄からの移民であった。地上戦のなかったパラオ島やボナベ島等でも、空襲や餓えによって多くの生命が奪われた。

(三) 収容所と戦後引き揚げ

戦闘が終わり、各島々の住民は収容されていった。サイパン島のススツペ収容所には、占領から約一か月の間に一万四九四九人が収容された。⁵⁸ 一九四五年（昭和二〇）九月現在の収容人数は、日本人一万四二四人、朝鮮人は一三〇〇人、⁵⁹ チャモロ二三五〇人、⁶⁰ カナカ八七五人であった。⁶¹ サイパン島の一九三九年（昭和十四）現在の在留邦人は二万八一〇二人で、沖縄県出身は一万七二五四人で約六割を占めていた。朝鮮人は二九八八人、チャモロは二五九一人、カナカー一一七人であった。戦争のあった一九四四年（昭和十九）までにどれだけの増減があったかははっきりしないが、通説として当時のサイパン島在住邦人は約二万人で、戦死者は約一万、戦死者の約六割が沖縄出身といわれている。⁶²

収容された人々は、焼け跡の廃材やテント、トタン板で雨露を凌いだ。一つの小屋に二〇人から五〇人が詰め込まれた。戦闘終了後には日昼は収容所から解放され、野菜づくり等に従事した。事態が落ち着くと学校も開校された。⁶³ テニアン島ではチューロの元興発直営農場に、一九四四（昭和十九）一〇月中旬頃には、日本人約九五〇〇人、朝鮮人三七〇

55

一九四五年潜伏者は約七〇〇八〇人とされている。残存兵は米軍との停戦協定において「戦争捕虜」ではないという信念を貫くため、大本営や上級司令官に命令を要求した。そして当時サイパンの最高級指揮官であった天羽少尉から降伏命令を受け、一九四六年十二月一日、大場大尉以下四七人が山を下った。その後も約二五、二六人が山の中から収容された。同上書 五一三頁

56

かつては「集団自決」とされていたが、石原昌家の調査研究によると、集団自決は「日本軍を免罪にし、国家を免責する用語」となるため、本稿では「心理的強制集団死」とした。

57

テナアンはマリアナ地区の航空中枢であった。テナアンは一万七五〇人の海軍部隊が在島していたが、陸上戦闘兵力としては五〇五〇人に過ぎなかった。テナアンもサイパン同様、水際に配備された日本軍は事前の激しい砲爆撃でほとんど壊滅的打撃を受け、翌日には組織抵抗が終わった。その後もサイパン同様残存兵は一九四五年（昭和二〇）九月までゲリラ的抵抗が続けられた（同上書六二七、六四二頁、平間洋一「第二次世界大戦と太平洋島嶼戦争」太平洋学会『太平洋諸島百科辞典』一九八九年 二六一～二六二頁）。防衛庁防衛研修室戦史室『戦史叢書 中部太平洋陸軍作戦（二）』朝雲新聞社 一九六八年 五〇七頁

58

59

一九三九年の南洋群島在住朝鮮人は二九八八人となっているのに対して、収容人数が一三〇〇人となっているが、「戦争が近くなると朝鮮人が多くなっ

○人の民間人が収容された。⁶⁴当時テニアンには日本人一万五七〇〇人⁶⁵が在島していた。

テニアン島ではB二九のための高さ二〇〇フィートの無線タワー、滑走路、航空管制塔などが設営され、日本を攻撃する新たな拠点となった。南洋群島の島々は日本本土を爆撃する航空基地の役割を果たすことになる。収容された人たちは、その基地設営に動員されることになった。⁶⁶一九四四年（昭和十

九）十一月二十四日、マリアナ基地のB二九が初めて東京を爆撃する。その後も日本本土への空襲が相次ぎ、生産設備も港湾も鉄道も破壊された。これらのB二九による長距離爆撃は、主としてテニアン、サイパンのマリアナ基地から発進されたものである。⁶⁷一九四五年（昭和二〇）八月六日の広島、八月九日の長崎への原子爆弾投下も、テニアンから飛び立った爆撃機によるものであった。

南洋群島の戦闘は一九四四年（昭和一九）には終わっていたが、翌年九月二日の降伏文書調印まで、人々は南洋群島では約一年半の収容所生活を送った。民間人の内地送還は、一九四五年（昭和二〇）九月二五日から始まり、翌年一〇月までにはほぼ終了している（表7）。当初、米軍将校のなかには「内地に身寄りのない者」と「沖縄出身者」に限って、南洋群島に一〇年以上住んでいた者は島に残っても良いと指示したものがいたが、在住年数に関係なく「日本人を南洋群島から全部撤退させる方針」がとられ、旧日本海軍の軍艦や徴用された貨物船と客船、それに米軍のLSTやリバティ型船などで、日本本土や直接沖縄に強制的に送還された。しかし、南洋群島において現地住民と婚姻している者、そして婚姻によって出生した者は、島に残ってもよいことになっていたが現地に残った日本人男性は少ない。⁶⁸

サイパン、テニアン、ロタ、パラオ、ポナペ等の島々から引き揚げた日本人は二万〇四一人で（表8）、直接沖縄へ送還されたのは三万三〇七五人であった（表9）。日本本土

表6 引揚者給付金請求書処理者
表名簿にみる浦添別世帯数
の本邦上陸年別世帯数

上陸年	世帯数
1938（昭和13）	1
1944（昭和19）	22
1945（昭和20）	28
1946（昭和21）	365
不明	4
合計	420

注）「引揚者給付金請求書処理委員
名簿」（浦添市史資料編）2014
会『浦添市史資料編』浦添市教育委員会
年 476～512頁より作成

た」（当時十一歳男性からの一九八九年聞き取り調査による）、また「日本の軍人軍属として徴兵され、太平洋戦争の前線に動員された朝鮮人約十四万人、台湾人は約十二万人であった。」という記述がある（安仁屋政昭「南洋移民の戦争体験」『新沖縄文学』第八四号 沖縄タイムス社 一九九〇年 一一三頁）。

現在、「カナカ」という呼称は差別用語とされているが、ここでは日本統治時代の統計資料等に基づいた呼称を使用する。

61 ウイリアム H スチュアート『Saipan in Flames JUNE 1944 INVASION サイパン燃ゆ 一九四四年六月の侵攻』パシフィック・デベロプメント・インク
62 安仁屋前掲書「南洋移民の戦争体験」一一二頁
63 ウイリアム前掲書 十七頁、聞き取り調査による。

64 前掲書防衛庁防衛研究所戦史室「戦史叢書 中部太平洋陸軍作戦（一）」六四二頁
65 平間前掲書 二六二頁
66 聞き取りによる。

67 安仁屋政昭「沖縄戦―本土決戦のための捨て石作戦」歴史教育者協議会編『幻ではなかった本土決戦』高文研 一九九五年 四九頁

68 安仁屋前掲書「南洋移民の戦争体験」一一三頁
69 安仁屋同上書 一一五頁。GHQは、一九四五年十月十五日に外地引揚げを受け入れる十一の港を指定し、それを受けて厚生省は十一月二十四日に指定された港に「地方援護局」を設置した。

第2節 南洋群島

表7 南洋群島主要島別引揚げ期間

主要島	引揚げ期間
メレヨン島・ミレ島	1945年9月25日～同年10月7日
ウェーキ島・マーシャル島	1945年10月16日～翌年11月13日
バカン島・ロタ島	1945年10月12日～同年10月26日
ボナベ島・クサイ島	1945年10月16日～翌年1月15日
トラック島	1945年10月19日～同年12月23日
西カロリン（パラオ諸島等）	1945年10月19日～翌年3月6日
エンダビー島・モートロック島	1945年10月21日～同年11月7日
テニアン島	1945年11月16日～翌年4月22日
サイパン島	1946年1月22日～10月22日
アナタハン島	1951年7月

表8 南洋群島戦後引揚げ者数（日本人）

主要島	人数
パラオ諸島	6,010
ヤップ島	427
トラック島	709
ボナベ島	7,029
クサイ島	497
ヤルート島	77
サイパン島	2,253
テニアン島	2,052
ロタ島	987
計	20,041

表9 出身地への直接送還者数

	人数
朝鮮人	7,727
台湾人	550
中国人	136
沖縄人	33,075
計	41,488

注）安仁屋政昭「移民政策」沖縄県教育委員会『沖縄戦研究Ⅰ』1998年 125～126頁より作成

への送還は、神奈川県（浦賀、久里浜、横須賀、横浜）、愛知県（名古屋）、和歌山県（田辺）、広島県（宇品、大竹）、福岡県（博多）、長崎県（佐世保）、鹿児島県（鹿児島）などであった。浦賀には約一年半で南洋群島、フィリピン、南方地域から五万六〇〇〇人の引揚げがあった。寄港地におろされた沖縄人は、さらに列車や船を乗り継いで沖縄に帰っていった。また寄港地の近隣各県にそのまま定着した人々もいた。⁶⁹

73

帰還者会以外に、南洋ヤップ想いの会（一九七二年結成、現在組織的活動は行われていない）、沖縄テニアン会（一九七八年結成）、沖縄ロタ会（一九八〇年結成）、沖縄サイパン会（一九八二年結成）沖縄パラオ会（一九八四年結成、二〇〇七年解散）、ボナベ会（一九八六年結成）等、島ごとの組織も結成された。また南洋群島での地域単位（例…チャランカ会）、引揚げ先の沖縄での地域単位（例…南十字会）、南洋群島での帰属機関単位（例…

72

前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一六八～一六九頁。

71

「引揚げ者給付金請求処理表名簿」（四二〇世帯）からウラシンチュの上陸地は、久場崎（三五六）、浦賀（二九）、横浜（十六）の順となっている（同上書「引揚げ者給付金請求処理表名簿」〔浦添市移民史 証言・資料編〕四七六～五一二頁）。

70

県人会会長が子供たちを近くの小学校に通学できるように折衝して、地元の小学校に入学したが、石を投げられ、一週間も通学しなかったという（前掲書『浦添市移民史 証言・資料編』一六九頁）。

翌年には拡大され十八か所に設置されて、検疫や被服、日用品などを支給して帰郷援護業務を担当した。南洋からの引揚げ者と関係の深い浦賀引揚げ援護局の業務の特徴は、海外からの沖縄県人を沖縄へ直接送り出したのではなく、帰るまでの生活の場所として、引揚げ者を近隣の各県に定着させたことである（安仁屋前掲書「移民政策」一二八～一二九頁）。

テニアン生まれの宮城福正は、一九四五年（昭和二〇）十二月頃、ポナペから久里浜に向かうLSTに乗って引揚げた。久里浜から静岡と三重に行くグループに分かれ、福正たちは三重の加佐登（三重県鈴鹿市）に向かった。着いたところは海軍の兵舎があつて、ウチナンチュが二〇〇〇人くらいいて、県人会もあった。⁷⁰配給食が少なかったので、両親は近くの農家の手伝いをして米や麦をもらってきていた。タニシや黄色くなった大根葉等も拾って食べていたという。その後、沖縄に引揚げることになり、三重から名古屋まで汽車に乗って、名古屋からLSTに乗船し久場崎に向かった。久場崎に着くとDDTをかけられ、GMCに乗って、母の姉を頼り故郷に戻った。⁷¹引揚げ船の大部分は中城村の久場崎に上陸し、現在の沖縄市のインヌミヤードウイの収容所で、家族、親類の消息を確認した上で、家族のもとへ帰っていった。⁷²一九四五年（昭和二〇）から一九五二年（昭和二七）頃の沖縄では、沖縄島を中心に約十七万人の海外引揚げ者を受け入れている。（石川朋子）

五 戦後の渡航

（一）南洋群島帰還者会を中心に

南洋群島から引き揚げてきた移民たちは、一九四八年（昭和二三）二月に石川市（現うるま市石川）の宮森小学校校庭にて南洋群島における戦没者の慰霊祭を兼ねて生存引揚げ者の集会が開催され、その場で南洋群島帰還者会（以下「帰還者会」⁷³）が結成された。同会の主たる目的は、南洋群島の再渡航であつたが実現しなかつた。⁷⁴

現在の帰還者会は、会員相互の親睦、戦没者並びに開拓受難者の慰霊事業、そして旧南洋群島との親善友好等が活動の中心である。その他、サイパン会やポナペ会等は記念誌も発行している。⁷⁵近年では記録・記憶の継承として、沖縄移民のゆかりの地に標識を設置する等の活動も行っている。⁷⁶

慰霊祭は、一九六三年（昭和三八）十二月に那覇市識名霊園に「南洋群島沖縄県人並びに開拓殉難者慰霊碑」⁷⁷を建立以降は毎年行っている。また一九六八年（昭和四三）に「おきなわの塔」⁷⁸をサイパンに建立以降は、ほとんど毎年現地で慰霊祭を開催し、二〇一四年

サイパン女学校同窓会）等、さまざまな団体が結成されている。

沖縄県生活福祉部援護課「沖縄の援護のあゆみ―沖縄戦終結五〇周年記念」一九九六年 二六七頁。

『サイパン会誌』、『ロタ会会誌』、『ポナペ会誌』、『はるかなるテニアン』などを発行している。

『沖縄タイムス』二〇一四年五月二五日（二四）

一九六三年に那覇市識名霊園の一角を那覇市より永代借地権を取得し、建立（沖縄県生活福祉部前掲書 二六八頁）。ススツペから一九七四年に現在のマッピに移転された。一九七七年にはパラオ島コロールに「沖縄の塔」を建立、翌年にはテニアン島カロリナスに建立し、現地慰霊祭を開催している（南洋群島帰還者会「平成二十（二〇〇八）年度 南洋群島帰還者会 総会並びに懇親会」十五―十七頁）。

招待された高校生らは、慰霊祭参列、首里城や海洋博記念公園等を観光している。二〇〇三年六月二四日には浦添工業高校を訪問し、生徒と交流している。

名誉市民授与の理由は、①テニアン生まれであり、戦後、沖縄に引揚げた後も、同地をはじめ連邦全土で友好関係を築いてきた、②長年、募参団を率いて戦時中敵国同士であつた本土・連邦の関係を和合に導いた、というものであつた（三木健「原郷の島々―沖縄南洋移民紀行―」ひるぎ社 一九九一年 三六四頁）。

具体的な事業として、移民促進に関する調査企画並びに運動、会員相互の親

(平成二六) 現在で四五回を数える。三十三回忌の一九七六年(昭和五一)には一〇〇〇人が参加し、五〇回忌(一九九三年)には四〇〇人が参加し、組織的な慰霊祭の最後と位置づけられた四〇回目(二〇〇九年)の慰霊祭には二六七人が参加した。

一九八九年(平成元)から二〇〇七年(平成十九)の沖縄での慰霊祭には、ミクロネシアの高校生等を招待している。⁷⁹長年のミクロネシアとの交流が評価され、北マリアナ政府から、一九九〇年(平成二)に南洋群島帰還者会の宜野座朝憲会長(当時)に対して、名誉市民第一号が贈られた。⁸⁰

このように現在の活動の中心は、慰霊事業、親睦・交流等であるが、設立当初の会則によると「移殖民事業に関し政府並に沖縄海外協会に協力し其の実現を図る」(第三条)ことが目的であった。⁸¹また、沖縄海外協会の「海外便り」(一九四九年一月三一日付)では、南洋群島の資源を南洋群島帰還者及一般沖縄人の手によって開発し、以て沖縄人口問題の解決及沖縄産業発展に貢献することを目的にしたもので、沖縄移殖民事業に関し民政府及沖縄海外協会に協力していると紹介されている。⁸²つまり帰還者会は当初南洋群島への「再移民」(再渡航)を目的としていたことがわかる。実際、帰還者会が設立された一九四八年(昭和二三)九月には旧南洋群島への再渡航をGHQに要請している。⁸³

また、当時の帰還者会会長である仲本興正も、一九五三年(昭和二八)十二月十六日から三十一日までの十五回の連載「南洋移民問題の経緯」のなかで、沖縄人の移民地として旧南洋群島が最適地であることを主張し、「南洋群島帰還者会では、その門戸を開放すべく一九四八年以降今日まで五か年間に亘り、あらゆる機会を捉えて米軍当局に対し請願運動を続行している」⁸⁵と具体的な再渡航への請願活動を記している。

さらに帰還者会は、米国民政府から琉球政府に指示された旧南洋群島への再渡航に関する調査を琉球政府の依頼を受け、南洋群島帰還者の生活実態調査⁸⁶を行っている。

調査の結果、旧南洋群島への渡航希望者は二万一千四百八十五人(三八七七世帯)で約九四%が再渡航を希望している。⁸⁷ちなみに浦添村は、渡航希望者が一三九人で、約九六%が再渡航を希望している。渡航希望地はサイパン、パラオ、テナンの順となっている。⁸⁸

88

87

86 85

84 83

82

陸並びに海外移殖事情の紹介等が掲げられていたという。今泉裕美子「南洋群島引揚げ者の団体形成とその活動―日本の敗戦直後を中心として―」沖縄県教育委員会『史料編集室紀要 第三〇号』二〇〇五年 三二頁

同会は満十七歳以上の南洋群島帰還者をもつて組織されているとの紹介もある。那覇市市民文化歴史資料室『那覇市史 資料篇 第三巻五 戦後の社会・文化』二一四頁

南洋群島帰還者会前掲書 十六頁。

『琉球新報』一九五三年十二月十六日(三十一日(十五回))。

『琉球新報』一九五三年十二月十八日

財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『沖縄県史資料編十七 旧南洋群島関係資料近代五』二〇〇三年 六四八―七一二頁。調査は、一九五三年(昭和二八)四月二〇日より南洋群島帰還者に対して行われ、七月二日に第一次報告が提出された。調査人員は二万二千八百八十八人(四〇六一世帯)、調査項目の詳細はつぎのとおり。

A 現在の状況(職業別、家族数、稼働者数、生活状態、健康状態、資産状態)、B 南洋にての状況(渡航年度、引揚年度、住所、職業、生活程度、資産状況、現地の友人)、C 渡航希望について(希望地、希望職業、旅費の有無)

文教局研究調査課『琉球史料 第四集』琉球政府文教局 一九五九年(『琉球史料 第四集社会編I(復刻)』那覇出版 一九八八年)一〇八頁

調査人員が四五人。渡航希望地・希望職業はつぎのとおり。サイパン四三人、パラオ二九人、テナン二二人、

以上のように帰還者会設立当初、積極的に再渡航の要請活動を行っていたことがわかる。当時の沖縄は、海外、本土からの引揚げで人口は増加し、さらに米軍基地が強化され土地は接収され、耕地面積は激減していたため、海外移住が社会的要請でもあった。しかし、一九五八年（昭和二三）に米国民政府から琉球政府に「再移民」は困難であるという回答が届き、帰還者会の請願活動も停滞していった。⁸⁹

渡航要請地の旧南洋群島（ミクロネシア）は、米国信託統治領で、「戦略地区」と指定されていたため、安全保障上の理由によりミクロネシアの如何なる区域も随時閉鎖できた。つまりミクロネシア全域が重要な米軍基地と位置づけられ、外国人の渡航は制限されていた。米国によるミクロネシアの統治政策や沖縄の社会状況の変化等、「再移民」は断念せざる得ない状況となっていくなか、帰還者会の活動の中心も慰霊事業へと転換していった。⁹⁰

慰霊墓参として旧南洋群島へ再渡航が実現したのは、一九六八年（昭和四三）五月であった。一週間の日程でサイパン・テナンの両島を巡拝し、サイパン島スッペの沖縄人墓地内に「おきなわの塔」を建立し慰霊祭を行い、六月七日に帰国した。帰国した墓参団を遺族ら三〇〇人が出迎えた。⁹¹サイパン滞在中には、戦争孤児となり現地の人に育てられた日本人青年三人との再会もあった。⁹²肉親の消息を確認できていない引揚者にとって、このような再会の報道は肉親が生存しているのではないかという微かな期待を寄せることにもなり、このような思いで墓参団に参加する者もいた。

慰霊墓参へは、戦死者への供養が目的であるが、居住や学校跡等を訪ねるためや癒しのために参加する者も多く、旧南洋群島への精神的な結びつきが強い。⁹³南洋群島から引き揚げてきた沖縄は米軍占領下であったため、南洋での戦争体験、収容所体験が、沖縄の戦後体験と、意識の上で続く結果となり、南洋との「負の精神的な結びつき」となる。同時に、家族が生きて暮らしていた豊かな南洋経験、幸福感の再確認等が「正の精神的な結びつき」として表れ、帰還会の活動を支えていると思われる。つまり現地慰霊祭に参加することは、慰霊と同時に癒しと自己確認の場にもなっている。いいかえると南洋帰りにとっ

ボナペ十六人、ロタ四人、その他二五人。希望職業は農業七二人、商業五人、水産業四人、工業一人、その他五七人（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室 前掲書）。

大原朋子「戦後沖縄社会と南洋群島引揚者―引揚者団体活動に注目して―」『移民研究』第六号 二〇一〇年三四頁

90

会則は、一九五四年七月に全部改正され、現在の会則は一九八三年六月二三日から施行されている。現行会則の目的及び事業はつぎのとおり。第二条（目的）「会員の伝統的団結力のもと相互の連係を緊密にし、親睦を深めるとともに、戦没者並びに開拓受難者の慰霊を行い、さらに旧南洋群島との親善友好を図ること。」第三条（事業）「一、会員相互の親睦に関すること。二、慰霊祭並びに慰霊碑敷地・慰霊碑の保存及び維持管理に関すること。三、その他、目的達成に必要なこと。」南洋群島帰還者会 前掲書 十二頁

91

『琉球新報』一九六八年六月七日 夕刊（三）

92

『琉球新報』一九六八年六月八日 朝刊（七）

93

石川朋子「南洋移民にとつての南洋」『沖縄タイムス』二〇〇七年一〇月五日、「のこされた人の心に―四八年目の墓参―」『地域と文化』第八〇号 一九九三年 十二―十八頁

ての南洋経験は、アイデンティティの源でもある。帰還者会の活動を支えているのは、このような南洋経験と、苛烈な戦争体験から生まれた非戦と平和を願う心だと考えられる。(石川朋子)

(二) バン・キャンプ社を中心に

戦前・戦時中の南洋漁場

日本政府の南進政策に呼応して日本の漁業資本と漁民は南洋群島から東南アジアにかけて進出した。沖縄移民の漁業従事者はそう多くはなかったが、日本人全体の中で沖縄出身者の占める割合ははるかに高かった。浦添市史によると、戦前の浦添における漁業は「海浜近くの牧港、旧小湾、城間の部落で半農半漁の程度で、主として糸満から転住した人々によって営まれていた。獲れた魚介類は城間の中道に小規模の朝市がたつて、近隣部落の人々に売ったり行商でさばく程度だった」と解説している。外務省の海外旅券下付表によると、戦前に「漁業」目的で渡航した浦添出身者は一九二九年(昭和四)から一九三八年(昭和十三)までに十一名いた。渡航先地はフィリピン、オランダ領ジャワ、英領シンガポール、英領ボルネオである。引揚者在外事実調査票によると「水産業」に従事していたのは三世帯あり、本籍字別・職業別世帯数は、伊祖一、城間一、勢理客一で、在外地別・職業別世帯数は南洋群島のサイパン一、ロター、そして台湾一となっている。⁹⁵

さらに太平洋戦争が始まり、日本はアジアに進駐して占領地を拡大すると同時に軍政を敷き、軍納魚を確保する目的で南方の占領地の水産業発展にも力をいれた。進出した日本企業は南方での漁撈^{ぎょうらう}に慣れていた沖縄出身者を重宝し、採用した。一九四二年(昭和十七)四月から一九四三年六月まで沖縄から南方進出した漁団の乗組員は合計五五四人にのぼった(表10)。中でも宮古伊良部出身、糸満出身が多く、ボルネオ、シンガポール、ニューギニアの南方基地でのカツオ漁、缶詰・カツオ節工場で働いた。宮古からは女工も多かった。浦添村牧港出身の仲西善保は、一九三八年(昭和十三)七月八日に旅行目的を漁業として英領北ボルネオへ旅券が下付されており、ボルネオ水産で働いた。⁹⁸

表10 沖縄県南方出漁団

出漁年月日	出 漁 地	出漁人数	提携会社
昭和17年4月	マ ニ ラ	214	南洋水産
同	タ ラ カ ン	38	ボルネオ水産
昭和17年11月	ス ラ バ ヤ	84	林兼商店
昭和18年4月	ニューギニア	52	南興水産
昭和18年5月	昭 南 島	70	大城・金城組
同	サンダカン	26	皇道産業焼津実践団
昭和18年6月	ビ ル マ	70	大洋水産

計 554 人

沖縄県史料編集所『沖縄県史料 近代1 昭和18年知事事務引継書類』沖縄県教育委員会、1978年、343頁をもとに作成。

- 94 浦添市史編集委員会編『浦添市史』第四巻資料編三、浦添市教育委員会、一九八三、六〇頁。
- 95 浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史 証言・資料編』浦添市教育委員会、二〇一四、三二五～三二六頁。
- 96 沖縄県農林水産行政史編集委員会編『沖縄県農林水産行政史 第八・九巻』財団法人農林統計協会、一九九〇、三一三～三一四頁。望月雅彦『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』には宮古出身の「証言」記録がある。
- 98 浦添市移民史 証言・資料編三〇三頁。望月雅彦『ボルネオに渡った沖縄の漁夫と女工』ボルネオ資料研究室、二〇〇一、八四頁、二〇三頁。

しかしながら、一九四四年（昭和十九）頃から次第に戦局が悪化し、漁民の現地徴兵、漁船の軍隊への徴用、また徴兵のために南方漁業からの早期帰還などで、次第に衰退していった。

一方、南洋群島に移住した日本人は甘蔗栽培を中心とする農業とマグロとカツオ漁を中心とする漁業に従事した。浦添関係者としての漁業従事者には、戦前のテニアンでマグロ船、カツオ船の船主になった儀間光八（伊是名村出身、戦後浦添に移住）がいる。光八の三男、儀間光男によると、「南洋にウミンチュが来て、船をもつて儲けて沖縄へ引き揚げられるけれど、引きとり手がないということで預けていったため、漁船団を作った」という。ポナペからの引き揚げ者である松原勝吉の父は「カツオ漁の漁業移民としてポナペへ来た」と証言している。

一九四二年（昭和十七）の南洋群島の漁業従事者は日本人が六七一九人で、そのうち、沖縄出身者は六一六四人（九二%）であった¹⁰⁰。また、昭和初期から南洋漁場のマグロ・カツオ漁業を取り仕切っていた南興水産の一九四四年（昭和十九）の統計でも、漁業従事者・漁船乗組員一七五〇人を含めて二九六三人で、その従事者は沖縄出身者だった¹⁰¹。

沖縄出身者が南洋漁業で重宝がられていた根拠は、南洋群島でも「沖縄県人の低賃金と巧みな漁撈技能、環境適応性」¹⁰²で、そこには昭和初期から続いた沖縄移民への伝統的な評価があった。一九四五年（昭和二十）の敗戦で、南興水産などの企業は閉鎖、日本人も帰還し、特に沖縄人の独占場であった南洋漁場での操業は終わった。

当時、漁業に従事していた多くの沖縄出身者は魚がよく取れる豊かな漁場があり、生活も豊かであったと証言している。

戦後の海外漁場への期待

戦前、日本の委任統治領であった南洋群島は戦後、アメリカの信託統治領となり、アメリカの指導のもとで独立へ向けた国づくりを始めた。漁業を中心とする産業育成も重要な国作りの柱となった。当時、沖縄では軍政府・琉球民政府（USCAR）統治下で戦災から

99 『浦添市移民史 証言・資料編』一五七頁。

100 『沖縄県農林水産行政史 第八・九巻』、三〇二頁。「表四・二・二」を参照。

101 前書、三二四～三二五頁

102 前書、三〇三頁

の復興の諸施策が実施されていた。対日講和条約が調印され、独立した日本は漁業の再建へ向けて特に漁場に関し外国との漁業協定締結へ向けて交渉を開始した。沖縄の漁業関係者は日本政府に「海外への漁業進出について日本の漁業者同様に琉球漁業者にも同等の機会を与えること」と、また琉球民政府に対しては「太平洋信託統治領（旧南洋群島）や東南アジアの漁業開発にあたっては、戦前の実績、現下の窮状を配慮すること」を要請した。これに対して、民政府は「太平洋信託統治領との交渉があり、まだ認められない」とした。また近海漁場の荒廃、過剰操業をあげて、南方進出も認めなかった。さらに、民政府援助で作った遠洋漁業用の大型漁船が目的外の高瀬貝採取などに使用されていること、一九六二年（昭和三七）のマグロ漁船・第一球陽丸がインドネシア機に襲撃されて乗組員の四人の死傷者（うち一人は死亡）を出した拿捕事件等の不安要素があったので、民政府は琉球の漁業者の海外漁場での操業はまだ不当と判断した。¹⁰³

戦後の海外漁業の大きな特徴は一九四九年（昭和二四）から一九六〇年（昭和三五）までの遠洋採貝藻漁業と一九六五年（昭和四〇）から一九八二年（昭和五七）までの南方基地カツオ漁業であった。

パラオのバン・キャンプ社

日本の委任統治時代の南洋群島周辺の漁場は、日本企業と日本人漁民（特に沖縄人漁民）にとつて、アメリカへのマグロ缶詰輸出で外貨を稼ぐ場所であったが、太平洋戦争によって、その経済基盤をすっかり失ってしまった。

その後、南洋漁場が再び活気を取り戻したのは一九五三年（昭和二八）にアメリカのバン・キャンプ社が日系企業と提携した会社を米領サモアのパゴパゴにカツオ缶詰会社を建てたことがきっかけとなった。戦後、アメリカのマグロ缶詰需要が下降、さらにマグロ資源の減少で、それに代わってカツオ資源が見直された時期だった。アメリカの水産会社資本と日本の大手商社の漁業資本は、米領サモアのサント、フィジー、タヒチなどに基地を設置した。一九六〇年代には日本船籍による水揚げは最盛期を迎えた。一九五八年（昭和

103
前書、三一六頁



沖縄人移民がカツオ節等の出荷で使用していた倉庫（パラオ、2012年）仲地清撮影

三三) から韓国籍の漁団、一九六四年(昭和三九) から台湾籍も加わった。¹⁰⁴

バン・キャンプ社が一九六四年にパラオのマラカル島に基地を設置した際、バン・キャンプ社の代理の日本企業は沖縄の漁船及び漁民と契約を結び、マラカル基地に水揚げした。マラカル島には、戦前は日本企業の南興水産会社があり、沖縄移民が多く従事していたので、今回のバン・キャンプの基地開設は沖縄部落の再来となった。

一九三一年(昭和六) 静岡県焼津市出身者が作った南興水産は、一九三九年(昭和十四) ごろ、南洋のカツオ・マグロ漁業進出を目指して、パラオに工場を設置し製造したマグロ油漬缶詰をアメリカへ輸出していた。パラオ、トラックでマグロはえ縄専用船の建造、冷蔵運搬船の建造、製氷冷凍冷蔵工場の拡大など業務を担っていた。¹⁰⁵

一九六四年(昭和三九) 六月に、南洋水産合資会社と契約を結び、バン・キャンプ社のパラオ基地にカツオを水揚げした沖縄出身者五三人がいた。南洋水産との契約は一年で、家族手当五〇ドル、捕獲量の歩合を六対四で、沖縄側漁民に有利であった。しかし、カツオがキロ当たり七セント、マグロがキロ当たり九〜一〇セントの安値であった。一九六五年一〇月に帰沖した彼らは、捕獲量が少なく、カツオも安値で期待通りの利潤は出なかったと語っていた。¹⁰⁶

バン・キャンプ社はパラオから一九八二年(昭和五七) に撤退したが、それまでに様々な形で沖縄漁民が出稼ぎに行った。一九七七年(昭和五二) には宮古伊良部町船籍五隻六七人が出漁している。¹⁰⁷

バン・キャンプ社で働いた仲間

久米島出身の国吉昌則さんはバン・キャンプ基地で働き、そのままパラオに留まった沖縄からの数少ない移住者である。今は漁業会社を経営して漁船を持ち、マグロ、カツオ漁とレストラン経営で生活を営んでいる。両親は久米島の鳥島の出身で、一九三一年(昭和六) 三月三十一日にトラック島で七人兄弟の二男として生まれた。その頃、両親はトラック、ポナペ島でカツオ漁に従事していた。一九四四年(昭和十九) に兵庫県経由で帰還

104

松田恵明「南方漁業における国際協力」『南方海域調査研究報告書』鹿児島大学、一九八七。松田は「相互理解、相互信頼、共存共栄」を強調する。

105

小深田貞雄「南洋群島時代の水産業」『パシフィックウエイ』一二一号、太平洋諸島地域研究所、二〇〇二

106

本部町史編集委員会編『本部町史資料編四 新聞集成 戦後米軍統治下の本部』本部町、二〇〇二、四四〇頁

107

川満昭吉『一万八千五百キロの旅 南洋鯉漁業視察報告書』一九七七年、二頁。および『沖縄県農林水産行政史 第八・九巻』三一九頁、「表四・二・四」も参照。

し、戦後は久米島でサトウキビ栽培に従事して家を建てたことを自慢した。久米島では年間二〇〇トンのサトウキビを生産する篤農家であった。

一方、二男であったので、いずれ海外に出る計画を持ち、東村の沖縄開発青年隊に入隊して、南米への移住の準備に取りかかっていた。その頃、パラオのバン・キャンプ社がカツオ漁船と乗組員を募集していることを聞き、応募した。そもそのブラジル移民の計画は、両親の反対にあい断念し、生まれ島の南洋群島行きとなった。一九六〇年代、バン・キャンプ社のパラオ基地では九〇人の沖縄漁民が働いていた。本部から二隻、渡名喜から二隻、久米島から一隻、久高から一隻と契約した。国吉は久高漁協のカツオ漁船に乗り、一九六四年（昭和三九）六月十七日、パラオに着いた。パラオ周辺の漁場でカツオを捕り、パラオの基地に出荷し、缶詰工場のあるサモアへ送っていた。パラオ周辺の海底は泥状態でカツオがよく釣れた。

国吉は、元パラオ大統領（一九九三年～二〇〇一年）ナカムラ・クニオの姉と結婚し、カツオ漁で稼いだ三〇万円を選挙運動の資金として援助した。それが当選の要因だと国吉は自慢した。一九七六年（昭和五一）二隻のマグロ漁船、一九七七年に二〇トンクラスのマグロ漁船一隻を日本政府の支援を得て所有した。現在は漁業会社を経営し、所有する四隻のマグロ船で、フィリピン人の機関長と船員十一人を雇って操業している¹⁰⁸。

他に、バン・キャンプ社での仕事で、一緒にきた宮古伊良部村佐良浜出身の具志堅健（一九三六年生）もパラオ人と結婚して住みついたが、残りの同僚は沖縄へ帰った。具志堅は、一九六一年（昭和三六）頃、漁船の機関長としてパラオに来た。バン・キャンプ社では漁船の修理工として働いたが、会社が一九六四年（昭和三九）に閉鎖された後は、太平洋漁業株式会社に移り、そこで整備員をした。五九トンの文栄丸を購入して、政府の仕事、また、漁船のエンジン修理工場を経営した。当時は二〇〇人ほど沖縄出身者がバン・キャンプ社で働いていたと語った。具志堅は、沖縄慰霊塔のある墓地公園に眠っている¹⁰⁹。

また上原安秀（一九三二年生）は本部町並里出身者を父親に持つパラオ二世で、沖縄で生活していたが、一九六五年（昭和四〇）に、バン・キャンプ社の仕事で、生まれ故郷の



パプアニューギニア沖でのカツオ漁のようす
三木健提供



カツオ漁船 三木健提供

109

『世界のウチナインチュニ』三二六～三二七頁

108

二〇一二年二月二九日、パラオの国吉昌則さん経営のレストランでインタビュー。琉球新報社編集局編『世界のウチナインチュニ』ひるぎ社、一九八六年、三二二～三二三頁も参照。

パラオに戻り、そのまま住み着いた。父の保永さんは、大正時代にリン鉱石採掘のためパラオの南のアンガウルに来了。父はアルコロン村出身のトシエと結婚し、四男二女が生まれた。戦争に突入し、防空壕に隠れていたところ、米軍の捕虜となり、家族はサイパンの収容所に送られて、そこで二か年を過ごした後、沖縄へ送られた。安秀は沖縄で米軍船の乗務員として働き、一九六三年（昭和三八）小禄出身の初江と結婚した。バン・キャンプ社で一〇二年勤めた後、沖縄へ戻り、子供もできていたが、一九六九年（昭和四四）に再びパラオへ一人で戻った。長い間、パラオの漁業組合で働いていたが、亡くなった。¹¹⁰

沖縄移民ネットワークと海のネットワークの基軸

沖縄船籍の南方基地漁業は、一九七〇年（昭和四五）以降に急増し、一九七八（昭和五三）に漁船数、漁獲量とも最高に達したが、その後、消費国アメリカの不況、信託統治領の独立に伴う混乱や漁業の現地化政策の強化、より高能率的なまき網漁業の台頭などで次第に衰退していった。一九八〇年代には沖縄船籍はパラオ、パプアニューギニアから撤退し、ソロモン諸島で継続するだけとなった。沖縄船籍はほとんどが宮古郡伊良部町および平良市所属であった。宮古漁民のソロモン諸島との経済交流、国際交流への貢献は大きい。¹¹¹

漁業協定で二〇〇海里的の領海が敷かれるなかで、以前のように自由捕獲はできなくなり、常に相手国との交渉により捕獲量と入漁料が決められている。現在、沖縄漁民は Guam、ソロモン基地を中心に捕獲している。戦前の沖縄漁民の南洋群島と東南アジアの移民の歴史で構築された繋がりには、現在の南洋漁場での操業の中で大きな底流になっている。

（仲地清）

110 前書、三二八～三二九頁

111 『沖縄県農林水産行政史 第八・九巻』三一九頁。松島泰勝は戦前から現在まで続いている琉球と南洋群島との関係は「人的及び経済的ネットワーク」「海洋ネットワーク」が支えていると、総合研究開発編『東アジアの海の信頼醸成』（NIRA研究報告書）の中の松島論文で記す。

第三節 台湾

一 台湾の歴史

(一) 原住民族の歴史

中国大陆と陸続きであった台湾が現在の形になったのは、今から約一万年前のことと考えられている。現在、先史時代の紀元前三〇〇〇年の遺跡が台湾全島から発見されているが、それら遺跡の発掘の結果で原住民族との結びつきが証明され、漢人系住民が中国大陆から移住してきた以前の様子がうかがえる。

原住民族が、いつ、どこからどのようにやってきて台湾に定住するようになったのか、文字を持たなかった彼らに関する記録が存在しないために、よくは分らない。しかし彼らは、東南アジアから渡来したマレー・ポリネシア系民族だと考えられている。山地に住み高山族と呼ばれる九族¹の他に、平地に住み平埔族と呼ばれる九族が知られるが、彼らは漢民族への同化が進んでいる。日本統治時代、高山族は「生蕃人^{せいばんじん}」、平埔族は「平埔蕃」と清朝から踏襲した呼称で侮蔑的に呼ばれたが、一九三五年（昭和一〇）、「平埔族」「高砂族^{たかさづ}」という呼称に改められた。一九八〇年代より原住民族の権利獲得を求める運動を推進し、政府の公式文書にも「原住民（族）」、「台湾原住民族」という呼称を承認させた。

原住民族にとっての台湾史は、外来勢力に土地を追われ、差別を受け、少数民族に転落していった歴史だったといえよう。しかし、今日の台湾の民主化は原住民族の社会的意識にも影響を及ぼし、民族の誇りを自覚した発言も目立ってきている。

台湾の地名

秦漢時代、台湾は「東鯤^{とうこん}」と呼ばれていた。三国時代の呉国では「夷洲^{いしゅう}」として知られていた。隋の記録では「流求^{りゅうきゅう}」になっている。

ところで「流求」の地名はのちに「留求」から「琉球」に変わり、元代に引き継がれた。現在の沖縄にあたる地（琉球）が明国と進貢貿易を開始すると、「琉球」という地名

1

民族学の上では、タイヤル、サイセツト、ツオウ、ブヌン、ルカイ、パイワン、アミ、ピユマ、ヤミ（タオ）に分けられる。

は沖縄のことを指すようになり、その結果、台湾を指す「琉球」と区別して、沖縄は「大琉球」、台湾は「小琉球」あるいは「東蕃」と呼ばれるようになった。現在、台湾南部の屏東県に残る琉球嶼（旧＝小琉球嶼）の地名は、その名残といわれている。

台湾を指す英語名「Formosa」（フォルモサ）は、ポルトガル人が台湾の美しさに魅せられて発した「Ilha Formosa」（美しい島）が転じてできた言葉だという。今日、中国語で「美麗島」「華麗島」と書かれるのは、この「フォルモサ」が語源になった。

日本は、戦国期に台湾を「高山国」と呼んだ。江戸時代になると、徳川幕府は「たかさぐん国」といい、また「タアカウ社」があつた現在の高雄あたりを往来していた日本人は、その発音が日本語の「タカサゴ」に似ていることから「高砂国」と記述した。ちなみに日本時代、この「高砂国」の由来から、昭和天皇が皇太子のときに原住民族の呼称を従来の「蕃人」から「高砂族」と改めたのである。

西欧勢力の侵出

ポルトガルは、真先にアジアに進出した。十五世紀の末には台湾海峡に姿を見せ、マカオを占領して東洋貿易の基地にした。さらに進んで台湾占領を図ったが、これは、利害関係にあるオランダとイギリスに妨害されて失敗する。

オランダはジャワ島のバタビヤ（現在のインドネシアの首都ジャカルタの、オランダ領時代の名称）に「オランダ東インド会社」の支社を設置し、まもなく中継貿易の基地建設を目指して澎湖島を占領する。

オランダの台湾占領は、フィリピンを植民地に使っていたスペインに衝撃を与えた。スペインは一六二六年、オランダに対抗して台湾北部の基隆、淡水一帯を占領する。これを脅威とみたオランダは一六四二年、基隆を攻略してスペインを追放し、以後、台湾の単独支配に成功する。

スペインは占領中、台湾北部の基隆の沖に浮かぶ社寮島（現＝和平島）に「サン・サルバドル砦」、北西部の淡水に「サント・ドミンゴ砦」を築き、大陸からの移民を奨励して

開墾にあたらせた。当初の狙いであった日本や中国との中継貿易とカトリックの布教は計画通りには進まなかったが、文化史のうえでは台湾史に大きな足跡を残した。

オランダは、現在の台南に「ゼーランディア砦」(安平古堡)、^{あんびんこほ}「プロビンシア砦」(赤崁楼)を築き、バタビヤの「オランダ東インド会社」から派遣された長官が指揮しての台湾統治を行なった。

鄭成功の大陸反攻

オランダは一六六一年、満州族の政権である清朝に追われ金門と厦門^{あもい}に逃れていた鄭成功の来襲によって、台湾から追放された。鄭氏の統治下で、西部の沿岸から南は恒春^{こうしゅん}、北は淡水一帯まで開発された。漢人系住民の増加によって、やがて台湾史の主体が原住民族ではなく、漢民族にとって代わられる時代がやってきた。

鄭成功^{ていせいこう}は、長崎・平戸の日本人女性を母として出生した。この日本とのゆかりの深さが強調され、神格化された鄭成功は日本の植民地支配を正当化する宣伝にも利用された。

清朝は三藩^{さんぱん}の乱^{らん}を平定して内部抗争を鎮静化すると、一六八三年、鄭氏政権を攻略した。台湾は、清朝の統治で初めて全中国を支配する王朝の下に服することになった。

台湾出兵と清朝

清朝は当初、台湾統治に対して消極的な態度を示し、台湾放棄論が朝内の意見の大半を占めていた。清朝が台湾統治に積極的になった決定打は、なんといっても一八七四年に起こった日本による台湾出兵(台湾では「牡丹社事件^{ぼたんしゃじけん}」という)という侵略行為であった。台湾出兵は、明治政府が琉球人の台湾遭害事件^{そうがい}を利用して、琉球の日本帰属を決定づけることと台湾領有を意図したものであった。

台湾遭害事件とは、一八七一年、琉球の宮古島の役人らが台風で遭難し、台湾南部の八瑤湾(現在の九棚あたり)に漂着して溺死者三人のほか六六人が上陸したとき、五四人が牡丹社の原住民族に殺害され、十二人だけがようやく難を逃れて琉球に帰り着いたという

2

一六三四〜一六六二年。幼名は福松^{ふくまつ}。のちに国姓爺^{こくせいや}と尊称された。

3

呉三桂らが清朝に抵抗して起こした最後の反乱。

事件である。

台湾出兵において、陸軍中将・西郷従道は、兵三〇〇〇人余りを率いて、台湾南部の原住民（パイワン族）居住地を攻撃した。今でも現地の屏東県車城郷の古戦場に、西郷が建立した「大日本琉球藩民五十四名墓」がある。この「琉球人墓」は、明治政府初の「海外派兵」「台湾・アジア侵略」の証といえるものになっている。

台湾出兵を契機に、清朝は台湾統治に積極的になった。一八七三年と一八七五年の二度派遣された沈葆楨^{しんほうてい}は、行政の刷新、軍政の改革、炭鉱の採掘、通信施設の敷設、砲台の設置、道路の開通など台湾の防衛策に力を尽くした。一八八五年に初代台湾巡撫に就任した劉銘伝^{りゅうめいでん}は、沈葆楨の改革を引き継いで軍政・民政に力を入れた。土地調査と山地開発事業を進めて行政区画を整備した。米・砂糖・樟脳・茶などの生産性を高め、台湾経済の近代化に活路を開いた。また、基隆・新竹間の鉄道敷設、築港、郵便制度の確立、理蕃^{りばん}事業（原住民の慰撫政策）にも取り組み、通貨制度の改善を計り、大陸や香港との貿易を推進した。

（二）日本時代の台湾

日本の台湾領有の野心は一八九五年（明治二八）⁴、日清戦争の勝利によって実現した。講和条約により清国は台湾・澎湖島を日本に「割譲」したが、このことを台湾の官民が事前に知ることにはなかった。

台湾の日本への割譲決定を拒絶する台湾の有力者や官僚たちは、清国からの分離独立を宣言、巡撫の唐景崧^{とうけいしゅう}を総統にした「台湾民主国」を成立させた。そして武力で日本への抵抗を試みたが、日本軍の圧倒的な武力の前に四カ月余りの短命で消え失せてしまった。

台湾を領有した日本が最初に手がけたのは、台湾住民の武力闘争を鎮圧し、植民地求配を容易に進めることであった。日本軍は全島の「平定」を宣言したものの、島内各地にはまだ抗日武装勢力が出没していた。台湾総督は、行政権のほか軍事力や立法権も有する絶対的な権力者だった。その全権の下に、裁判官・検察官を任命して意のままに動かし、各



琉球藩民墓碑
又吉盛清撮影

4

日本人の台湾への関心は一五九三年、豊臣秀吉が桃山時代の政商・原田孫七郎に「高山国」宛ての「親書」を持たせたことから始まった。その後一六〇八年、徳川家康が原住民のアイミ族の使者と引見し、引見の翌年に、キリシタン大名で有名な有馬晴信をつかわして台湾東海岸を探検させた。そして一六一五年、長崎奉行・村上等安が家康の命を受け、約四〇〇〇の兵を率いて台湾に侵攻した（結果は失敗に帰した）。

地の武装勢力を鎮圧して、領有後八年間で三万二〇〇〇人余りの台湾人を殺害した。

一八九八年（明治三一）、第四代台湾総督の児玉源太郎により総督府民政長官に抜擢された後藤新平は、抗日武装勢力を鎮圧して台湾統治の基礎を築いた人物である。後藤はまず土地・人口・旧慣調査を行ない、全島の実情を把握して税金などの基礎的なデータを作成した。また、土地の公有制度も確立して日本企業への払い下げを実施、彼らの台湾進出に役立てた。台湾人からみれば、土地調査事業は自分たちの土地を取り上げられることだった。さらに、新渡戸稲造を台湾総督府に招いて糖業の品種改良に努め、技術導入を計った。しかしこれは、台湾人の自営的な糖業を駆逐して、日本の糖業資本に吸収する道を開くものであった。そのほかにも、台湾統治に必要な社会資本の整備事業として、港湾の増改築、鉄道の敷設、道路の改修、公衆衛生事業などを実施した。

児玉・後藤コンビの台湾統治で特徴的だったのは、抗日武装勢力の鎮圧である。そのコンビ時代に「匪徒刑罰令」が公布され、反抗する者をすべて厳重に処罰し大量の台湾人を虐殺した。

日本の台湾統治は、弾圧と差別主義で貫かれていた。台湾人による会社設立は禁止された。官吏登用も同様で、台湾総督府のトップクラスのポストに台湾人が就くことはなかった。教育と職業の機会均等の権利もなく、そのために台湾人の不満はうっ積し、五一年間に及ぶ日本統治期間の半ばまで抗日事件が止むことはなかった。

その代表的な事件をあげると、日本人の台湾追放を図った一九一五年（大正四）の「西来庵事件」^{せいらいあん}、原住民族が「理蕃政策」^{りばんせいさく}に抗議して蜂起したのを日本軍が毒ガスなどを使用して鎮圧した一九三〇年（昭和五）の「霧社事件」^{むしゃ}などがある。

一九三〇年代になると、日本の中国大陆への侵略戦争が本格化しはじめた。華南から東南アジアへの侵略拠点として台湾の「南進基地化」が叫ばれ、それに伴い皇民化政策が強化された。新聞の漢文欄の廃止と日本語の使用が学校や家庭で強要された。伝統的な台湾人の慣習が禁止され、日本の神社仏閣の参拝や改姓名も強制された。

沖縄から台湾へ渡航した者の職業を見てみると、小学校教員が最も多い。外地である台



台北駅前の三線道路 『臺灣紹介 最新寫真集』 (1931年)



台湾総督府 『臺灣紹介 最新寫真集』 (1931年)

湾は、六割加俸で住宅も与えられる魅力的な職場だった。沖縄で皇民化教育を自ら経験した沖縄師範学校の卒業生たちは、台湾で皇民化政策の一端を担う立場となったのである。

太平洋戦争が始まると一九四一年（昭和十六）に志願兵制度、一九四四年（昭和十九）に徴兵制が実施された。台湾から「日本兵」として志願した二〇万人がフィリピンやニューギニアで戦死している⁵。

（三）戦後の台湾

一九四五年（昭和二〇）八月十五日、日本はポツダム宣言を受諾して敗戦国となった。引き揚げ時の在台日本人は、十六万六〇〇〇人の軍人を含めて約四八万八〇〇〇人であった。最後の台湾総督になった安藤利吉^{あんどうりききち}は一〇日二五日の受降式で、降伏文書に署名した。翌一九四六年二月十五日には日本人の台湾引き揚げ命令が発表され、引き揚げが始まった。五月三十一日には、勅令をもって台湾総督府が廃止された。

日本統治から解放された台湾には、中国内戦で追われた蒋介石率いる国民党軍が上陸した。安藤利吉が降伏文書に署名した一九四五年一〇月二五日から、台湾人の国籍は「中華民國」となり、本省人・内省人と称されるようになった。中国から渡ってきた「外省人」である蒋介石・蔣経国親子による独裁政権が始まる。中国語（北京語）が公用語として定められ、台湾語等の方言の使用は禁じられた。外省人に対する本省人の反発は、一九四七年、二・二八事件に発展。以後四〇年間に渡り戒厳令が敷かれた。この事件では、約二万八〇〇〇人も本省人が殺害・処刑され、彼らの財産や研究成果の多くが没収された。実際の犠牲者数はもっと多いとの説もある。

蒋介石は、本省人の反発や対立を強引に押さえつけ、中国語教育や中華文化の推奨を通して台湾の中国化を目指した。その後を継いで総統となった蔣経国は、インフラ整備（十大建設）を積極的に推進し、台湾経済は軽工業から重工業へと発展した。一九八〇年代に入ると民主改革ならびに解放政策を進め、一九八七年に戒厳令を解除し、大陸への親族訪問や旅行を認めた。翌年には報禁（新聞の新規発行・増ページの禁止）も解除した。民主



アメリカ軍が台湾上空からばらまいた伝単ビラ
一之瀬俊也提供

5 そのうち三万人の台湾人が靖国神社に
合祀されている。

化は大きく前進する。

一九八八年、蔣経国の死去によって、台湾史上で初めて本省人の李登輝が総統になった。台湾の民主化と台湾化の波が李登輝の下で膨れ上がっていく。民主進歩党が合法政党になり、大陸との内戦状態もなくなった。政治犯の指名手配も解除された。一九九五年、二・二八事件の記念碑が建立され、李登輝は台湾政府を代表して受難者たちへ謝罪した初めての総統となった。

そして、台湾の歴史の見直しも始められた。日本の五〇年間に及ぶ植民地支配の実態も、改めて明らかにされようとしている。これからは日本人との関わりも正當に位置づけられていくものと思われる。新しい台湾史・アジア史が書きかえられようとしているのである。(又吉盛清)

二 台湾への渡航と生活

(一) 戦前の台湾への渡航と定住

一万五〇〇〇人も沖繩出身者が台湾に居住

沖繩から台湾への渡航は、一九二〇年代から本格化した。一九四〇年(昭和十五)時点においては、約一万五〇〇〇人も沖繩出身者が台湾に居住していた。¹当時、沖繩を含めた日本を本籍とする人々は、台湾に三万二〇〇〇人ほどが住んでいた。最も多いのは鹿児島県民の約四万人であった。沖繩は鹿児島ほどの規模ではないが、台湾在住の日本人の中で一定の割合を占めていたといえる。

当時の人々は、船で台湾におもむいた。神戸港と台湾北部にある基隆港を結ぶ船は、一八九五年(明治二八)に台湾が日本の統治下に置かれた翌年、一八九六年から定期運航し、沖繩の八重山にも寄港するようになった。

沖繩の人々は、先に台湾に行つて働いている親戚や知人のつてを頼つて渡台することが多かった。しばらく働いてから沖繩に戻る出稼ぎだけでなく、台湾で定住する人々も現れた。

1

『外地国勢調査報告 第五輯…台湾
総督府国勢調査報告』文生書院
二〇〇〇。原書は台湾総督官房臨時国
勢調査部『国勢調査報』。

一九三〇年（昭和五）時点において、台湾に住んでいる沖縄本籍者七四四二人のうち、台湾生まれは一六三一人であった。年齢的には、〇歳から三九歳までで、沖縄本籍者のほぼ九割を占めていた。働いたり高等教育を受けたりするために渡台し、定住して家庭を築き、台湾生まれの子どもたちが学校へ通い始めている、そのような人々の姿がうかがえる。

台湾で暮らす沖縄出身者においては、男女比はさほど変わらなかった（女性…男性Ⅱ一〇〇…一一二）。日本全体では、もう少し男性に偏った比率となっていた（一〇〇…一二一）。本土の女性たちの多くが夫について台湾に渡ったのは異なり、沖縄の女性たちは、しばしば単身で出稼ぎや就職、あるいは就学のために渡台していた。

台湾渡航の特徴―都市居住と就労の多様性

台湾渡航は、海外移民とは違う性質をもっていた。台湾は日本の「国外」ではあっても、日本帝国の勢力圏であった。沖縄の人々は、戦争中の台湾疎開を除けば個人の自由意思で台湾に渡ることが多かったのだが、日本政府による植民地への官吏、教員、警官の重点的な配置の一環として、台湾に赴任した人々もいた。

台湾社会では、日本人が頂点を占める階層構造が形成されていた。

日本人と台湾人との間には、同職種であっても賃金格差があった。一九四〇年（昭和十五）の台北市における石工の収入は、日本人が四円五〇銭、台湾人が三円五〇銭であった²。

沖縄出身者は、植民地の階層構造において頂点を構成する「内地人」―「日本人」の「カテゴリー」からしばしば疎外されていた。沖縄は、台湾植民地化のわずか十六年前に「琉球処分」によって沖縄県となっており、当時の「内地人」、いわゆる「ヤマトウ」から「琉球人」として蔑視されることがあった。沖縄からの渡航者のうち、とくに官吏や教員は、しばしば本籍を沖縄から他の都道府県に変更する転籍を行った。特徴的な沖縄の姓を内地ふうに変更して、蔑視を避けた人もいた。

台湾に渡った人々は、台北、基隆などの都市部に居住することが多く、農業や漁業に従



台湾での記念撮影（1931年頃）
稲福房子提供

2

小林英夫監修『日本人の海外活動
に関する歴史的調査 第八巻―二
台湾篇三―二』 ゆまに書房
二〇〇二・三三二頁。

事するよりも官公吏、教員、会社員、工場労働者、商店の従業員などになることが多かった。渡航者の第一世代から都市に居住し、就労先が多様であったことは、ハワイ移民などの海外移民にはない台湾渡航者の特徴といえる。また、日本帝国の勢力圏への移動の中でも、農業と水産業従事者が多かった南洋群島や、農業従事者の多かったフィリピンと比べると、都市居住の公務員、教員、商人などが多い台湾渡航者の暮らしぶりは、際立ってユニークなものとなっている。

大都市への憧れもまた、人々を台湾へと引き寄せた。都市に住み、中流階級に属した人々の中には、自動車で通勤したり、水道や冷蔵庫のある家に住んだり、テニスや映画鑑賞を楽しんだり、当時の日本本土の多くの農漁村や地方都市よりも生活水準や文化水準の高い日常生活を送る人もいた。

進学や資格取得を志す若者、子どもに教育を受けさせたいと願う親にとっても、台湾は魅力的な渡航地であった。当時、沖縄には大学がなく、高等教育機関が十分に整備されていなかったのに対して、台湾には帝国大学、帝国大学予科、師範学校、師範学校予科、臨時教員養成所、七年制の高等学校や高等女学校からなる高等教育機関が揃っていた。ただし、教育においても植民地的な格差があった。一九四一年（昭和十六）において学校に通っていない子どもの比率は、日本人〇・四五％に対して台湾人は四二・四三％にのぼった。一九四〇年（昭和十五）の師範学校の生徒は、日本人二三八三人に対して台湾人は二九六人とどまり、一方で農業学校では日本人八四二人を台湾人二五三九人が大きく上回っていた³。

沖縄から来た人々は、台湾で、集まって住むことがしばしばあった。台湾北部の港町である基隆には「日本人街」ができており、とくに義重町^{ぎじゅうちやう}には食品店、物産店、レコード店、薬局などの商店街が広がっていた（図1）。ここには、沖縄からやってきた人々が経営する店も並んでいた。現在、街路は義二路と名前を変え、店舗もすべて様変わりしたが、道幅や区画はほぼ当時のままであり、古い建物のたたずまいは日本統治時代の面影を感じさせる（図2）。義重町／義二路をのせた二枚の地図が現在の基隆市の商工会議所に

3

前掲書 三三、三七、三九頁。



台北帝国大学『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）



台湾の国民学校教員時代（右から2番目の女性が仲間在住の女性）比嘉好子提供

よって制作され、観光に活用されていることも興味深い。

一方で台北では、台北駅北側の建成町^{けんせいちょう}に六百人の沖縄出身者が集まって住んでいた⁴。彼らの多くは、台湾総督府の交通局で鉄道や郵便の仕事に就いていた。こちらは日本人街に沖縄出身者が溶け込んで住むとは異なり、沖縄出身者だけが固まっている。商業と流通のさかんな港町であった基隆と、行政の中心であった台北との違いがうかがえる。

ウラシーンチュの台湾体験―台湾鉄道で台湾人と共に働く

浦添市史編纂のために今回、聞き取りをした中に、三名の台湾鉄道関係者がいた。一人は自身が台湾鉄道で働いた経験のある人であり、もう二人は台湾鉄道で働いた父親をもつ、台湾生まれの兄弟であった。台湾鉄道の運輸課庶務係人事課で働いていた松下善丸⁵（一九二二年生）は、次のように語った。

最初は台湾鉄道で働いていた義兄を頼って行って、給仕の仕事をしていました。そこで、大学とか昔の中学（注：現在の高等学校にあたる）を卒業してきた人たちと一緒に働いていたら、自分の学力のなさが情けなくて、これじゃいかんということで台湾鉄道夜間中学校に入りました。台湾鉄道の本部に非常に剣道の上手な人がいて、心身の鍛錬もしてくれました。人間としてまじめに生きること、どんなに苦しくても他人に迷惑をかけることは絶対にいけないということなど、その先生から教えられたことに今でも感謝しています。

私が所属していた運輸課の庶務係だけで、働いていた人は約六〇人くらいだったかな。毎年、五〇人くらい採用していました。台湾の現地の人と、日本、本土から台湾に職を求める人がいましたね。台湾鉄道本部内では、ほとんどが日本人です。台湾の人は車掌くらいにはなれたが、駅長などにはいない。

それでも台湾の方たちには、鉄道員だということは大変な誇りだったようです。今も覚えていられる人がいますよ。私が十八歳くらいの時に十四歳で入ってきた人で、遠くの家から

4

荒良城一編『昭和十七年版 台北市民住所録 内地人ノ部』住所月報社、一九四二、水田憲志「台北市における沖縄県出身者の分布と職業」国永美智子・野入直美・松田ヒロ子・松田良孝・水田憲志編著『石垣島で台湾を歩く―もうひとつの沖縄ガイド』沖縄タイムス社、二〇一二、九四―九五頁。

5

証言の記録は以下に収録されている。浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史 証言・資料編』浦添市教育委員会、二〇一四、一七三―一七七頁。



台湾総督府交通局鉄道部 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

図2 同地の現在のようす（基隆市中正路、義一路、義二路）

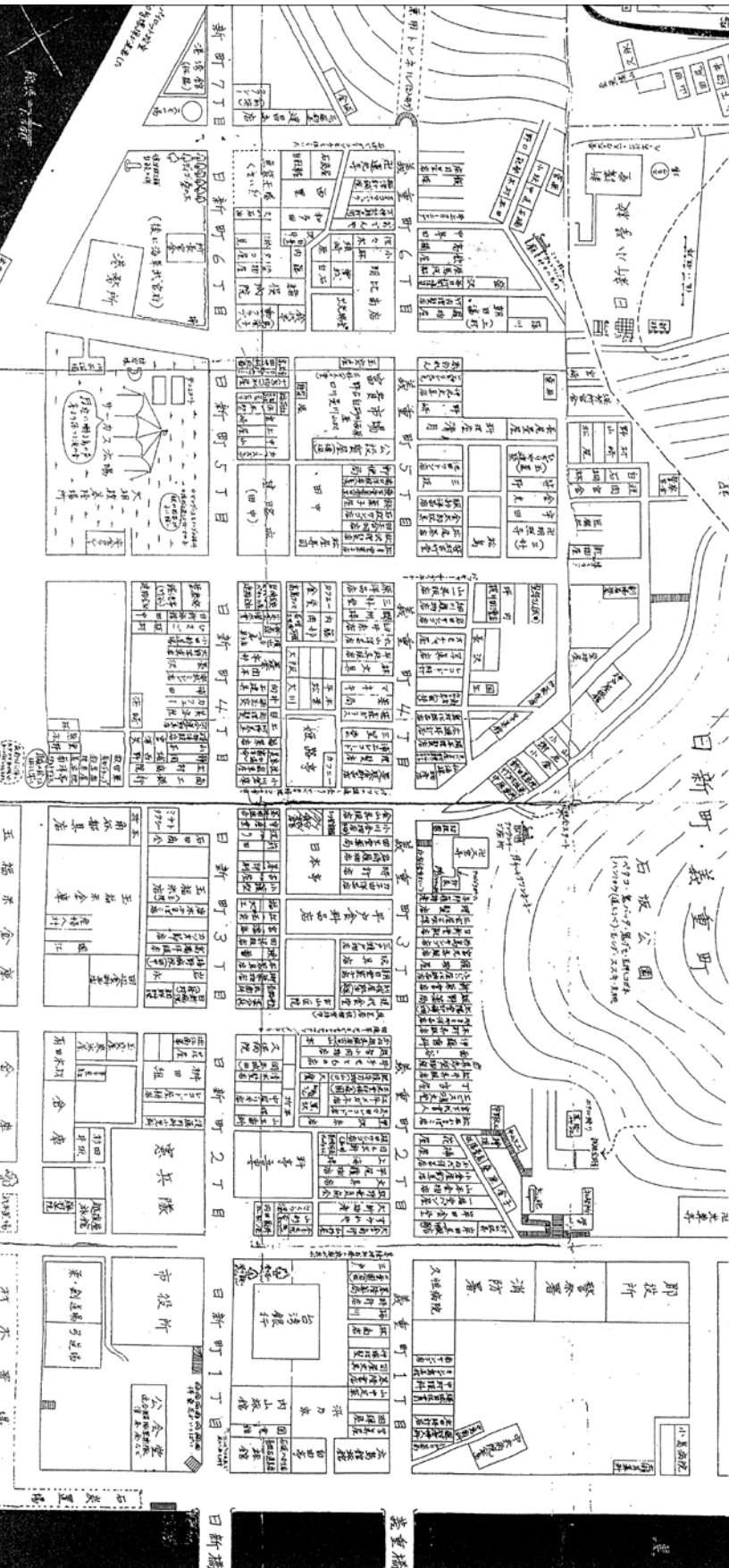


図1 日本統治時代の日新町・義重町（図1、2ともに基隆市の商工会議所作成 李國平提供）

朝の五時に出てくる。非常にまじめでした。私は、差別的な扱いは一切しなかったですね。他の日本人は食事も台湾人とは別にしていました。私は何でも一緒にするし、兄弟みたいに話し合ってきたから、私が台湾鉄道を（徴兵のために）辞めるとき、泣いて、必ず兵隊が終わったら台湾にまた来てくださって泣き別れたことがある。優秀でしたよ。ただね、国の制度でやむを得ない面もあったかもしれないが、給与面で差別的なのは、同等にすべきじゃないかなあと思っていましたよ。給料もらうときにかわいそうですね。

父親が台湾鉄道で働いていたという金城隆⁶（一九三一年生）は、その思い出を次のように語った。

父は台湾鉄道の工手長として、台湾人の部下一〇名を指揮して、線路の補修をしていました。台湾に先に行っていた知り合いを頼って台湾に行き、最初は植木屋の手伝いをして、台湾鉄道に勤めていた知り合いを頼って転職したようです。

父親の仕事は、とても待遇が良かったと思います。月報百円に、加俸（注…外地手当）百分がついて、合計二百円ももらっていました。徴兵も、訓練に行っただけで、仕事が大事だからとすぐ返されて、戦争中は家族とずっと一緒にいてくれて、非常にありがたかったです。

駅に隣接した駅舎に住んでいました。父の同僚にはたくさん沖縄の人がいて、父は近くの駅で働いている沖縄出身の人たちと集まって飲み会をしていました。父に連れられて、そういう同僚の人の家に遊びに行ったことを覚えています。

台湾鉄道で働く職員の子どもたちは、みんな友達でした。私たちは鉄道関係者だから無料で乗車できたので、年上の友達に誘われて、汽車でうんと遠くまで行って親にわからないいうちに帰ってくるという遊びもしましたよ。

台湾人の部下の人たちは、お正月やお盆に家によんでくれました。そのうちの一人は、



基隆駅 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

6 証言の記録は以下に収録されている。
前掲書、一八〇―一八五頁。

戦後、沖縄まで訪ねて来て、父親の仏壇に手を合わせてくれたことがあります。父と一緒に働いていた当時は、その人は日本語をすらすら話していましたが、戦後に会ったときは、聞き取れるけれど言葉が口から出ないと言っていましたね。

台湾の人に対して威張ったりいじめたりした人は、日本が戦争に負けた後に仕返しされていたようですが、自分はそういうのには加わらなかったです。近所はほとんど台湾人で、区別なくつきあっていました。戦後、本土の人は引き揚げていきましたが、沖縄は引き揚げが遅くなり、また父は仕事を部下に引き継ぐまではということで留用され、同じ仕事を続けました。部下の台湾人は、実家が農業をしていると言って食べ物をもってきてくれました。自分は、まだ無料で乗れた鉄道でその部下の実家まで行って、野菜を買って台湾の南部に売りに行き、生活の足しにしましたが、台湾人の部下のおかげで食べ物に不自由はありませんでした。

むしろ、沖縄に来たときはびっくりしました。飲み水さえ収容所の近くになくて、汲みに行つて缶に入れて担いで帰るという、台湾では一度もやったことのないことをやりました。でも戦争に負けたから仕方ないという気持ちで、不自由とは思いませんでした。

台湾鉄道で働いていた本土出身の人たちには、戦後、技術を活かして国鉄に就職する人が、父の同僚にもいたようですが、沖縄に引き揚げてきた父にはそういう選択肢はなかったですね。父は、人に使われるのは嫌だと言って、軍作業にも行きませんでした。

松下と金城の父親の体験には、いくつかの共通点が見いだせる。先に台湾に渡っていた親戚や知人を頼って台湾渡航と台湾鉄道への就労がなされたこと。台湾鉄道において、台湾人の部下と共に働くという体験をしていること。そこで台湾人の部下と深い信頼関係や親密なつきあいを育んだが、それは当時の台湾では決して一般的ではなかったということである。一方で、二人の職種の違いは徴兵体験の相違をもたらしたように思われる。運輸課で庶務の仕事をしていた松下は、徴兵のために離職を余儀なくされたが、工務課で線路補修の管理職をしていた金城の父親は、短期間の訓練を受けただけで、職場に戻されている。



台北駅 『臺灣紹介 最新寫真集』 (1931年)

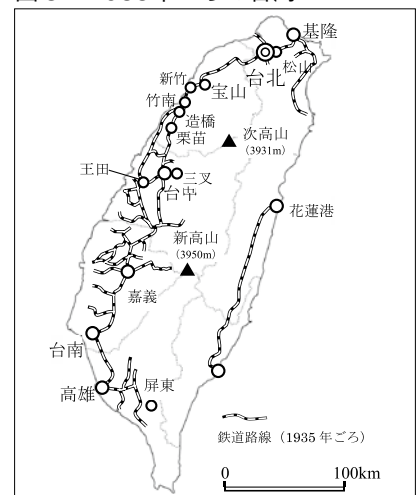
台湾の鉄道は、清国統治時代の一九一一年（明治二四）に台北・基隆間が、その二年後に台北・新竹間が開通した。日本政府は一九一五年（明治二八）に台湾を領有すると同時に台湾鉄道を接収し、台湾の南北を縦貫する路線を拡大した（図3）。建設用地は、日本本土に比べて格安で買いとられ、線路工夫の日当も日本人の相場一円二〇銭に対して台湾人はその半額で使役させられた。⁷ 日本本土における鉄道が貨物よりも旅客で多くの収益を上げていたのとは逆に、台湾鉄道では貨物運輸、とくに砂糖・米・石炭を産地から港に運輸することに重点が置かれていた。⁸ 台湾鉄道は、台湾各地で産出される資源を日本に輸移出すために港に集積するという、植民地経営の大動脈としての機能を果たしており、それは「物資収奪線」と呼びうるものであった。⁹

松下の記憶にあるように、台湾鉄道では台湾人の採用と昇進はきわめて限定されていた。最上級職である高等官・判任官は、一九三八年（昭和十三）において日本人五五三名、台湾人三名である。¹⁰ 一般職員にあたる「嘱託員および雇員」は、日本人三七四五人に対して台湾人は九〇一人であった。賃金差別については、実は松下の所属していた庶務課はまだ緩やかな方であり（日本人一〇〇…台湾人八三）、金城の父親が所属していた工務課では開きが隔絶していた（一〇〇…三八）。¹¹

台湾鉄道が、植民地収奪と差別的な処遇を政策的に行う組織であったことは疑いを容れない。そして、台湾鉄道で働いた沖縄の人々も、たとえ個人としては差別的な給与格差に反対であったとしても、ひとりの日本人として、このことと無縁であったわけではない。しかしそれは、松下や金城の父親が、人間どうしの親密なつきあいを台湾人の部下たちと育んだことを否定するものではない。松下が台湾人の部下と涙の別れをしたこと、金城の父親を懐かしんで、戦後の台湾からかつての部下が仏壇に手を合わせに来てくれたこともまた、確かな事実である。

台湾人と共に働いた経験を語ってくれる人が現存することに、現代に生きる私たちは深く感謝せねばならないだろう。それは、「時代は悪かったが個人としては良くふるまえた人もいた」というような単純な図式に収まらない、今日の歴史認識に関わる問いをはらん

図3 1935年ごろの台湾



宮内久光作成

7 高橋泰隆『日本植民地鉄道史論』日本経済評論社 一九九五、二五頁。

8 前掲書、三九頁。

9 前掲書、四〇頁。

10 前掲書、四一頁。

11 前掲書、四六頁。

でいる。そのように「良く」ふるまう沖縄出身者が、同時に、日本帝国の台湾統治を担う日本人であったことについて、考え続ける必要があるように思われる。

(二) 女性と子どもの台湾経験

女性にとつての台湾経験―台湾で「自立心」を得る

台湾で資格を取得したり、専門職として働いたりした人々の中には、産婆や看護婦¹²などの医療専門職についた女性たちも含まれている。ハワイ移民における「写真花嫁」や南洋群島における「南洋花嫁」が、イエの継承を目的とした女性の婚姻移動であったのに対して、台湾には女性の単身渡航があった。いわゆる「女中」の仕事をしして仕送りに追われる出稼ぎ女性もいたが、資格を取得し、日本で働くよりも高給をとり、都市文化を享受した女性もいた。

台湾で生まれ育った女の子もいる。そのひとりである稲福房子¹³（一九三二年生）は、自分が「女の子としてのしつけを受けず、家事をしないで育ってきた」と振り返る。

毎朝、小遣いさんが家の裏口に、今日は買い物はございませんかって母に聞きにくるから、母は自分で買い物にも出ないんです。自分の子どもにも炊事とか洗濯とか、何もさせなかったんです。両親がそういう考えだったか、台湾のやり方だったのかはわかりませんが、女の子だからこうしなさいとか女性はこうすべきだという意識がなかったです。

稲福さんの父親は、台湾人の子どもたちが通う公学校の校長を務めていた。当時の台湾では、日本人教師は台湾人に対して権威を落とさないようにふるまわねばならないという規範があり、そこには台湾人の上流家庭と同様に、家事は使用人にさせるといふ習慣が含まれることがあった。¹⁴ 稲福さんの両親は、あるいはそのような慣習に倣っていたのかもしれないが、台湾生まれの娘は、女性はこうあるべきという堅苦しい規範のない自由な世界として、台湾生活を経験した。

12 これらの職業の呼称は当時のものを用いている。

13 証言の記録は以下に収録されている。浦添市教育委員会、前掲書、一八八―一九二頁。

14 安村賢祐『日本統治下の台湾と沖縄出身教員』大里印刷、二〇一六、一三八頁

うちは男きようだいがいなかったけれど、親は娘たちを可愛がつてくれるし、なにも不足があると思わなかったんです。沖縄に引き揚げて初めて、親戚が、跡取りがない家はどうかと言うのを聞いて、もしかして母は肩身が狭いのかと思ったくらいで。

私は沖縄に引き揚げてきた後も、ずっと自立していたという気持ちが強かったです。女性は男性についていくとかではなくて。今でも夫に、どこどこへ連れて行ってとは頼まないで、どこどこへ行こうって言いますね。自分の人生を、自分の考えで生きていきたいっていうのは、ひよつとしたら台湾で培われたかなあという気はしますね。

私が台湾帰りと知ったある人が『台湾での生活は良かったそうですね、^{わんせい}湾生^{わんせい}』（台湾生まれ）の女性とは結婚しない方がいいよ、何も（家事などが）出来ないからと言われていたそうですよ』と笑いながら言われ、ああそうだろうなと私も思いましたよ。

台湾引揚者の男性の多くが、「台湾で得たことは何ですか？」という質問に対して、引揚げ前後の困窮に耐えた「強さ」を挙げたのに対して、稲福房子の「自立心」という答えはとてもユニークである。台湾経験は、その人が台湾について直接に語ったりしなくても、ひそかにひとりの女性の内面を支え続けてきたように思われる。

台湾生まれの子どもたち

日本統治下の台湾では、教育も日本語によって行われた。海外移民の場合、現地生まれの二世は現地の言語で社会化され、その社会の文化や価値観を習得していく。それに対して、台湾で生まれ育った子どもたちは、フィリピンなどにおける「植民二世」と同様に、日本語、とくに標準語で社会化され、現地の人々が用いる台湾語からも、両親が故郷で話していたウチナーグチからも切り離されて育った。彼らにとって、台湾は「日本」であり、その台湾で生まれ育った彼ら自身は「日本人」であった。

そうして台湾で習い覚えた「日本語」の中に、引揚げ後の郷里では全く使われないものがあることに気づいた人もいる。喜屋武マサ（一九三一年生）¹⁵は、「免賃^{めんちん}」という言葉が



台北の栄町通り 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

15

証言の記録は以下に収録されている。
浦添市教育委員会、前掲書、一八五—
一八八頁。

まったく沖縄で通じないことに驚いたという。

ずっと普通で免賃、免賃って（台湾では）使っていて、それはお金を払わなくても乗り物に乗れたりとか、そういうときに使うんですね。沖縄で通じなくて、あれ、もしかして日本語じゃない？って。

喜屋武マサが日本語ではなかったのかと疑問に思った「免賃」とは、日本人の特権を含意する植民地の言葉であったと考えられる。表向きは日本人だから無料ということにはなっていないまでも、官公庁や日本人経営の企業から「免賃」を享受できるのは、ほとんどが日本人であった。引揚げ後、米軍統治下の沖縄で、沖縄の人どうしの会話で「免賃」が通じるはずもないのであるが、あるいは、米兵たちだけが享受できる特権について、これに類する英語が当時の沖縄で使われていたかもしれない。

日本統治下の台湾で生まれ育った子どもたちは、隔離された「日本社会」だけに留まっていたはいなかった。ある日本人街で生まれ育ったひとりの少年は、日本人街を通り抜けて「橋を渡ると、もうそれだけでぶーんといいい匂いがしてくる」、その誘惑には逆らえず、ひとりで日本人街の外へさ迷い出ているいろんなものを買って食いつくし、食べものの名前や数の数え方から始まって、台湾語を覚えていったという。

学校の同級生として出会った台湾人と、親しい関係を結んだ人も少なくない。日本人の子どもたちが通う学校に入学できる台湾人の子どもは必ずば抜けて優秀であり、日本的な礼儀作法を完璧に習得しているのだが、同時に、台湾人ならではの良さがにじみでるように感じられることがあったという。喜屋武マサにとってそれは、高齢者を心から敬う気持ちであった。

台湾の人はね、本当にお年寄りを尊敬しているし、大切にしているの。それはすばらしいと思った。いいことだなあって。



基隆の屋台のようす（2011年）野入直美撮影

大人が植民地的な序列を作り、日本的な価値観で台湾の統治を試みるとき、子どももそれから無縁ではいられない。彼らの両親は家庭で日本語を話したため、子どもたちはウチナグチを知らないままに育ち、引揚げ後の沖縄では苦労することになった。彼らが通学した国民学校には、ごく普通の台湾人の子どもは通ってこなかった。それでも子どもたちは、しばしば大人の目を盗み、規範の隙間をかくぐって、台湾の文化に出会った。それもまた、日本統治下の台湾における、複雑で豊かな現実のひとつであった。(野入直美)

三 戦争と引揚げ

徴用

基隆は、台湾の北の玄関口である。日本が台湾を植民地統治していたころ、この港町には沖縄からの船が発着し、沖縄出身の漁業者や移住者が多数暮らしていた。基隆港の深い懷に栓をするようにして北側に浮かぶ小島、和平島は、植民地統治下の台湾では「社寮島」と呼ばれ、沖縄出身の漁業者がとりわけ多く暮らしていた。一九一五年(大正四)には二〇〇人余の沖縄出身者が暮らし、一九三〇年(昭和五)には、七四戸からなる沖縄出身者の集落があったという。²当時の資料のなかには、基隆の名所旧跡のひとつに「社寮島」を挙げ、「琉球漁夫と本島人とを混成したる部落にして基隆市内と異なる一天地をなす³」と説明しているものもある。一九三一年にここで生まれた喜屋武マサは、「全部そこら辺みんな沖縄の人が多いの⁴」と振り返った。

マサはバスで小学校に通っていたが、一九四一年(昭和十六)十二月に日本が米英に宣戦布告すると、通学方法が変化する。「戦時中は『贅沢は敵だ』とか言ってるね、学校に行くときもバスに乗ってはだめで、ずっと歩いて行きました。四里ぐらいあったように思いますが、とにかく厳しかったです⁵」ということになったのだ。

漁業に従事していた父親は徴用された。マサの言葉を借りると、「(父は)船ごと徴用されるのよ、そして爆弾運びなのよ、シンガポールなんかに行ってるよ⁶」ということになる。父親は終戦を待たずに徴用から戻り、マサ一家はその後、空襲や疎開を体験すること

1 朱徳蘭「基隆社寮島の沖縄人集落」『東アジアの文化と琉球・沖縄―琉球／沖縄・日本・中国・越南』彩流社二〇一〇 五八頁

2 前掲「基隆社寮島の沖縄人集落」六八頁

3 加藤守道『基隆市』基隆市役所一九二九 二七頁

4 二〇一二年七月一〇日に浦添市内で実施されたインタビューによる。

5 浦添市移民史編集委員会『浦添市移民史 証言・資料編』浦添市教育委員会二〇一四 一八六頁

6 インタビューによる。

にもなるのだがこの点は後述することにしよう。

台湾が初めて大規模な攻撃を受けるのは一九四四年（昭和十九）一〇月の台湾沖空中戦（台湾沖航空戦）であるが、門司と基隆を結んでいた大阪商船の貨客船「高千穂丸」（八一五四総トン）が基隆近くで撃沈される事件が一九四三年三月に起きるなど、人々の暮らしは戦争と無関係ではいられなくなっていた。もともと、マサ自身は「私なんかよりか、ずっと沖繩におった人たちがもっと悲惨な思いしてるしね。台湾なんかもう、のんびりしてるほうだから話なんかできないさ。ここ（筆者註・沖繩本島）ではもう、砲弾の中を逃げ回ってるでしょ？」と述べている。台湾で自身が体験した戦争は沖繩本島のそれに比べると控えめなものだったと認識しているわけだ。

疎開

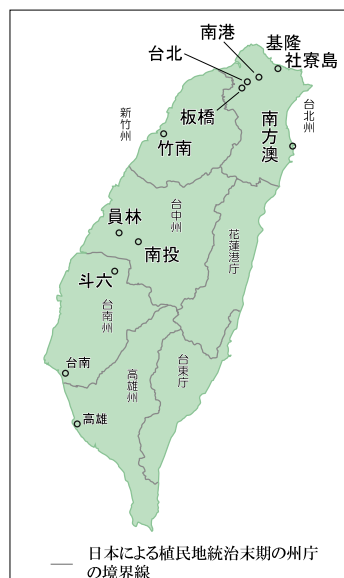
垣花隆（一九三三年生）⁸は母と祖母、妹二人と弟一人の家族六人で宮古島下地村の与那覇から台湾へ疎開した。一九四四年の八月か九月のことだという。漲水港を出たポンポン船には同じ与那覇の人たちだけでなく、宮古のほかの地域から来たらしい人たちも乗っていたという。母と祖母は、麦を石臼で挽いた粉や粟を食糧として担いでおり、隆自身は学校で使う教科書や文具などを抱えていた。祖母の荷物には自宅の仏壇から取り出したご先祖様の位牌が入っていた。

ポンポン船は与那国島などを経て基隆に到着し、隆らは今度は汽車に乗り込み、台湾島を南下した。目的地は台中州員林街（現在の彰化県員林鎮）である。

隆らは与那覇から一緒にやってきたほかの疎開者たちとともに学校の校舎に身を寄せ、疎開生活を送ることになった。隆は「衝突^{ついた}みたいなのはありませんからね。何十名の人が雑魚寝ですよ、教室に」と振り返る。

毎日の食事は、廊下にあったコンロに薪で火を起し、家族ごとに調理することになったが、順調だったのは二、三カ月ほどのこと。隆は「故郷から持ってきた麦、粟、味噌、それから塩、これはもう、全部使い果たしたんですね。そしたら何を食えるかなんです

図1 台湾略図



松田良孝作成

7 岡田俊雄『大阪商船株式会社八〇年史』大阪商船三井船舶株式会社 一九六六 二七七頁、七二四頁、七五六頁を参照した。

8 垣花隆氏に関する記述はすべて筆者インタビューによる。二〇一五年一月三〇日、浦添市内間の垣花氏宅で実施。

よ。官庁のほうから、たとえば台湾なら総督府とかありますでしょ？そういったところからの援助はないわけですよ、一つも」と説明する。

隆は、そして母親たちも、生き延びるためにあの手この手の自衛策に出る。

アジア太平洋戦争中に沖縄から台湾向けに行われた人々の退避行動を「台湾疎開」と呼んでおこう。⁹「台湾疎開」の様相は人によって、また、疎開先となった地域によって大きく異なる。

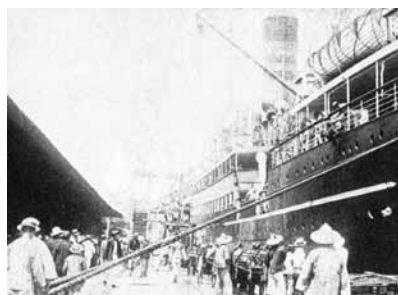
¹⁰ 平良町下里から台南州斗六街（現在の雲林県斗六市）に疎開した奥平勝三（一九三三年生）は、母と兄、弟の家族四人で三階建てのアパートのような施設で疎開生活を送った。勝三氏は台湾疎開の印象について、学校には列車で通ったことなどを挙げて、「宮古の平良の街だって、そういった三階建てなんてなかったさな。すごく、うれしくて、自慢するくらいだったんだ。ガソリンカーに乗って学校に通うのも楽しかったねえ」と述懐した。

食べ物を確保するのに必死だった隆とはまったく異なる印象である。台湾疎開に対する受け止めにこれほどの幅があるのは、疎開者の受入態勢にばらつきがあり、戦況にも地域差があったことが関係しているものと考えられる。

沖縄からの疎開者は約一万人

日本政府はアジア太平洋戦争末期の一九四四年七月七日に行った緊急閣議で台湾疎開の実施を決める。南西諸島の奄美大島、徳之島、沖縄本島、宮古、石垣の五島から老幼婦女子を疎開させる¹¹というのである。宮古と石垣からは合わせて二万人規模の疎開が計画された。緊急閣議に基づくこの疎開は「集団疎開」とか「無縁故疎開」と呼ばれ、その疎開先は、台湾島の西海岸寄りを中心に散在し、合計四〇カ所近くが確認されている。垣花隆も奥平勝三も家族とともに集団疎開で台湾へ渡った。

これとは別に、それ以前から台湾に移住して暮らしていた親戚や知人を頼るなどして私的に台湾に渡る疎開も行われている。これは「個人疎開」とか「縁故疎開」と呼ばれる。



基隆駅 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

9 台湾疎開については松田良孝『台湾疎開〈琉球難民〉の一年十一月』南山舎 二〇一〇を参照した。

10 奥平勝三氏に関する記述はすべて筆者インタビューによる。二〇一五年二月六日、浦添市内間の奥平氏宅で実施。

11 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 一九六八 六三頁

一九四四年九月に、玉城勲（一九四〇年生）が、父が巡查をしていた新竹州竹南街（現在の苗栗県竹南鎮）へ母と兄、弟の四人で引越したの¹²は個人疎開と考えられる。

「個人」か「集団」かを問わず、沖縄から台湾に疎開した人の人数は一人程度とみられる¹³。

集団疎開の場合、当時の資料から推定すると、生活援護費と呼ばれる現金を一日当たり一人最高一円五〇銭支払う仕組みがあったことが分かる¹⁴。ただ、現金に代わって相応の食糧が支給されていたケースや、支給が滞ったケースも確認されている。一例を挙げると、台南州嘉義郡の行政当局者が終戦後の一九四五年八月二八日付で島外疎開者共助会台南州支部に送った請求書¹⁵は、疎開者一三九人分の生活援護費三カ月分合わせて六〇九五円を支払うよう求めたものである。

隆一家のケースに話を戻そう。

隆は長男である。疎開当時、十一歳。母や祖母を助ける働き手として食糧の調達に知恵を絞った。キャベツを収穫したあとの畑に入り、残った葉をちぎってきたり、カタツムリを集めたり。隆は筆者にそう説明したあと、「最初はね、これを泥棒しておったんですよ。見付かってね、夜警が出るわけです。で、取れない」と明かした。

近くの駅に積んであった米や乾燥バナナを狙ったこともある。隆は一緒に行動していた同じ年ごろの子どもたちのことを「ガキども」と表現しながら、こう言った。

ガキどもはね、ナイフと袋を持ってってね、テントを持ち上げて、もぐりこんで
いって、ナイフで袋を破ってね、米を盗むんですよ。

駅のほうでも無策というわけではない。

12 二〇〇九年八月八日に浦添市内で実施されたインタビューによる

13 前掲『台湾疎開』四九―五三頁

14 前掲『台湾疎開』九五―九七頁

15 「請求書」陳桂田氏所蔵。陳桂田氏は民間のコレクターで「桂田文史工作室」という資料室を主宰する。台中市梧棲区在住。

駅のほうは『これ、疎開のガキどもの業だ』¹⁶ということで、もう、見張りが付くわけですよ。でもねえ、見張りがおつても食べないとどうしようもない。一人（筆者註・隆ら子どもたちのうちの一人）は見張りに立つわけ。そしたらね、この、見張りがね、『おい、来たよ』って言うから、その時はすぐもう、取った袋を抱っこしてね、わーっと逃げるわけですよ。

あちらが見張りなら、こちらもというわけである。しかし、そんな方法がいつまでも続くわけではない。

僕の友人は捕まつてね、そうとう駅のほうで咎められていましたけど。親も呼ばれたりして。

隆自身は捕まえられることはなかったが、盗んだ米を母に持っていつて叱られた。ただ、その母は隆の米を湯呑いっぱいぐらいつつ他の疎開者と分け合っていたという。

台湾へ疎開してきた沖縄の人たちを襲ったのは食糧難だけではない。マラリアや栄養状態の悪化で死亡したケースも少なくない。筆者は、沖縄からやってきた疎開者の記録を台湾中部の南投市で閲覧した¹⁶ことがあるが、「台中州南投街包尾七三八番地」という場所に疎開した三七戸合わせて一五二人のうち、死者は十三人で死亡率は八・五五%に達していた。¹⁷

隆らの疎開先には、宮古出身という軍医が顔を見せることがあり、マラリアの薬を置いていくこともあったが、そのマラリアで祖母のマツカマが疎開先の学校校舎で命を落としている。校舎のそばには簡易な火葬施設が作られており、祖母はそこで荼毘に付された。

沖縄出身者が台湾で経験した疎開と言うとき、それは沖縄から台湾へ退避することだけを意味しているわけではない。戦況が悪化する前から台湾にいた沖縄出身者が、攻撃を受

16

疎開の実態を明らかにするという調査目的に理解を示した南投市戸政事務所の計らいによって戸籍登記簿を閲覧することができた。閲覧したのは「M〇〇一〇〇五三」という記号が振られた戸籍登記簿である。二〇〇六年十一月三〇日調査。

17

前掲『台湾疎開』一〇四—一〇六頁

18

前掲『浦添市移民史 証言・資料編』、一八七頁

けやすい都市部や工場周辺から山村へ移動する疎開もあった。

社寮島生まれの喜屋武マサの場合、母や弟たちが南港^{なんこう}（台北州七星郡内湖庄^{ないこ}の一部、現在の台北市南港区）に疎開しており、マサは父親とともに社寮島から食糧を届けにいったことがある。母や弟たちはその後さらに台中方面に疎開することになり、このときはマサも一緒に疎開した¹⁸。

引揚げ

終戦によって、日本が台湾に対して行っていた植民地統治は終わる。台湾では一九四五年一〇月二五日に台北市公会堂（現在の中山堂）で台湾投降受諾式典があり、同じ日に中華民國の台湾省行政長官公署が発足して台湾の行政を担当することになった。台湾にいた沖縄出身者は、台湾の各地にあった沖縄県人会の連合組織「台湾沖縄同郷会連合会」（与儀喜宣会長）や沖縄出身の将兵らでつくる「球籍官兵集訓大隊」（永山政三郎部隊長）、台湾各地から台北に集まっていた沖縄出身者でつくる「沖縄僑民総隊」（平川先次郎會長¹⁹）が中心になって北部の基隆港などから沖縄へ引き揚げていった。台湾から引き揚げた沖縄出身者は約二万人を数えた²⁰。

その際、旧台湾総督府庁舎に集合してから基隆に移動して引揚船に乗り込んだケースも少なくない。鉄道員だった父親らとともに沖縄に引き揚げてきた金城俊夫（一九三六年生）はこうしたケースの一人である²¹。

政府や組織の指示を待たずに、私的に手配した船で自ら沖縄へ帰っていく沖縄出身者もいた。このなかには、八重山や宮古から台湾へ来ていた人たちが東部の台北州蘇澳郡蘇澳庄（現在の宜蘭県蘇澳鎮）にあった南方澳漁港^{なんぼうわう}から引き揚げるケースが多かった。南方澳は、台湾のなかで日本に最も近い場所でもあり、日本最西端の与那国島からはわずか一一キロしか離れていない。

南方澳漁港が完成したのは一九二三年（大正十二）六月のことだが、沖縄出身の漁民は



引き揚げ前の昭和21年に台北市公会堂で行われた“琉球民謡と舞踊の夕” 又吉盛清提供



旧台湾総督府 又吉盛清提供

- 22 又吉盛清『日本植民地下の台湾と沖縄』
 21 沖縄あき書房 一九九〇 三七六頁
 20 安仁屋政昭「戦後沖縄における海外
 引き揚げ」『史料編集室紀要』第二一
 号 沖縄県立図書館史料編集室
 一九九六 八頁
 二〇〇九年八月六日に浦添市内で実施
 されたインタビューによる。
 22 台北州『蘇澳の漁港』台北州内務部勸
 業課 一九二六 三九頁

図2 日本が植民地統治していた台湾を描いた絵葉書 松田良孝所蔵



築港以前から足跡を残していたことが知られている。

民俗学者の國分直一²³は一九四四年十二月発行の『民俗台湾』四卷十二号に寄せた「海辺民族雑記（一）——蘇澳郡南方澳」に、南方澳に住む沖繩出身者のことを記録しており、國分はこのなかで、南方澳にあった沖繩人集落のことを「沖繩系漁民は非常に早い時代から遠洋に漁撈し、遠国に移民している。蘇澳郡南方澳にも三十数年前に來たという漁民がいる²⁴」と記しており、築港前の一九一〇年代前半には沖繩の人たちが南方澳にいたことが分かる。

南方澳漁港は、日本が台湾を植民地統治していたころから、日本との間を結ぶ玄関口として知られていたが、戦争が終わると、沖繩への引き揚げ港として機能していった。台湾省行政長官公署は、沖繩からの疎開者が引き揚げ港として基隆港を指定していたが、公式の疎開者帰還船を南方澳に立ち寄せたケースがあり、中華民國政府としても引き揚げ港のひとつとして南方澳に目配りをしていたことが分かる。²⁵

宮古島から員林に疎開していた垣花隆は、戦争が終わると蘇澳に移動して、南方澳から引き揚げてきた。そして、引き揚げ船のなかで死者が出たという話を耳にする。

員林から蘇澳までどう行ったかは覚えていませんけどね。蘇澳港から出ていってね、船の中で人が死んだんだそうですよ。そしたら、これをどうするかということになってね、与那国に行つて、その浜に埋葬しようということになったそうです。与那国に着いてね、死体を埋めたとっていました。

23

國分は、一九四四年三月に軍事訓練で蘇澳に動員されており、その時に沖繩人集落を調査した内容を『民俗台湾』に発表した。安溪遊地、平川敬治編『遠い空——國分直一、人と学問』海鳥社二〇〇六 一九四頁

24

國分直一「海辺民族雑記（一）——蘇澳郡南方澳」『民俗台湾』四卷十二号、一九四四年十二月 六頁

25

台湾省行政長官公署が疎開者の帰還について定めた「遣回琉球難民辦法」（沖繩疎開者帰還規則）では、第四条で引き揚げ港を基隆としている。「遣回琉球難民辦法」は「琉球難民分批遣回原籍案」（国史館台湾文献館蔵）に含まれている。

26

「輸送琉球難民航程報告表」（一九四六年二月二日付）。「遣送琉球難民安全到達回報」（国史館台湾文献館蔵）に含まれている。

疎開地台湾で憂き目を見た疎開者たちは、引き揚げ船に乗り込むことができたとしても、生きて故郷に帰れると保証されていたわけではなかったのだ。与那国島に埋葬されたのは隆と同じ宮古島下地村の与那覇出身者で、その父親は、戦後、遺骨を拾うために与那国島を訪れたのだという。

基隆から出た私的な引き揚げ船としては、宮古出身者を中心とする引揚者が乗り込んでいた栄丸が知られている。栄丸は基隆を出た後に機関故障を起こして漂流し、死者・行方不明者一〇〇人以上を出している²⁷。

垣花光子（一九三七年生²⁸）は母と姉、二人の弟、祖父の六人で宮古島の下地村上地から台北州板橋街（現在の新北市板橋区）に疎開した。終戦後、光子は祖父と二人で先に宮古島へ戻り、母や姉、弟たちの引き揚げの準備に当たることになった。光子がのちに聞かされたところによると、母や姉、弟たちの四人は基隆を出る引揚げ船にいったんは乗り込んだものの、乗船者数が多すぎることから下船を余儀なくされた。この船が栄丸だったことは後になって分かった。あやうく遭難するところだった。宮古島に持ち帰るつもりだった荷物は栄丸に積み込んだままになっており、すべて失った。

留用

終戦後、日本に代わって台湾を統治することになった中華民国は「戦後の台湾の政治、経済、行政の停滞を防ぐために、技術及び特殊技能職員と、知識経験の者の引き揚げを止め」ている。こうして台湾にとどまった人たちは「留用者」と呼ばれ、沖縄出身の留用者四四四人はその家族一三四六人とともに戦後もしばらくの間、台湾に残った²⁹。（松田良孝）

四 引揚者たちのいま

（一）台湾引揚者の集い―親睦と沖縄・台湾交流

沖縄には、第二次世界大戦の終戦後、台湾から沖縄へ引き揚げて来た人々を成員とする



基隆港の風景 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

27 「栄丸事件」として知られる。前掲『台湾疎開』一六七―一七六頁

28 垣花光子氏に関する記述はすべて筆者インタビューによる。二〇一五年二月七日、浦添市内間の垣花氏宅で実施

29 前掲『日本植民地下の台湾と沖縄』三七五頁

集いがある。ひとつは沖縄県台湾会であり、もうひとつは沖縄県台湾基隆会である。この両方の会に所属している人もいる。後者には、基隆で生まれ育ったり暮らしたりした共通の思い出を持つ人々が集っている。

沖縄県台湾会は一九九二年（平成四）に、沖縄県台湾基隆会は二〇〇二年（平成十四）に設立され、年に一度の総会で親睦を深めている。沖縄県台湾会は、設立期は二八〇名の会員がいたが、高齢化によって、関係者の聞き取りをした二〇一一年（平成二三）時点ではおよそ百八〇名にまで減少していた。沖縄県台湾基隆会は、設立期は三六名の会員がいたが、およそ二〇名となっていた。

さらに、台湾時代の学校の同窓会がある。こちらには、沖縄の人だけではなく、本土に引き揚げた他府県の人も多数、参加している。たとえば基隆にあった真砂小学校（現在の基隆市正濱國民小學）は、一九三七年（昭和十二）に真砂尋常國民小学校として創立され、真砂國民小学校と名前を変えて日本の敗戦まで続いた。その後、基隆市に接収され、一度は日本人捕虜の収容施設としても使われ、一九四六年（昭和二一）以降は再び学校となった。

日本統治時代に真砂小学校に通った人々は、引揚げ後に同窓会「真砂会」を設立し、「まさご」という機関誌を発行してきた。一九八〇年（昭和五五）の名簿には一期生から九期生までの百六〇人の会員のうち、四三人（うち逝去として家族の名前が記されていた人が一人）の沖縄の人々の名前が記されている。ここには台湾の人々の名前はない。韓国在住の韓国人が三名、含まれており、同じ日本帝国勢力圏下で、朝鮮半島から台湾への人の移動があったことをうかがわせる。

沖縄に暮らす台湾引揚者の人々は、「母校」や「故郷」を訪ねて台湾に行くこともある。それは旧交を温め合う機会というだけでなく、日本統治下の台湾にいた沖縄出身者のことを地域の記憶として継承するとりくみや、沖縄と台湾の交流を活性化し、友好を深める活動にもなっている。



基隆市街 『臺灣紹介 最新寫真集』（1931年）

(二) 「琉球ウミンチュ」を通じた交流と歴史継承

台湾から引き揚げてきた人々が果たしている歴史の継承や交流の活性化を示す例として、二〇一一年（平成二三）に基隆の和平島（日本統治時代の社寮島）に建立された「琉球ウミンチュの像」が挙げられる。この像の建立記念誌には、次のような記述がある。

「一九〇五年ごろから沖縄各地のウミンチュたちが台湾へ渡り、和平島付近では、最盛期の一九二一年ごろ、五百余人のウミンチュが『琉球村』を築き暮らしていました。沖縄から荒波を渡ってきたウミンチュは、イチヤリバチョーデーの精神で、地元の漁師たちに漁法を伝え、捕った魚を皆に分け与えるなどし、地元の台湾の方々と深い友情で結ばれていました¹。」

自分の父親が社寮島でウミンチュをしていたという譜久村好子は、次のように記している。

「社寮島にまだ沖縄集落がなかったころ、私の父、伯父兄弟や平良恵領さんと恵令さんが社寮島に渡り、漁業を始めたと聞いています。社寮島にはクルーベ浜のような素晴らしい浜があり、サバニ漁をするには最適な場所だったそうです。私たち子供はみな、この素晴らしい浜を自分の庭のように遊んでいました。浜にはサバニがいつも十五、六艘ぐらいありました。私の父は漁船の船長をしており、主にカジキ漁でしたが、季節によってサワラやマグロもとっていました。：旧暦の五月四日の海人祭には、海御願（うみうがん）とって漁師の航海安全と豊漁を祈願し、浜にテーブルを置いてお神酒やお供え物をしてお婆さんたちが祈願しました。祈願がおわると、ハーリー（爬竜船競漕）があり、南組（フエーグミ）北組（ナカグミ）西組と集落が三組に分かれて競漕します。面白いのは転覆競漕やお婆さんとお婆さんたちの応援合戦です。爬竜船競漕が終わると今度は相撲大会がありました。台湾各地に住む沖縄県人は社寮町の爬竜船競漕を見て感動していました。」



「琉球ウミンチュの像」
(2011年) 野入直美撮影

1 琉球ウミンチュの像建立期成会
『琉球ウミンチュの像建立記念誌』
二〇一一、四頁。

お盆は旧暦の七月十三日から十五日まで行っていました。²」

市街地に住み、とくに公務員や教員、警官として働いていた人々とその家族には、日本語の標準語だけを用い、沖縄の伝統的な文化や行事からは距離を置いた暮らしをしていた人が多かった。それに対して、社寮島の沖縄集落では、人々はウチナーグチでしゃべり、伝統的な慣習を維持していたことがうかがえる。

二〇一一年に「琉球ウミンチュの像」が和平島に建立されたのは、「豊かな海で漁業を生業としていた市民たちの平和的交流の時代に立ち返り、互いの歴史文化の接点、共有点のシンボルとして、基隆に祖先のウミンチュをかたどった石像を贈る」³ことを願った沖縄の人々がいて、それに台湾の人々が応えてくれたからである。日本統治下の台湾経験を有する人たちは高齢化しつつあるが、今もなお、沖縄と台湾の交流を担い、友好を深める役割を担っているといえる。そして、日本統治下の台湾にいた沖縄出身者のことは、現代の台湾においても、ひとつの地域の歴史として継承されているのである。

(三) 台湾経験を語ることの難しさ

日本統治下の台湾で子ども時代や青年期を過ごした人々の中には、今も、台湾を第二の故郷として大切に思っている人がある。台湾で大規模な地震が起こった一九九九年（平成十一）年には、知人の身を案じて連絡をとり、寄付を送った人も少なくない。

一方で、台湾引揚者の集い以外の場で、自分が台湾でどのような体験をしたかということとを、他の人に話したことがあるという人はあまりいない。自分の孫は、自分が台湾にいたことさえ知らないと言う人もいる。

この浦添市史を編纂する過程でも、「台湾のことなんて聞いてどうするの?」という質問を調査協力者の方から受けることがあった。以下は、実際にその方が調査員に問いかけをしたときの語りである。

2 譜久村好子「社寮島（現和平島）の思い出」前掲書、一〇頁。



社寮島の海岸（2011年）野入直美撮影

3 前掲書、二頁。

戦前のことは、あんまり自分、話さないですね。聞こうもしないし、私も言おうもしないし。沖縄だったら、沖縄県にいた人の話を聞いた方がいいんじゃないの？台湾の話、聞いたって、どうしようもない？

この場合、台湾引揚者自身が、台湾経験には継承する価値が含まれていないと感じているのである。その背景には、台湾における戦争体験が沖縄に比べて相対的に軽微であったことから、台湾引揚者は、戦争の悲惨さを後世に伝えることには適さないとする認識があるように思われる。沖縄戦を体験しなかったことへの申し訳なさのようなものを抱えている人もいる。

沖縄における住民の経験の継承は、「戦争の記録」という文脈を中心として展開されてきた。そこでは、とくに沖縄本島が被った空襲や地上戦による惨禍を後世に伝え、平和を希求するとりくみがきわめて重要なものとなってきた。一方で、日本統治下の台湾経験には、標準語しか話さず、自分を日本人だと思って育った子どもの思い出や、植民地における生活の豊かさなど、沖縄における住民の体験記録の文脈にはおさまりにくい要素が含まれている。人が台湾経験をあまり聞こうとも思わず、当事者も言おうもしないのは、それが語られうる文脈、その記憶が共有されうる空間が見当たらないからであろう。

しかし本当に、日本統治下の台湾経験には、次世代への継承に値する内容が含まれていないのだろうか。地域の歴史として共有されるべき経験とは何なのか。その問いに取り組まねばならないのは、語らないままに高齢化しつつある台湾引揚者の人々よりもむしろ、ひとりひとりの地域住民であるように思われる。（野入直美）



1908年、台北市に建てられた公営市場。現在は劇場として活用されている（2012年）
下地智子提供

第四節 満州

はじめに

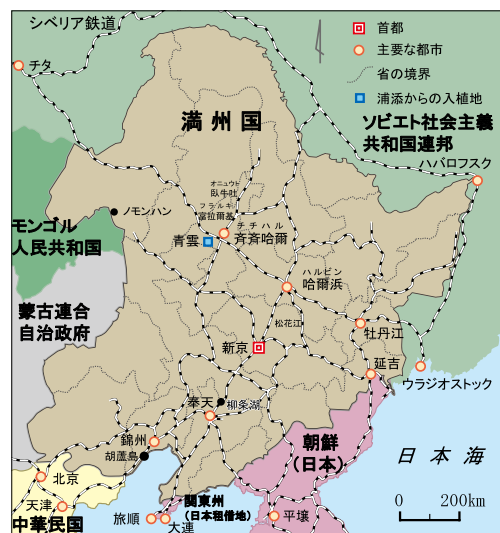
日本・沖縄にとって満州とは、あるいは「満州国」、「満蒙開拓」移民とはいったい何だったのか、そしてそのかわりは、どのような形で進められ、関係性の是非はどうなっているのか、日本帝国政府は、「満蒙開拓」など国策としてどのような植民地政策を展開してきたのか、沖縄の近代史・琉中関係史・植民地研究の分野からすると、植民地帝国日本の支配下にあった「満州国」で沖縄人は、どのような侵略戦争、植民地支配の体験をもったのか、その実態を明らかにする作業は、十分とはいえず説明は今後の重要課題となっている。

満州が日本、欧米で一般的に清朝の「東三省」地方を意味するようになったのは、一八六〇年の北京条約により、清朝が沿岸地方をロシア帝国へ割譲した後のことである。その地域は、中国東北地方に広がる現在の遼寧省（「満州国」の奉天）・吉林省（「満州国」の新京）・黒龍江省の三省である。この一帯に住む女真族が満州族と呼ばれていたことから、この満州名が普及することになる。

日本人の早い時期の満州移住は、帝政ロシアの満州経営とともに少し動き始め、その後、日露戦争の開戦による軍の駐屯地が建設されたことで、それを商売相手にした雑貨商、料理店、遊郭などの流入がみられ、さらに戦争の勝利によって移住者が増加していった。そして本格的な移住が始まるのは、一九〇五年（明治三八）の関東州租借による。関東督府の設置に始まり、国策会社の南満州鉄道株式会社（以下「満鉄」）、日本企業の支店、企業などが設立されると、各地に日本人社会が形成された。こうして満州の植民地支配の基盤がかためられていき、一九三一年（昭和六）の満州事変時までは、日本人の渡満が二三万人を超えるようになり、満州における軍事、政治、経済、社会の動向に一定の役割を持つようになる。

更に関東軍の満州事変により「満州国」が樹立されると、日本は本格的な満州支配に入り、一九三六年（昭和十一）「満蒙開拓」移民（初期は農業移民）が開始された。日本の

図1 満州国略図



宮内久光作成

1

租借地の意義は、条約によって一国が他国の領域の一部を借りる場合その地域をいう。関東州は中国遼寧省の遼東半島南部の地域で、ロシアが一八九八年から清国より租借していたが、日露戦争の結果、日露講和条約において日本が一九〇五年に本租借地を継承した（『日本外交史辞典』新版 山川出版社一九九二年を参照）。

面積のおよそ三倍に当たる約二三万三四〇〇平方キロメートルの、内モンゴルの一部を含む中国東北部の全域を「民族協和」、「日満一体化」の名のもとに「日本化」、植民地化していく野望が開始されたが、この国策は敗戦によって無数の死者と犠牲者を出して頓挫したのである。（又吉盛清）

一 沖縄と満州

日清戦争による台湾領有²は、中国・東アジア分割の本格的な出発点になり、この戦争のもう一つの狙いであった朝鮮の本格的な植民地化は次の機会まで待つことになるが、日本の植民地主義による帝国体制の成立に拍車をかけた。沖縄と台湾の領有は、「満韓」（満州と韓国）支配に向けて「現実的」な目標として特に教育界で取り組まれるようになり、沖縄と台湾は、その担い手としての役割が期待されるようになる。

台湾領有の翌年、一八九六年（明治二十九年）に刊行された『琉球教育』第三号は、「沖縄の地は、新しく版図になった台湾及び澎湖島の間に介在し要港となった。このような地位にある沖縄県の人士特に子弟少年らは、国の屏障となつてこれを他に委すことなく、南門の鎖鑰としてその有事に当たるべき重責を果たすことができなければならない」と論定している。そこに見られるのは、沖縄・台湾を拠点にした植民地支配の次の標的「満韓」進出を見すえた人材教育の叱咤激励であった。

当時の代表的な東洋史家であった那珂通世³は、「北海道のアイヌ、沖縄を経て台湾、朝鮮、中国の同化を以て世界に冠たる植民地帝国の拡大をめざす」と位置づけている。台湾総督府技師の新渡戸稲造は、「日本国民として将来膨張すべきものとして、北は満韓、西比利亜、南は南清より南洋方面に漸次発展⁵」すべきものと断じている。

沖縄教育もまた日清戦争後は急速に、日本の将来は「満韓」にあり、という植民地主義を強調する教育方針を掲げ、「清語研究」が強調されると同時に、「満韓」視察、情報収集などが行われるようになる。これらの明治期の満州とのかかわりが、その後の沖縄人の満州観を形成するものになり、満州は未知なる土地ではなく、渡満への抵抗感を弱める

2 日清戦争後、一八九五年の講和条約により、日本が清国より台湾全島と付属する島嶼の主権等を清国より譲与された。（『日本外交史辞典』新版 山川出版社 一九九二年を参照）

3 州立ハワイ大学編『琉球教育』第一巻 本邦書籍株式会社 一九八〇年 一〇〇～一〇一頁。

4 『臺灣教育會雜誌』卷三 ひるぎ社 一九九四年 八五～九四頁。

5 前掲『臺灣教育會雜誌』卷四 六五九～六六四頁。

ものになったのである。また沖縄人の中で満州観が普及し定着していくのは、一九〇四年（明治三七）に開戦した日露戦争である。「満韓」を戦場にした日露戦争は、沖縄人兵士二〇〇〇余人が参戦している。⁶三八〇〇余人の説もある。⁷

明治期の沖縄の地理的、社会的な閉鎖性の中で、一般庶民が海外に渡航して外の世界を知ることは、望みようもない時代のことである。いくなれば沖縄人は、日露戦争によって大量に「満韓」体験を持ち、拡大させたことになる。戦争の勝利感とともに、韓国朝鮮人、満州（中国）人に対する植民地的な征服欲や、偏見と差別感も醸成されていく、これが潜在化し、後の満州開拓移民などの現場にまで波及したことが考えられる。

一九〇六年（明治三九年）の『琉球新報』に掲載された「中学生徒満韓旅日記」によれば、那覇発の薩摩丸に乗船して、韓国の旅が実施されている。その行程は、那覇港を出て大島名瀬港・鹿児島港で下船して汽車に乗り換えて、栗野駅まで行き、その後は馬車に揺られて大口、水俣に入る。水俣では汽船の熊本丸に乗り換えて三角に向かい、二、三か所の港に立ち寄り門司に着く。門司からは、汽車で八幡に向かい製鉄所などを見学した後、いよいよ目的地の朝鮮、大連への船出である。⁸

このコースが明治期の沖縄から韓国・満州に渡る陸海の定期的な道程であった。日露戦争後二年目で、「満韓」の植民地化の道は、南国の沖縄からも韓国・満州へと開かれたのである。昭和期には那覇、鹿児島、三角、大連に大阪商船の定期航路が開通したので、沖縄からの渡満と開拓移民の多くは、この路線を利用した。⁹

沖縄人で早くから満州と関わりを持ったのは、日清、日露戦争の兵士の他では、自由民権運動家（後の沖縄独立運動家）の新垣弓太郎である。新垣は一九一一年（明治四四年）、辛亥革命の指導者、宋教仁らに呼ばれて大連から上海に入り革命に身を投じている。また、台湾総督府の勅任官の照屋宏（後の那覇市長）が、一九二七年（昭和二）に、台湾鉄道部の視察研修で大連の満鉄本社を訪ね、『満鮮見聞録』を残している。

新垣、照屋よりさらに早く、一九〇五年（明治三八）に大連の蓬坂町につくられた遊郭街に台湾や大阪あたりからやってきた沖縄女性がいた。満州体験者の証言によれば、この

6 『琉球新報』一九〇六年（明治三九）六月二十四日。

7 『沖縄大百科事典』沖縄タイムス社一九八三年 一二〇頁。

8 『琉球新報』一九〇六年（明治三九）九月十三日。

9 『満州支那汽車時間表』一九四〇年（昭和十五）七月十五日。



旧満鉄本社（2012年）又吉盛清撮影

時期に北満の国際都市になっていたハルビンの遊郭にも沖縄女性がいたことが判明している。

満鉄は、日本政府も出資し鉄道、鉱山、製鉄、病院、ホテル、学校経営までで、関東軍と利権を共にした国策会社であった。その満鉄に多くの沖縄人が技師、医師、教員、事務職、工夫、鉄道員として働いていた。その出世頭になったのが戦後、沖縄選出の国會議員になり、沖縄開発庁政務次官を務めた稲嶺一郎である。稲嶺は、一九二九年（昭和四年）に早稲田大学を出て満鉄に入り、用度課長などを歴任している。今の大连市内には、「満鉄王国」の本社、病院、社宅跡や満鉄直営のヤマトホテル（現大連賓館）などが現存する。ヤマトホテルは、満鉄総裁の後藤新平や外務大臣の松岡洋右らが宿泊した「満州一」のホテルであった。

満州事変による一九三二年（昭和七）の「満州国」の樹立は、さらに沖縄からの渡満者の増加に道を開くことにつながる。満鉄、満洲炭鉱株式会社、満洲製鉄株式会社などの国策的な会社から「満州国」官吏、学校教員、小規模の工場や商店も就職先になった。また進学での渡満も多くいて、大学、専門学校、高等女学校にも進学している。学校教員の中には、旅順高等女学校校長を務めた新里朝明がいる。大連には幾人かの沖縄人校長もいた。米軍統治下で琉球政府の会計検査院初代検査官を務めた渡久山寛三は大連の嶺山小学校に在職していた。また従兄の渡久山寛常が弁護士事務所を開設して、「大連沖縄人有志会」も結成され沖縄人の会合や連携の中心になっていた。

その「有志会」が、一九三七年（昭和十二）に成立した第一次近衛内閣の拓務参与官に就任した伊礼肇が満蒙開拓の事前調査のため大連に入ったとき、大々的な歓迎会を開催し協力を約している。このときの伊礼の満州視察がその後、沖縄からの満州開拓移民、青少年義勇隊の派遣などの増加につながり、国策的な満州移民が送りだされる大きな要因にもなったのである。

「満州国」の「国都」に定められ満州支配の中心になった新京（長春）には、敗戦時には八万近い日本人が住み沖縄県人会も作られていた。満州国の沖縄人官吏も高嶺明達（経



伊礼肇拓務省参与官（前列左から3人目）歓迎会の写真 又吉盛清提供



旧ヤマトホテル（2012年）又吉盛清撮影

済部工務司長）、外間政恒（外交部）、池宮城克慎（建築局理事官）ら二〇人前後の所在が判明している。浦添出身では、松岡洋右の勧めで「満州国」外交部に転出し沖繩初の本省の外交官になった田場盛義がいた。

その他に、満鉄の社員、鉄道員、会社員もいた。復帰後に浦添に移住してきた田中一郎（一九三二生）は、父伊六の満鉄への勤務に伴い一九三三年（昭和八）に家族で神戸から渡満。満鉄職員の子弟が多く通う信永小学校を卒業すると、斉斉哈爾中学校へ進学した。当時、買い物は満鉄経営のデパートで「かけ」で買い物をし、後日父の給料から差し引かれていたらしいと記憶している。一年生の夏休みに開拓団への援農に参加、一九四五年（昭和二〇）には通信隊へ動員された。ソ連軍の侵攻をうけ八月九日には特攻要員となり、訓練が始まるが、八月十四日には「重大発表」があると解任、家（満鉄社宅）へ帰され、翌十五日に斉斉哈爾中学校校庭で天皇による終戦詔勅を聞いている。校長より敗戦の旨説明があったが、四年生の一人が朝礼台に立ち日本は負けないと演説していた。天気は快晴で、校長・軍事教官の訓示を聞くと、何かしらほっとしたという。帰りに道で配属将校に敬礼すると、あわてて「敬礼するな」と言われたと語っている¹⁰。

また、関東軍の兵士や北満のソ連との国境に近いモンゴルを戦場にしたノモンハン事件で戦死した城間区と西原区の兵士がいる。早いものでは一九〇四年の日露戦争で、今の北朝鮮と中国の国境をなす丹東付近で戦死した伊祖区の兵士がいる。満州開拓移民が渡満する前の、浦添人と満州との関わりを知ることができる事例である。（又吉盛清）

二 満蒙開拓移民

（一）国策による満蒙開拓と沖縄からの農業開拓移民

日本国は、「満州国」の樹立に合わせて、満蒙開拓の名で本格的な満州の植民地支配に乗り出した。その手はじめに一九三二年（昭和七年）、関東軍の東宮鉄男大尉と農業指導者の加藤完治の発案によって最初の「第一次試験移民」として、四九三名の在郷軍人らが三江省の佳木斯チャムスに送られた。後に満蒙開拓のシンボルとして、もてはやされた「弥栄村」



満鉄に勤務していた父と
記念撮影。（1943年頃）
田中一郎提供

10

二〇一四年（平成二六）の聞き取り調査による。父伊六は静岡県出身。戦後は母マツの出身地沖繩県金武村に移った。一郎は一九七七年（昭和五二）に浦添市に移住している。

である。村と入植地は、中国人の土地と農作物を奪い、建築、田畑にしたもので、もとは永豊鎮という満州族の土地であった。

この最初の試験移民は、武器を携帯した武装移民で、ソ連を仮想敵国としたものでソ満国境の警備を主にした軍事的な使命を担っていた。満蒙移民の軍事的な役割は、この最初の入植から引き揚げの最後まで、国策の一貫として通底したものであった。しかしこのような軍事的な意図は巧みに隠されて、夢と希望の新天地の開拓移民であるとして、国民を動員したのである。

こうして最初の武装移民から四年目の一九三六年（昭和十一）六月に、関東軍、「満州国」、日本拓務省、朝鮮総督府の合同移民会議が開かれ「二〇年で一〇〇万戸、五〇〇万人を移住させるという大移民計画」が決定する。この計画で送り込まれた開拓移民は、二七万人になり、敗戦時のソ連軍の侵攻と現地中国人の報復などもあって、引き揚げ時に八万人が死亡している。

沖縄も満蒙開拓青少年義勇軍六四四名、一般農業開拓移民二三五〇名を送出し¹¹九八〇名の死者を出している¹²。沖縄でその満蒙開拓移民の国民大動員と軍事的な国策が具現化していくのは、一九三七年（昭和十二）から始まる全面的な日中戦争の勃発である。長期で全面的な戦争によって、侵略戦争と植民地支配を継続する産業増産・食糧確保・人的要員の補強などが必要になり「満州国」はその供給拠点、産業倉庫として位置づけられたのである。

沖縄から最初に満蒙開拓送出事業として「満州国」に入ったのは、十五歳から十九歳を対象にした満蒙開拓青少年義勇軍で、一九三八年（昭和十三）四月のことである。その後、義勇軍送出運動が本格化し青少年への呼びかけが進み、一九四四年（昭和十九）まで続くことになる。こうして前記のような六四四名の義勇軍が送り込まれたのである。

浦添から青少年義勇軍に参加した仲西尋常高等小学校出身の赤嶺馨の便りが同校の『創立三五周年記念誌』¹³（一九三八年）に収められており、渡満の日程や上陸、勃利着の様子を知らせている。



浦添出身者が入植した青雲開拓団の開拓農地の跡（2012年）又吉盛清撮影

11

満洲開拓史復刊委員会編『満洲開拓史』全国拓友協議会一九八〇年 四六四～四六五頁。（一九六六年刊 満洲開拓史刊行会編集発行の復刻）

12

死者は「沖縄女性史を考える会」の調査によるもので戦死者を含めたものである。なお沖縄人の農業移民の送出は、二六〇三名が判明したとの報告がなされている。

13

『創立三五周年創立五五周年記念誌 複製版』浦添市立仲西小学校 一九九三年 三二頁。

満洲義勇軍通信¹⁴

満洲義勇軍 赤嶺馨

お手紙有難う存じます。諸先生方を始め生徒一同皆元気の由誠に嬉しく存じます。僕等は六月十五日愈々渡満となり今日午前八時三〇分の汽車で東京に向かい、宮城を拝し、それから二時の汽車で敦賀に向かいました。

敦賀出発の時、後をふりかえって見て、いよ／＼母国を去るんだと考えた時、急に淋しくなりました。

十八日午前六時朝鮮の清津に上陸し、二十日満洲の勃利に着きました。駅から八里もあるが四里はトラックで後は徒歩でいきました。皆々元気です。僕達三名は入所した以上は是非とも、此大使命を果たします。それでどんな苦しみも一致団結して成功させますから御喜びください。

バスケット、バレーは只今校庭で猛練習中だそうですね。今年も是非優勝するように心から祈ります。どうぞ優勝旗を母校から放さないよう。遠き満洲にて母校の発展を祈ります（昭和一三、七、三）

また、この時期の満蒙開拓青少年義勇軍の申込みに浦添から四人があったこと¹⁵、茨城県在の内原訓練所への出発¹⁶、同訓練所から渡満する¹⁷という記事が昭和十三年の『琉球新報』に掲載されている。

沖縄からの一般開拓団の「農業移民」の送出は、青少年義勇軍より遅れて、一九三九年（昭和十四）から開始され、一九四四年（昭和十九）までに七つの開拓団が渡満入植したことが判明している。その他に「大陸の花嫁」と呼ばれて開拓団の男性と結婚して渡満した女性や他県の開拓団に入植した沖縄人がいた。その渡満の経過は次の通りである。

一九三九年（昭和十四）二月

沖縄から最初の農業移民が入植した開拓団。九州六県による混成団で、浦添村からの入植なし。一四七世帯五三九名のうち沖縄人は、四〇世帯、一八一名（二〇〇八年八月現在の調査）。入植地は小山子九州村。

14 表記は新漢字及び現代仮名遣いに改めている。

15 『琉球新報』一九三八年（昭和十三）二月十七日

16 『琉球新報』一九三八年（昭和十三）五月一日

17 『琉球新報』一九三八年（昭和十三）六月十二日

一九四〇年（昭和十五）二月

沖縄と奄美大島の混成。団員の三分の二は沖縄出身者。入植地は三江省方正県伊漢通開拓団。浦添村から一名の入植あり。

一九四〇年（昭和十五）から一九四一年（昭和十六）

今帰仁村開拓団、南風原村開拓団、恩納村開拓団の三開拓団。二、三キロ離れた地域の龍江省龍江県東臥牛吐・扎布哈屯・河西屯に入植。同一村民だけで構成した「分村」の集合開拓団。三開拓団で戸数二〇五、在籍者数九七五名（「沖縄女性史を考える会」二〇一二年三月調査）。

一九四三年（昭和十八）三月

真壁・浦添・知念の三村からの開拓団。今帰仁、南風原、恩納各村と同じ、龍江省龍江県の孫家屯に青雲開拓団として入植。戸数一二七戸、延べ在籍者数六〇三名（二〇〇九年三月現在調査）。

一九四四年（昭和十九）三月

越来村開拓団。沖縄県の「一〇カ年三万戸計画」の「分村」開拓団として龍江省景星県上頭站黄河屯に入植。戸数六五戸、在籍者数一九〇名。沖縄県最後の開拓団。

その他に沖縄人が他県の八道河子、班代共和、信磨、高田などの開拓団に入植している。

また、一九三九年（昭和十四）十二月、「大陸の花嫁」として開拓団の定着と発展、次世代へと開拓民をつなぐ「花嫁」募集の事業項目が決定。那覇の沖縄県殖産訓練所を「花嫁」養成所として使用。沖縄からは、女性の集団渡満はなく、開拓団の男性が一時帰国して結婚、渡満するケースが多かった。

（二）浦添からの渡満

満州事変による「満州国」樹立後、盧溝橋事件を経て日本と中国は全面戦争に入り、中国戦線は、粘り強い中国軍民の抗戦の前で、勝ち目のない泥沼の長期戦に入ることにな



齊齊哈爾駅は1936年満鉄によって竣工された（2012年）又吉盛清撮影



青雲開拓団が入植していた村 宮城高進提供



臥牛吐開拓団跡地に現存する家屋（2012年）又吉盛清撮影

る。そこから抜け出す次の手は、日本国の最南端の国防の防波堤として位置づけられた沖縄・台湾を拠点にした南進侵攻政策の転換と推進であった。

沖縄から最初の開拓移民が渡満入植した翌年の一九四〇年（昭和十五）七月、政府は戦線を南方に拡大する「大東亜の新秩序」建設を目標にした「大東亜共栄圏」構想を打ち出し、対米英戦争も辞さぬ無謀な国策遂行に踏み切った。こうして九月の北部仏印武力進駐を契機にして戦線は南方に拡大した。沖縄は「南方の生命線」と強調され、沖縄戦に向かつて大きく動きだすことになる。日本軍は一九四一年（昭和十六）、ハワイ真珠湾攻撃と同時にマレー半島に上陸を開始して、アジア太平洋戦争が始まり、その後、沖縄戦と連結して徹底的な破滅を迎えることになる。

浦添からの開拓移民が渡満する前年の一九四二年（昭和十七）に、ミッドウェー海戦で大敗し、米軍の反攻作戦が始まると、日本軍は至るところで総攻撃に入るが、敗北を喫している。一九四三年（昭和十八）に入ると、日本軍の玉砕、撤退が始まり敗戦は決定的なものになっていた。そのような中でも日本政府と軍は、次の沖縄での決戦に備えて宮古・八重山・沖縄本島では「玉砕戦法」の特攻作戦のため飛行場建設が開始された。合わせて政府は、この年に「戦時行政特別法」を公布して、「秘密保護」を目的とした戦争遂行のため国民の口封じに入ったのである。

沖縄からの最後の渡満になる一九四四年（昭和十九）三月には、学童疎開船の対馬丸が米潜水艦の魚雷攻撃を受けて沈没。一〇月には、一〇・一〇空襲があり米機動部隊が沖縄を襲撃、那覇市の九〇%が灰塵に帰している。このような状況の中での渡満は、正に戦時下の棄民政策ともいえるべきものであり、死地に送り出すようなものであった。

このような戦時下ともいえるべき中での浦添からの渡満を、「沖縄女性史を考える会」編の『沖縄と「満洲」——「満洲一般開拓団」の記録』¹⁸（二〇一三年）を参照にしてまとめる。

浦添からの開拓団は、第十二次の二百戸集団開拓団であった。青雲開拓団の名称で呼ばれ浦添村、真壁村、知念村他で構成された。一九四三年（昭和十八）三月のことで、入植

地は、龍江省龍江県孫家屯（現黒龍江省齊齊哈爾市龍江県）であった。三村の入植者全員の実際戸数は、一二七戸で在満の在籍者数は、延べ六〇三名（二〇〇九年三月現在調査）であった。浦添の入植者は下記の通りで、計数に当たっては、戸数は筆者の算定で家族構成が判明出来るように、家族数人でも一人の場合でも一戸と算定した。

先遣隊

一九四三年（昭和十八）十一月、全国的に取り組まれた「皇国農民精神」を誇示する「分村」¹⁹の満蒙開拓を推進する国策事業によって、浦添・真壁・知念の三村は、合同会議で幹部に浦添村字西原の村職員¹⁹の比嘉通吉を選任。三村で先遣隊を構成して、渡満希望者を募り、二四名がハルビンの基幹訓練所で研修を受けて入植している。浦添からの各区の戸数と人数は次の通りである。沢岬四戸四名、西原三戸三名、仲間、屋富祖、整理客、前田各一戸と各一名の計十一戸十一名。

補充先遣隊

一九四三年（昭和十八）の補充先遣隊の渡満入植は、本隊を迎える準備と広大な土地の確保による農作業などのために渡満を促したものである。浦添四戸四名、真壁の七戸七名の計十一名と考えられている。

呼び寄せ（家族招致）

一九四三年（昭和十八）十二月、先遣隊が家族などの呼び寄せで来沖。開拓地の良さと未来の振興と夢を語り、宣伝して同伴渡満した。この時のメンバーは、西原を中心とした本隊第一陣での入植者と重なるので、ここでは戸数と人数は計上しないことにした。

浦添村本隊第一陣

一九四四年（昭和十九）三月渡満入植。家族の呼び寄せで帰郷した西原が中心になる。渡満途中の正月を関釜連絡船内で過ごす。そのコースは、那覇港―鹿児島―下関―関釜連絡船―釜山―ワラルキの弁事所となっている。陣容は西原三戸十七名、経塚一戸四名、仲間一戸六名の計五戸二十七名である。



青雲開拓団の入植地である興隆堡（現興隆崗）の現在の集落（2012年）又吉盛清撮影



青雲開拓団の入植地である長山堡（現長山崗）の現在の集落（2012年）又吉盛清撮影

19

浦添村を含む沖縄の分村については前掲『沖縄と「満洲」―「満洲」一般開拓団』の記録」三二―五二頁、沖縄県沖繩史料編集所編『沖繩県史料』近代―昭和十八年知事事務引継書類 沖縄県教育委員会 一九七八年 二八三―二八七頁、二九二―二九六頁に詳しい。

浦添村第二陣

一九四四年（昭和十九）二月六日渡満入植。入植は沢岬が中心であった。當間信子は「私たちは父が家族招致で迎えにきたので渡満した」と語²⁰っている。那覇出港は一月二三日と考えられる。陣容は、沢岬六戸二六名、仲西三戸十一名、城間一戸八名、勢理客一戸四名、西原一戸四名、小湾一戸二名、屋富祖一戸一名の計十四戸五六名である。

浦添村第三陣

一九四四年（昭和十九）六月一〇日渡満入植。宮城が中心で那覇出港は五月二七日と考えられる。陣容は、宮城五戸十五名、安波茶一戸二名、仲西一戸二名、屋富祖一戸一名、小湾一戸二名、屋富祖一戸一名、不明一戸二名の計一〇戸二四名である。

越来開拓団との同行

一九四四年（昭和十九）八月渡満入植。第十三次上頭越来開拓団との同行と考えられる。陣容は、仲西一戸二名である。

浦添村第四陣

一九四四年（昭和十九）十二月三十一日渡満入植。浦添から本隊を編成して渡満入植した最後の開拓団。陣容は、城間一戸五名、仲西一戸四名の合計二戸九名（首里市として浦添村に加えられる世帯は除く）である。

その他

資料、証言などが少なく渡満者が不明として扱われているのが、前田二戸六名、屋富祖一戸三名、宮城一戸二名、小湾二戸二名、区不明二戸二名、合計八戸十五名である。

浦添からの渡満者の人員を合計すると、先遣隊十一戸十一名、補充先遣隊四戸四名、第一陣五戸二七名、第二陣十四戸五六名、第三陣一〇戸二四名、越来開拓団同行一戸二名、第四陣二戸九名、不明者七戸十五名で合計三九戸一四八名である。

字別にみると、沢岬六戸三一名、西原五戸二四人、仲西六戸二〇名になり、この三カ字で戸数十七戸七五名になり、全戸数の半分近く、総数の半分以上を占めている。



開拓当時のままの土レンガづくり（1998年）
宮城高進提供



入植者の墓所跡（2012年）又吉盛清撮影

20 前掲『沖縄と「満洲」』五三六頁。當間信子の妹嘉数キク子も、父嘉数英吉は、先発隊で単身満州へ渡った後に一度帰国、翌年妻と子ども四人とともに青雲開拓団として渡満したと証言している（浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史』証言・資料編 浦添市教育委員会 二〇一四年 二〇七～二〇九頁）。

この三カ字で渡満者が多く出たのは何故か、その動機、背景などの解明については、種なことが考えられる。その解明は今後の課題であるが、今言えることは、西原と仲西には、役場の吏員で職務として幹部や担当員になって入植を推奨し、先遣隊にもなって現場視察をした人物が積極的に勧誘した²¹ことである。

沢岬については、浦添村の upper 区に位置し交通の便も悪く、下区に比較して不便な地域であった。満州開拓は村人の次の生活を築くことを約束する道でもあったのである。沢岬から一番多くの先遣隊を出したのも、ひとつはその辺にあったのではないかと思われる。

渡満の動機は多種多様である。経済的な理由だけに留まるような単純なものではなく、社会的、文化的、民俗的な背景もあり、戦時下の軍事的な危機感もある。浦添と一緒に団を組んだ青雲開拓団の幹部であり、その体験記を書いた前田正敏（元糸満市教育長）は、渡満入植の動機に「軍隊の召集から逃れるために沖縄からの応募者も多かった」と語っている。²²ここには戦時下の沖縄脱出と男子の徴兵逃れもあったことが分かる。

また同氏の著作である『青雲開拓団誌』（一九八六年）の中で、各自の動機として「日中戦争からの生還者の兵役逃避」、「主体的な農業経営、二男三男の貧農からの自立と独立」、「日本軍の基地化と戦時体制からの脱出、満洲の安全性」、「先遣隊と幹部の勧誘」などがあったとしている。ここには守らなければならない命と家族の生活と暮らしを、より良いものになりたいと思う、ごく普通の庶民の願望がある。しかしそのような思いは達せられることはなく、侵略戦争と植民地支配の国策の下に思わぬ残酷な生と死の地獄を味わうことになるのである。（又吉盛清）

三 移民先での生活

浦添出身者が参加した青雲開拓団の入植状況と渡満後の暮らしについて、沖縄女性史を考える会の「沖縄県と『満洲』①一般開拓団」（二〇〇四年）の詳細な分析を参考にしながらまとめる。¹

21

戦前名古屋に住んでいた宮里静江（父の比嘉三郎が字西原出身）の家族は、浦添村役場勤めの叔父に勧誘されて渡満した。叔父通吉は渡満希望者を募集する係で、勧誘や手続きのため名古屋まで二回も訪れたという（浦添市移民史編集委員会編『浦添市移民史』証言・資料編 浦添市教育委員会 二〇一四年 一九七～二〇一頁）。

22

「一枚の写真」『琉球新報』一九八三年一〇月二二日。



訪れた青雲開拓団の墓地で線香をあげる人々
(1998年) 宮城高進提供

1

証言者の年齢は、すべて二〇一二年当時のものである。

満州を目指す

「いけ満州へ」「満州の沃野」。開拓団を募集する言葉は、大陸の広大さ、豊かな自然など、沖縄とは違う土地へのロマンをかきたてた。スローガンの一つである「二〇町歩農家」。二〇町歩とは約十九万八三四七平方メートル。一九四〇年当時、沖縄の農家の耕作面積は五反（約四九五八平方メートル）が全農家の五五%²だった。満州では、その約四〇倍の土地を耕作することができると喧伝された。喜舎場宗英さん（八五歳）は、十九歳で両親ときょうだい四人で参加した。「そこには食べ物が多くあつて。土地も貰える。宮城^{なしくずく}から、畑を全部売り払って開拓へ。（沖縄では）畑はあるが、皆、もっと豊かな暮らしがしたいという気持ちから」³。喜舎場さんの参加動機が、多くの団員が抱いた夢を象徴する。

当時一〇歳だった喜舎場宗景さん（七六歳）の家族は、南太平洋の戦禍がやがて沖縄へもやってくる⁴と考え、開拓団の道を選んだという。「お父さんが、この戦は沖縄まできつと来るから（喜舎場さんの父親は、村屋の隣で理髪業⁴をしており、そのことから様々な情報を聞き得た）。向こう（満州）へ行つとつたら無事⁵と思って。また日本政府から、勧められて」⁵。政府が進める国策移民であるということも、安全であるということの理由となった。

青雲開拓団には浦添村以外に、真壁村などからも参加している。海岸に面した真壁村の参加者も、沖縄が戦争になったら真っ先に攻撃されると開拓を選んだ（新垣ハツさん九〇歳Ⅱ糸満市）という証言がある。また集落に駐屯した旧日本軍から「沖縄玉砕」の方針を聞かされ、開拓団参加を決意した（宜野座仁一郎さん九四歳Ⅱ糸満市）という証言もある⁶。しかし、一九四四年（昭和十九）末に渡満した開拓団の人々は移動の途中で、十・十空襲によって那覇市が壊滅的な打撃を受けたと知らされ、残してきた人々の安否を気遣いながらの渡満となった。

2 沖縄県教育委員会『沖縄県史』第七巻各論編六 移民 一九七四年 四九六頁

3 二〇〇九年九月に実施した聴き取り調査により得られた証言。

4 近世の沖縄の村の施設で、役所や集会所の機能を果たした。（『沖縄民俗辞典』吉川弘文館、二〇〇八年、五〇七頁）

5 二〇〇九年九月に実施した聴き取り調査により得られた証言。喜舎場宗景さんの証言は、浦添市移民史編集委員会『浦添市移民史』証言・資料編（浦添市教育委員会 二〇一四年）二〇一～二〇二頁にも収録されている。

6 一九四三年（昭和十八）、沖縄から国内外へ労働力流出を防ぐため、県外出稼ぎの渡航が制限された。男性三〇歳未満、女二五歳未満に対し乗船制限が実施された結果、渡航が制限された若者世代を帯同するため開拓団を選んだ家族もあった。

青雲開拓団の建設

『満州開拓史』を参考に、一九三六年（昭和十一）に始まる「二〇カ年一〇〇万戸送出計画」に基づく開拓団建設の流れをまとめる。団長と指導員、先遣隊（四万一五〇人）が訓練を終えて二月ごろに入植地に入る。「開拓団建設計画書」に基づき、地方各機関との連絡、先遣隊用宿舍整備、建設資材や日用品、食糧などを輸送する。続く本隊のために、共同宿舍（開拓団二〇〇戸の場合八戸）、倉庫（四）、炊事場・浴場（四）、便所（四）、畜舎（四）、井戸（四）を建設する。並行して食糧補給、家畜飼料の準備として農耕も行った。本隊は六月ごろから二〜四回に分かれ渡満する。初年度に入植完了が基本とされたが複数年にまたがる場合もあった。拓務省の立案では三〇〇戸の開拓団で、初年度に一二〇人、一〜三年目に団員の妻や子、縁故者など毎年六〇人が入植する計画だった。

一年目には、生産や消費を団全体で管理する共同経営がとられた。また、醸作場、精米所などの加工施設、本部、学校、診療所の建設が計画された。個人家屋も全体の三分の一にあたる戸数の完成を目指す。二年目には開拓団は、二〇〜三〇戸の集落に分かれる。その際、耕作する水田や畑の状況、治安対策、出身地のつながりが考慮された。開拓団の経営は共同経営から、三年目には集落ごとの経営、四年目には四〜六戸の組（班）経営、五年目からは個人経営とされた。以上、五カ年におよぶ開拓団の村建設が完成すると、開拓団は廃止され、満州国の地方制度に沿って街村制に移行する。農業生産は開拓協同組合で行うという流れだった。⁷

では、実際青雲開拓団はどのように入植、運営をしていたのだろうか。

開拓団の団長や幹部が茨城県の内原訓練所、一九四三年（昭和十八）一月からはハルビンの訓練所で数カ月間、農耕方法や警備、経理などを学んだ。先遣隊二四人（浦添十一人）も、一九四三年十二月に沖繩県内での研修を経て渡満し、ハルビンの基幹農民訓練所で研修を受けた。両者は合流し一九四三年三月、龍江省龍江縣孫家屯^{すんじやいとん}に入植した。入植地は、駅のあったチチハル市フルギから直線距離で約三五キロ離れた場所だった。そこで



内原訓練所 満蒙開拓平和記念館提供

7 満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』
一九八〇年全国拓友協議会復刻
四一四―四一五頁

本隊受け入れの準備に着手した。団が建設したのは本集落のみで、残りは満州人が元々住んでいたが、開拓団入植のために買い取られた五集落、孫家屯、哈拉袋屯、長山堡、興隆堡、徳発屯で、開拓団はそれぞれ割り当てられて居住した。本隊第一陣で長山堡に入植した真壁村出身者は「私たちが入った集落は、元々満州人が住んでいた所であり、家も満州人の物を国が強制的に幾らかで買い取って、彼らは遠い所へ移動させられていた。彼らは笑顔で私たちを迎えてくれたが、本心は嫌だったと思う」と述懐している⁸。

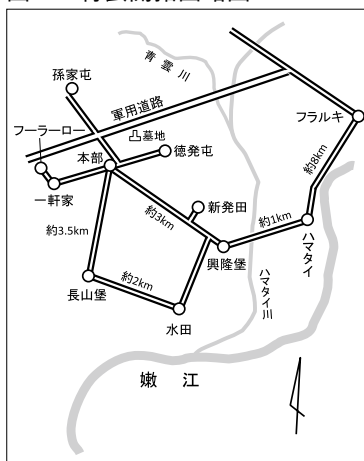
青雲開拓団の本隊呼び寄せは、一九四四年（昭和十九）一月から本格化。浦添村出身者は、大きく四グループに分かれ、那覇港から鹿児島、下関、釜山、フラルギという経路で、青雲開拓団の入植地に入った。第一陣は一九四四年一月ごろ、浦添村西原の人々を中心とした先遣隊の家族二十七人、第二陣（一九四四年一月二三日出発―二月六日到着）は沢岬出身を中心とした五六人、第三陣（一九四四年五月二七日―六月一〇日）、二五人、一九四四年八月の越来開拓団との同行五人、最終である第四陣（出発日不明―一九四四年十二月三一日着）が十四人となっている。

最終的に、青雲開拓団は沖縄から四九一人、団員不足を補うために他府県在住の浦添村や真壁村出身者四一人が参加した。途中入団、団出生者を含めると、開拓団は一二七世帯五九九人、最も多かった真壁村が七〇世帯、次いで浦添村三九世帯、知念村二世帯、首里市六世帯、宜野湾、伊江村、那覇市、佐敷村、鹿児島市、与那城村、東風平村が各一世帯、不明三世帯であった。

団長、指導員、先遣隊らの入植当初は、孫家屯と造成中の本部集落の二集落だった。本隊が到着し始める一九四四年には、興隆堡、長山堡、徳発堡に居住。さらに同年一〇月にフーラーロー、一九四五年春までに水田集落が形成された。発田堡の成立時期は不明だ。

浦添出身者は、本部、孫家屯（指導者、先遣隊）、興隆堡（浦添村西原、当山出身者）、徳発堡（宮城、仲西、勢理客出身者）、団経営が班経営に移行する時点で形成された水田集落（沢岬出身者）の五集落に居住したと考えられる。集落の拡大は開拓団の本隊受け入れ、集団農耕から班へ、個人経営へと規模拡大と団経営の変化を表していた。

図1 青雲開拓団略図



『青雲開拓団誌』116頁をもとに
宮内久光作成。



内原訓練所 満蒙開拓平和記念館提供

8

新垣梅三さん証言「満州開拓とシベリア抑留」『糸満市史資料編七 戦時資料下巻』糸満市教育委員会 一九九八年

入植から五年間は、開拓団は満州国の地方行政組織の例外である「開拓団」という自治法人として運営した。団は一つの村の機能を果たすため、日本と満州の補助金を受け、必要な施設を建設した。

外界との連絡のため最寄りの町に弁事所が設置された。弁事所は、省や県との連絡や郵便物受け取り、満州拓殖公社との連絡、団員が用事で都市へ出る際の宿泊所の役割も果たした。青雲開拓団は一九四四年二月、開拓団最寄りの駅があるフルルギに、弁事所を設置した。同四月からは臥牛吐^{オニユウト}開拓団の弁事所と共用となった。

診療所は一九四四年七月に本部事務所に設置された。赴任したのは田中耕医師だった。診療所は、開拓団ごとに一つ作られる計画で、一二五〇平方メートルの規模のレンガ建診療所、普通病床五、特殊病床・伝染病床・隔離病床五〇床を備えると計画された。二年目に仮診療所を作り、三、四年目には本建築完成を目指した。¹⁰ 青雲開拓団の診療所がどれほどの規模で建造されたか、詳細は不明だ。

満州国における日本人教育行政は日満の条約によって日本側にあり、各省の学校組合が、日本同様の仕組みである国民学校、青年学校を経営した。実際の運営は開拓団にまかされた。満州全土では、一九三七年（昭和十二）には国民学校九校児童数四九五人だったが、一九四三年（昭和十八）には五〇二校四万一六二六六人。青年学校は一九三九年（昭和十四）時点で、一〇校生徒数二八〇人が、一九四三年には二九三校二万二八八九人になっている。教師養成が満州内では間に合わなかったことから、開拓団の母村の学校から転出する例が多かったという。¹¹

青雲開拓団では一九四四年五月、在満青雲国民学校が開校している。地元の家を改築した施設だったという。真壁国民学校から招聘された校長（五年〜高等二年担任）、訓導（一年〜四年担任）の二人が、二部の複式学級を教えた。一九四五年には一〇〇人前後の児童が在籍したと見られている。

喜舎場宗景さんは「良い話はあったけれども、学校なんかは一年生から、六年生まで全部ひとクラス。教育をしっかりと受けられなくて、大変だったなあと、思ったりするときも

9

満州拓殖公社は、日本政府、満州政府、満鉄会社などの出資で一九三七年（昭和十二）八月に設立された。事業の目的を①移住者に必要な施設と経営、②移住者への資金貸し付け、③移住用地の取得・管理・分譲、④移住に必要な事業をする会社や組合への出資などとしている。満洲開拓史刊行会『満洲開拓史』一九一頁、一九八〇年。

10 満洲開拓史刊行会 前掲 四二八頁

11 満洲開拓史刊行会 前掲 四二八頁



長山堡の村落標識（2012年）又吉盛清撮影



興隆堡の村落標識（2012年）又吉盛清撮影

ありますね」と振り返る。

農耕と暮らし

一九四三年（昭和十八）三月、青雲開拓団が現地で農耕に着手して以来、日本敗戦による逃避行で村を離れるまで、開拓団は二年半余の間に二度の収穫と二度の厳冬期を村で経験した。

四月一〇日ごろ、長い冬の間に積もった雪が頃合いに溶け始め、満州の大地が春を迎える時期が、農耕開始の時期となった。開拓団の農民たちは、馬の後ろにスキを付けて、雪を溶かし、広大な大地を冬の眠りから目覚めさせるように耕していった。満州での農業は一年一作、そのため土地は肥沃だった。大豆とトウモロコシが主作物で、他にはコーリヤン、粟、米、バレイシヨなどが作られた。

満州での農耕の様子は、前田正敏氏の『青雲開拓団誌』¹²の次の文章が詳細に伝えている。

四月頃になり、耕地の表面の水が一〇〜二〇センチぐらい溶け始めた頃に、プラオという大型の改良犁^{すき}を、牛や馬二頭または三頭に引かせて耕起する。直線にすき起こす長さは、三〇〇〜四〇〇メートルからで、長い畑では一〇〇メートルも直進して折り返しを重ねて、一日に三〇アールぐらいも耕起出来た。耕起を終えた畑には次はやはり畜力でハーローと呼ばれる碎土機械で荒く鋤き起こした土を碎いてゆく。（中略）そのあと溝に播種機を使用して、大豆、トウモロコシなどの種子を蒔く。種子をまきおわるとまたハーローを使って溝を崩して覆土した後、ムートコンジョという丸太のローラを家畜に引かせて耕地の上を全面鎮圧する。

農耕用の家畜を使っても、一つ畝が一〇〇〇メートルにもなる広大な畑を耕すには、午前中をかけて一往復するのがやっとだったという。人々は、夏の午前四時ごろの夜明けとともに作業にとりかかり、夜遅くまで働いた。植えたばかりの種を狙うカモを追いつた



リージャンという農具で耕す様子
満蒙開拓平和記念館提供



岡谷郷開拓団 北安省
満蒙開拓平和記念館提供

12 前田正敏『青雲開拓団誌』一九八六年

り、作物が育ち始めるとすぐに草取りに追われた。八月になると小麦がたわわに実った。大豆は大人の背丈を越えるほどに成長し、一茎に二〇、三〇もさやが実った。九月には収穫の時を迎える。脱穀は、広場で馬にローラーを引かせた。¹³四月から九月の間、雪が降り始めるまでの農繁期に、懸命に農作業に打ち込んだ。

喜舎場宗英さんは「馬で大豆を植えた。土は柔らかかった。トウモロコシ、コウリヤン、個人経営になったら土地はもらえるが、まだなっていなかった。みなで収穫。売ることはなかった」と当時を振り返る。

當間信子さん（八一歳）と嘉数キク子さん（七六歳）姉妹が一九四四年に渡満した時、開拓団は、当時四世帯で構成する班経営に移っていた。翌年、水田集落に居住した。さらに次の年には個人経営に移る予定だったという。満州での農耕方法は沖繩とは全く違っていたことが印象深かったという。米を作るにも、沖繩で作る苗床は作らずに、稲を田んぼに直接に入れて、芽が出るのを待った。芽がでると、それを蒔いた。水田集落は収量も高かったため、希望者が多かった。

また、収穫時期になると田んぼの水は自然に川に戻るようになっていたという。¹⁴

当時十八歳だった翁長ヨシ子さん（八二歳）は、出発前から女性には牧畜をするのだと聞かされていた。「あっちに行ったら、みなは農業だが、女は羊を飼い、糸をつむと。親ぬちやーも、行く人達もそう言っていた」。

開拓団で行われた農耕、荷馬車による輸送に、馬は欠かせない家畜だった。そのため入植当初から、満州開拓公社など受け入れ機関によって用意された。開拓当初、馬と牛は団体で飼育した。馬は満州馬、牛は朝鮮牛だった。¹⁵馬の確保は開拓団が本隊を受け入れ、規模を拡大していく上でも重要だった。當間さんと嘉数さん姉妹の父親は、開拓団が個人経営になれば、当時九州に疎開していた親族を呼び寄せたいと考えていたという。そのため、父親は農耕馬を譲りうけようと、別の開拓団村を訪ねるなどしていた。

豚や鶏は各世帯で畜舎を設け、食用とした。飼いやすく繁殖もたやすかったため、「ごはん」と豚肉がいっぱい食べられることは、入植間もない開拓地にしては毎日が豊かな食生



緬羊 勃利訓練所 東安省
満蒙開拓平和記念館提供

13

満州開拓座談会『なあぐすくむら誌 系満市字名城誌』なあぐすくむら誌編集委員会 一九八八年

14

糸満出身の青雲開拓団員宜野座仁一郎さんは水田集落の農耕について「田んぼも畑もたくさんあった。収穫時期には水は川に自然に戻ってしまう。便利な作りだった。朝鮮人が作ったらしい」と証言している。沖繩タイムス「満州んじい 生ちてい シリーズ沖繩人の経験」二〇一一年十一月二五日―二〇一二年三月十八日。

15

なあぐすくむら誌編集委員会 前掲三三四頁

活であつた¹⁶」という。

一方で、開拓団が自立するまでに行われる政府補助、入植者の借入金は後々返済しなければならず、農耕はそれを見据えて軌道に乗せなければならなかった。

開拓団が入植した集落は元々、地元の人々が住んでいた場所だった。家屋は、粘土をレンガ状に固めた「ドビンス」を積み上げて作られ、台所を間に挟み、両側に部屋があった。一軒の家に数家族で入居した。

主食は当初、配給された白米だったが、団員が増えるとコーリャン、トウキビ、トウモロコシを混ぜたものを食べた。「何時も雑炊でチャーチマーとか、ミーチャーマーなどといっていた¹⁷」。満州開拓公社の配給は返済しなければならなかったが「二年目ぐらいからは収穫はあつたが、まだ満拓に借りた分を返済する余裕はなかった¹⁸」という。開拓団補助には日本政府、満州国、学校組合補助の三種類があつた。補助金は、渡航費を除き全て満拓を通じてなされ、貸付金として弁済した。日本政府補助は、渡航費、先遣隊現地訓練費、移動旅費、食費、個人施設の全額。公共施設、共同産業施設、本部事務費、診療所補助は満州国補助と折半だった¹⁹。

本部では共同で豆腐作りも行われた。数日に一回当番がまわってきた。数軒分をまとめて作った。

また、開拓団の村を流れていたハマタイ川はフナ、スッポン、ウナギなどがおり、冬にはそれを干物にしたものがタンパク源となった。喜舎場宗景さんは「川の魚はあつた。特に満州開拓団の連中は、海の魚がなんか知らんが、送られてきたんです。政府からかわからないが。ちよつと贅沢でしたね²⁰」という。

両親ときょうだい七人で渡満した宮城高進さん（七八歳）は、一年目、本部集落で過ごし、翌年には水田をつくるハマタイ集落に移った。そこから青雲国民学校に通った。開拓団には商店はなく、買い物は街へ出かけた。フラルギまでは約八キロあつた。「野菜とかトマトとかスイカとか作った時、馬車に積んで売りに行ったりしました。その帰りには必要なものを買ってきた」。



岡谷郷開拓団 北安省
満蒙開拓平和記念館提供

16 前田、前掲 二四頁

17 なあぐすくむら誌編集委員会 前掲
三三八頁

18 照屋佳信さん証言「青雲開拓団に参加
して」『糸満市史資料編七 戦時資料
下巻』糸満市教育委員会 一九九八年

19 満州開拓史刊行会 前掲 四一三頁

宮城さんの父親で、当時六〇歳を過ぎていた高牛さんは、アメリカで複数のレストラン経営に成功し、日米開戦をきっかけに新天地を求め満州にやってきた。高進さんは、開拓精神旺盛な父親から、満州の自然の中で生きる術を学んだという。小さな体で馬を一人前に乗りこなした。開拓団では夜になると、遠くにオオカミの遠吠えが聞こえた。家畜を狙われ、時には原野でおそわれることもあった。オオカミが接近したときの防衛と戦い方、夜盗に襲撃された場合の反撃方法も教えられた。きょうだい五人の長男として家族を支えるのは自分だという思いを強く抱いたという。

厳冬

開拓団の村では、収穫が終わった九月ごろから、零下三〇℃～四〇℃にもなる厳冬に備えるための準備で忙しくなった。

「ドビンズ」を積み上げてつくった家の窓は空気を逃さないように小さく、窓も戸も二重に作られていた。オンドルで暖をとった。床下にしつらえた窯で燃料を燃やすと、暖められた空気が床下を循環した。時には、敷いた布団が焦げてしまうほどの熱をもっていた。しかし、それを維持する燃料確保が大変だった。夏の間から、原野でまきの代用となる洋草^{やんそう}を刈り込み、家の前に山のように積んでおく。さらに、収穫後の農作物もいらぬ部分はないほど活用された。トウモロコシの皮やひげも、貴重な燃料として保管された。開拓団では、あらゆる物を燃料として備蓄する必要があった。

一〇月から翌年三月までの期間は、外での農作業ができない。その期間は、翌年の農作業の準備や加工の時間となった。

全てが凍っていく中で生活だった。地中にはった食糧保管庫にジャガイモやタマネギなどを入れておくと、そのまま凍るため、保存することが出来た。住居のドアが凍りついて、ツルハシで氷を砕いて開閉した。雪と氷の生活乗り越えるため、工夫もこらした。宮城高進さんは「夏の間に玄関前に大きな穴を掘った。冬になると洗いの水はその穴に捨てていった。その穴がないと、捨てた水が氷の山を築いてしまうから」と話す。六歳



水曲柳開拓団 吉林省
満蒙開拓平和記念館提供



青雲開拓団本部の前で
1940年代 宮城高進提供

だった嘉数キク子さんは、母親が病弱だったため台所仕事を引き受けた。だが洗い物をした水を外の捨て場に運ぶのが大変で、困ったという。コウリヤンを洗うと水は赤く染まり、米をとくと水は白く濁った。家の外には赤や白、さまざまな色のついた氷が「虹のように」固まってしまった。昼間の井戸は、水を何回も汲むため凍らない。しかし一晩越すと、夜のうちに表面が凍り、水がくみ上げるのが難しかった。台所のカメに、ためた水も朝には凍った。火に掛けて、氷を溶かして使った。

地元の人々

青雲開拓団の人々は地元の人々を労働者として使用したり、交流から結婚式やお葬式に呼ばれたりということもあった。喜舎場宗英さんは「中国の人との交流はよかった。みなおとなしかった。言葉はわからないが、あっちの結婚式に呼ばれたこともあった」と振り返った。

喜舎場宗景さんの家には、地元の青年が日本語を学びにきた。「友達になって、小さい我々もかわいがってね、変わったものを見せてやろうと、その友達が葬式を見に連れて行つた」。喜舎場さんは、満州での開拓団の人々の胸中を「二等国民」という言葉で表現した。「行くときは一等国民なもんだから、向こう着いても、行く道中でも堂々たるもの。地元民が、日本人が馬に乗って来たら、水汲んできてあげるんですよ。馬にも。で、このようにウートートウするんです」。地元の人々が開拓団に対してとった態度を振り返る。そのようなこともあり、開拓中の人々は、平時においては、地元の人々に良い印象を抱いていた。

だが、開拓団の人々が目にする地元の人々は態度とは違い、内面は複雑な思いを抱いていたに違いない。

満州建国のスローガンは「五族共和」。日本人、白系ロシア人、満州族、漢民族、朝鮮人の融和を意味した。日中戦争の長期化で、日本が新たな資源確保のためアジア太平洋戦争に突き進んだ結果、石炭など重工業に重点を置いていた満州の長期経済計画は崩れた。食

糧増産など対日協力を強いられ、日本から開拓団が次々と送られた。日本から開拓団を受け入れるためには当時、耕作地買収は避けるべきだとの意見もあったが、結局、未耕地では足りなかった。関東軍や満鉄公社が地元の人々の土地を廉価で強制的に購入。一九三九年（昭和十四）時点で移民用地の約二割が地元民の耕作地だった。地元の人々は満州内で転住、もしくは労働者に没落していった。本来、地元の人々の土地だった耕作地を開拓団が耕すのを地元の人々は複雑な思いで眺めたに違いない。

日本の敗戦と同時に、開拓団が村から避行していく中で、暴徒となった地元の人々が、混乱する開拓団の人々から、略奪行為をしたり、子どもを奪ったりしたことは、それまでの押さえられていた複雑な思いが爆発した結果だったとも考えられる。（謝花直美）

四 戦争と引揚げ

一九四三年（昭和十八）以降、日本軍は南方に重点を置いた配備をとっており、満州の関東軍から南方や沖縄、日本、中国へ次々と部隊が抽出されていた。最高で約七〇万人いたという関東軍の兵力不足を補うため、開拓団二七万人の中から男性十五万人が召集された。満州での作戦方針は満州全土での持久作戦へと変更された。しかし、約一〇〇万人の兵員を擁するソ連軍が一九四五年（昭和二十）八月八日、日本に宣戦布告し、三方向から満州に攻め入った。大本営はソ連軍の兵力増強を受け、持久作戦の対象地域を満州全土から南満州の要所に変更、日本本土の作戦を有利にする方針へと舵を切った。「根こそぎ動員」された開拓団は、後には女性や子ども、高齢者だけとなり、軍の後方に取り残される結果となった。

青雲開拓団からも、一九四五年八月十二日までに六九人の男性が現地召集された。五九人の開拓団の一割以上にあたる男性が開拓団を離れたことになる。日本の敗戦後、一部の人々は開拓団へ戻ることができた。しかし、徴兵で家族と離ればなれになった人々は、戦闘、シベリア抑留と苦難の道を歩まざるをえなかった。

真壁出身の青雲開拓団員だった宜野座仁一郎さん（九四歳）は一九四五年一月に召集さ



水筒 舞鶴引揚記念館提供

れた。それまでも徴兵され前線で闘った経験はあった。しかし「あの召集だけは嫌な気分だった」という。「すでに出征していた弟二人の妻子が、私を頼りに開拓団と一緒に来ていた。出征で家族を守る者がいなくなった²⁰」。家族を置いていく苦しみを抱きながら龍江省近くの部隊に入隊した²⁰。

避難命令

一九四五年八月九日、ソ連軍が国境を越え、満州に進軍した。青雲開拓団が退避命令を受けたのは、それから二日後の八月十一日早朝。団員はいったん本部に集結した。チチハルへ通じる鉄橋が、同日正午爆破されるとの連絡を受け、そこを突破するために、約五〇〇人の団員は、持てるだけの荷物をもち、馬車を連ねて、約五〇キロ離れたチチハルへ向け、夜を徹して歩いた。

當間信子さんら水田集落にいた開拓団員は本部へは行かず、ハマタイ集落を通ってフルギへ向かい本隊に合流した。

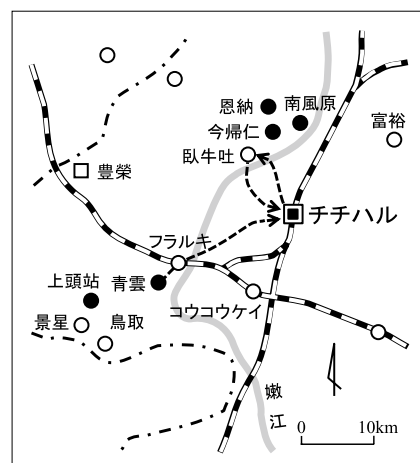
青雲開拓団の水田集落にいた當間信子さん・嘉数キク子さん姉妹の父親は既に召集されていた。残された家族は病弱だった母親のシゲさん、当時十四歳の信子さんを筆頭に五人の子どもだった。信子さんが三歳の弟を背負い、キク子さんが末の乳児のオムツを入れたリュックを背負った。一人で歩けない母親に信子さんと次女が肩をかけた。

「水を飲みたい――」。懇願する弟妹のために、信子さんが、月明かりで地面にわずかに残る水で布をしめらせた。弟妹の口に含ませた。「汚水かもしれない。何とも言えない気持ちだった」。歩みが遅かったのか。気付くと周りには誰もいない。闇にオオカミの遠吠えが響く。「ここで死ぬのか」。地平線のかすかな明かりを目指した。

たどりついたのは夜明け前。開拓団は出発の準備をしていた。信子さんは必死に母親を乗せてくれる馬車を探し出した。それからは馬車をつかんで歩いた²²。

しかし、チチハルの県公署では、開拓団最後となる徴兵で二三人の男性が開拓団を離れ

図2 青雲開拓団の避難経路



宮内久光作成

20 沖縄タイムス 前掲 二〇一二年十二月三十一日

21 大城ヨシさん証言「満州開拓団の終戦」『糸満市史資料編七 戦時資料下巻』糸満市教育委員会、一九九八年

22 沖縄タイムス 前掲 二〇一三年一月二十六日

た。他の開拓団もチチハルへ殺到する中、「都会では却ってあぶない」という判断もあり、青雲開拓団はチチハルの北西方向にある臥牛吐開拓団の村へ避難を決めた。同開拓団は恩納村、今帰仁、南風原村がそれぞれ送出した沖繩初の分村開拓団だった。

青雲開拓団が臥牛吐開拓団にいたのは約一カ月。各家庭に分散し宿泊した。「本部の建物なんかに入りました。そこに夫が帰ってきて、少しはほっとしましたが、いろいろと混乱しているようでした。戦争はもう終わったからと、夫は帰されたとのことでした」。

「防寒服を着て血みどろになった男の人が臥牛吐に逃げてきた。団が満人に襲われて、女の人たちは連れさられて、男は自分だけが生き残ったと言っていた。戦争に負けたと聞いたのは、臥牛吐に来てからだ。沖繩が散々やられたと聞いた時、ただただ涙が流れた」²⁴。団員たちは臥牛吐開拓団で日本の敗戦、遠く離れた沖繩の惨禍を知り悲しみ、満州で自らに降りかかるとする危険に怯えた。開拓団では嚴重な警備態勢をとって警戒していた。

九月二六日、ソ連軍の戦車が臥牛吐開拓団に入ってきた。本部前の開拓道路にはずらりと戦車が並んだ。その時の恐怖を南風原出身の臥牛吐開拓団員、大城芳子さん（八二歳）は「見たこともないロシアの兵隊は大きく目は青く大変怖かったです。その後、男は本部に集められ、女と子供は家に残るように言われました。男は皆殺すかも知れないと思いました。それからロシアの兵隊が各家にきて目をキョロキョロさせて何か話ながらすぐに出ていきました。私たちは震えて座っていました」²⁵。

ロシア兵は各戸を回り、武器を没収した。わずかに残っていた男性が連行され、持っていた銃などの武器は放棄させられた。残された人々はチチハルへの引き揚げが決まった。引き揚げ準備の最中に、現地の人々の襲撃を受けた。「準備していると、窓から現地の人飛び込んで来て、物を奪おうとした。ヤリを手にした人もいた」²⁶。空砲を打ち鳴らし、撃退した。それまで地元の人々とは交流することもあったが、敗戦で状況は一変した。「琉球人は日本人とは違うと言っていた人もいたが」との証言もあるように、敗戦の前にはそれまでの関係も吹き飛んだ。

23 大城ヨシさん証言 前掲

24 神里カマさん証言 前掲

25 大城芳子さん証言「苦難の満州引揚」
『満州記 残留孤児なく「強制送還」』

26 沖繩タイムス 前掲 二〇一三年一月十六日

臥牛吐と青雲の二団からなる約一三〇〇人は着の身着のまま、持てるだけの荷物を持って、二〇〇台余りの荷馬車を連ね、チチハルまでの数十キロを歩いた。「ダバイ、ダバイ（早く）」。一行を監視するソ連兵は急かすだけでなく、避難民の所持品から金目の物を奪いとった。腕時計や革製のバンド、万年筆。抵抗すればどうなるかわからず、人々はおとなしく差し出すほかなかった。

喜舎場宗景さん（八〇歳）は当時一〇歳、チチハルまでの道のりを徒歩で歩いた。馬車には荷物を乗せ、歩くことができない幼児と高齢者を乗せた。襲撃こそなかったが、父親は革のベルトを奪われた。「ロシア兵にバンド外しなさいってことで、外して、もうあげるしかないから」。「馬賊」と呼ばれた集団による襲撃も、避難民を恐れさせた。口の中の金歯すら抜いてさし出すように強要されると聞いていたからだ。だから、移動の際には「絶対笑うな、口も開けないで、歯見せないで」と注意が出回っていた。「眼鏡とか（奪われて）とつくに持っていなかった、時計は持っていたけど、全部取られましたね」。満州で「一等国民」として羽振りよく振る舞った日本人への報復なのだろうかと考えざるを得なかった。

チチハルの収容所

命からがらたどり着いたチチハルへの移動は、開拓団の新たな苦難の始まりだった。チチハルには、満州各地から三六開拓団二万七〇〇〇人も避難者が殺到していた。公共的な建物や中学校、会社の倉庫や社員寮、あらゆる建物が避難してきた人々を収容する施設に転用された。青雲と臥牛吐の二団以外にも、沖繩県が送り出した上頭站かみとうじやん越来開拓団もチチハルに避難してきていた。一行は一九四五年（昭和二〇）、敗戦の年の厳冬を経て、翌一九四六年、沖繩引き揚げまで約一年間をここで過ごした。

青雲開拓団や臥牛吐開拓団は、チチハル中学校に収容された。臥牛吐開拓団の宇琉磨在満国民学校に勤務していた教師が同中学校に転出しており、その仲介で受け入れが決まったという。二階建て校舎の一つの教室には、五〇～八〇人の避難者がすし詰めに収容され

た。家族や親族でひとかたまりに集まって、コンクリートの床に植物を編んだアンペラを敷いた。荷物で囲い、居住空間を作った。しかし、横になって体を十分伸ばすこともできず、皆足を曲げたまま、座っているのが精一杯だったという。外の気温が零下三〇℃になると、暖房もない室内は凍るような寒さだった。綿入りの分厚い防寒着を着込んでいても、冷たいコンクリートの床から冷気が伝わってきた。

収容所では、運動場に井戸を掘り、炊事場を作り、便所を作った。

避難民は当初、開拓村のように収容所の生活を団体で運営し、各自が持参していた食料を供出、共同炊事でまかになった。避難の時に馬車をひいた馬も、一頭ずつぶして食糧にせざるをえなかった。日本人会の配給もあったものの、食事は一日二回、コウリヤンおにぎりとかぼちゃ一切れといった内容で、かろうじて命をつなぐのがやっとだった。

避難所には、風呂はなく入浴はできない。服の縫い目には大きなシラミがびっしりと巣食った。服をドラム缶で沸かした湯で消毒しても、すぐにシラミは沸いて、元の木阿弥だった。不衛生な環境で、避難民の間では発疹チフスが流行した。

宮城高進さんは社員寮・中央荘²⁷に移った後も毎日、チチハル中学校の収容所を訪ねた。

厳冬の氷点下二〇〜三〇℃になると、校舎入り口にはぶ厚い氷が固まっていた。建物の中に入っても、中はまるで冷蔵庫のように冷え切っていた。教室では、寝ている人をまたがないといけないほどだった。教室はすし詰めでも人々の体温で暖まることはない。壁際の人、壁から伝わる冷気で凍傷になった。コンクリートの冷たい床は、直に触ると、瞬時に手をはねのけなければならぬほど冷たかった。発疹チフス²⁸にかかった病人は、医療も薬もなく、ただ防寒服を着て横たわっているだけだった。廊下には、病人の排泄物を入れたおけやたらいが並べられていた。

人々は眠るように亡くなっていた。喜舎場宗英さんは六人で開拓団に参加したが、結局二人が亡くなった。チチハルでは二歳のきょうだいを亡くしている。喜舎場宗景さんは「チチハルの中学校では、二人とか、三人とか、多いときで五人も亡くなった」と振り返る。

チチハル中学校の収容所にいた南風原出身の臥牛吐開拓団員の女性は発疹チフスを患っ

28

発疹チフスは、患者の血液を吸ったシラミなどを媒介として広がる感染症。高熱が続く、頭痛や意識障害などをおこす。戦争や飢餓などによって引き起こされ多数の死者を出す。第一次世界大戦では欧州で数百万の死者が出た。

27

チチハル中学校にいた青雲開拓団の内、浦添出身者十七家族六二人は後に日本人会の世話で日本人の居住者が多い地区にあった杜宅・中央荘へ移った。元々寮に住んでいた家族が女性や子どもだけになっており、開拓団の受け入れは、安全対策の一つでもあったようだ。家四軒に十七世帯が分散し入居した。宮城高進さんの家族は、一部屋に四世帯一〇数人で入居した。「それでも中学校よりは居住空間は広かった」という。



防寒長靴
舞鶴引揚記念館提供



防寒帽子 舞鶴引揚記念館提供

た。高熱が続き、意識はほとんどなかった。「水飲ませて」とうわごとを繰り返していた。「病になり始めは雪が残っていた。意識が戻った時は草が青々と伸びていた」。病は治癒したものの、髪が次々と抜けた。チチハル市内の松本組倉庫にいた越来開拓団の男性も生死の境をさまよった。「食べてもすぐに吐き、下した。回復した時、一人では立てなかった。友達に体をささえられてもがくりとくずれおちた²⁹」。

収容所から若い女性が外に出て働くことは危険だった。真壁出身の青雲開拓団員、新垣ハツさん（九〇歳）は三カ月の長男とともに収容所にいた。「ごはんも汁もおわん一杯ずつを大人二人で分け合った。子どもの分はなかった」。新垣さんの弟は食事時になると姿を消した。「姉さん、僕の分も食べて。僕は浦添の青雲開拓団で食べられるから」と返事した。すぐにわかるうそは、姉への気遣いだった。「私は飲まずお乳も出なかった。子どもに水ばかり飲ませていた」。長男は一〇カ月の時に亡くなった³⁰。

同じく真壁出身の青雲開拓団の金城善清さん（八五歳）の母親は出産直後の体で、子どもを助けようと無理を重ねた。「栄養失調になった長女のために（民間療法で）母は自分から血を抜いて輸血しようとした。だけど産婆が採った血は、寒さで凍り、輸血すらできなかった」。金城さんの母親は長期間、歩くことすらおぼつかない状態が続いた³¹。乳のみに抱えた母親たちは、塩をなめ、水のみ、なんとかお乳を出そうと懸命だった。だが、乳児たちは次々と命を落としていった。

當間信子さんと嘉数キク子さん姉妹は、父親と九カ月の妹を収容所で亡くした。母親は栄養失調で母乳がでなかった。コーリヤンがゆで命をつなごうとしたが、結局妹は栄養失調で亡くなった。

亡くなった人々の遺体は、すぐに埋葬することは出来なかった。厳冬で地面が固く凍っていたためで、埋葬する作業が重労働だったからだ。遺骸は敷物アンペラに巻いて、埋葬されるまで、校庭に置かれた。アンペラでくるまれた遺体から、盗人が衣服をはぎ取ったり、時に野犬が引きずっていくという耐え難い状況が発生した。遺体を火葬するにもマキを買うお金がなく、すぐには火葬することもできなかった。

29

大城芳子さん、外間元安さん証言 沖縄タイムス前掲 二〇一三年二月十六日

30

沖縄タイムス前掲 二〇一三年二月十七日

31

沖縄タイムス前掲 二〇一三年二月十七日

チチハル中学校では青雲開拓団一一八人が死亡した。浦添村出身三七人、真壁村七〇人、その他の出身十一人となっている。中央荘では五人が亡くなった。

生きるための労働

ソ連軍は満州から、自国の復興に役立てるためさまざまな物資を持ち去った。「物狩り」と呼ばれた満州の工場施設や資材、民間人の物資などありとあらゆるものを持ち去った。物資の全容は不明だが、一般的には満州の産業施設の四割が持ち去られ、四割が破壊されたとされる³²。

チチハルには関東軍の巨大な倉庫があった。ソ連軍は、関東軍の衣服や食糧、酒などさまざまな物資を、ソ連領内に持ち去った。その労働力として日本人が使役された。収容所に入っていた開拓団の男性たちも使役にかり出された。

一九四六年（昭和二一）六月に使役に出た沖繩市出身の上頭站越来開拓団の団員は「ソ連軍の徴用は、日本人会から各収容所に来た」と話す³⁴。九〇キロの米俵を開拓団から使役作業に出された四人一組で貨車いっばいに詰めこむ重労働だった。今帰仁出身の団員は「給料はなかった。でも、いわば沖繩の『戦果』みたいなもので、リュックに食糧を詰め込んで持ち帰った³⁵」。中には、中味をわざとこぼし、袋だけをこっそり持ち帰り、洋服用の布として市場で売った人もいたという。

ソ連軍の使役以外でも、開拓団の人々は、収容所を抜け出て、いろいろな仕事をして、生きるために稼いだ。真壁出身の青雲開拓団の金城善清さん（八五歳）は薪をとって市場で売り、時には発電所での薪の積み替え作業に雇われた。現地の建築資材である土れんがの「ドビンズ」作りも請け負った。「一カ月の仕事。三人で野原を耕して水を入れ、草を入れ混ぜる。その土を箱型に入れて成形し、乾燥させる。乾燥するとれんがとして詰めるようになる」。賃金でアルコール度数が四〇度もあるパイチュウを飲んだのが思い出だ。手りゅう弾づくり、刑務所の掃除、機織り工場の炊事手伝い、飴玉づくり、天然氷売り³⁶。開拓団の人々は、生き延びるためにありとあらゆる仕事についた。働くために男装を

32 戦後強制抑留史編纂委員会『戦後強制抑留史第一巻』二〇〇五年 二一三頁

33 「満州」各地にあった関東軍倉庫には武器弾薬から米、しょうゆ、油、砂糖など食糧の補給物資が「二年間戦えるほど備蓄されている」と言われた。ソ連軍は、これら物資や工場施設などを運び出すために、開拓団の避難民らを使役した。

34 仲宗根繁雄さん証言 沖繩タイムス前掲 二〇一三年二月一〇日

35 新城勝さん証言 前掲

36 沖繩タイムス 前掲 二〇一三年二月一〇日

して使役に出た女性もいる。³⁷

宮城高進さんは成人男性に混じり、九歳だったが、ソ連軍の使役で関東軍倉庫にいった。年をとった父親に代わり、一家を支えるために必死に働いた。

七歳の弟と燃料コークスの燃え残りを一粒ずつひろった。やがて、チチハル中の工場のゴミ捨て場を回るようになった。燃え残りがまとまって捨てられていると知恵をつけたからだ。「集めたコークスを中国人の商人に売った。子どもだからとはかりの目盛をごまかすから、中国語でちゃんと交渉した」。「マンマンレー（ゆっくり）」「クワイクワイレー（急いで）」。生きるために覚えた地元の言葉だった。夜がとつぷりと暮れるまで働いた。コークスを売っても得られるのは一日八〇〇〜一〇〇〇円ぐらい。それでも「発疹チフスにかかっていた父ときようだいの栄養にと一斤二五円の肉を買った。人参、塩、みそを買うのがやっとだった」。中国人から仕入れた豆腐をおけにいれて天秤棒で担ぎ、売り歩きもした。産業維持のため「留用」³⁸され待遇の良かった技術者らの日本人家庭を訪ねた。「豆腐いりませんか」とドアを叩く。戸口があくと、一緒に回った姉がさつと豆腐を差し出した。厳冬には豆腐のおけには薄氷がはった。二重に手袋をしても忍び込んだ外気は針で刺すように痛い。素手で豆腐を取り出した。鼻の孔は氷ができて息苦しい。まつげやまゆげも吐く息で凍っていた。売れない豆腐をかつぎ、町中を歩いた。「夜九時ごろまで歩いても売れ残った。泣きたくなかった」。³⁹

當間信子さんは医師の家庭に住み込んだ。父親は栄養失調で亡くなり、十四歳の當間さんの肩に、体の弱い母親と小さな弟妹の生活がかかっていた。

「母親を亡くしたらそれまでだ。弟妹全部を私が背負っている」。そう自分を励ました。勤め先の家族は當間さんをおかわいがった。だが、家にあつた食料をとって、訪ねてきた弟妹にそつと手渡した。「あの時のことを思うと今でも胸が痛む。悪いことをしたと。でも、そうしないと生きられなかった」。⁴⁰

37

真壁村出身の大城ヨシさんは「四、五人の女で防寒帽で髪の毛を隠して男のふりをしてその仕事（ソ連軍の使役）に行きました。偽装網とボロ布はもっていいというのでもってききました。そういうのはソートル（泥棒）市場へ持って行って売ったりしていました」前掲

38

「人を一定期間留めて任用する」という意味の中国語。日本の敗戦後、中国東北部（旧満州）にいた多くの日本人が「留用」され、鉄道や製鉄所の技術者、従軍医師や看護婦、空軍創設の教官などとして協力を要請され従事した。

39

沖繩タイムス 前掲 二〇一三年二月十一日

40

沖繩タイムス 前掲 二〇一三年二月一〇日

引き揚げ

一九四六年（昭和二一）八月、チチハルの収容所から、引き揚げ⁴¹が始まった。引き揚げは、連合軍総司令部によって一九四六年五月に再開された。米軍の船が用いられ一九四八年八月までに四回にわたり、一〇四万人が引き揚げた。一方、技術者は八路軍、国民党軍によって約一万人が留用された。

青雲開拓団の引き揚げ経過は以下のようなものだった。

引き揚げが決まると、開拓団の人々はチチハルで亡くなった家族の遺骨を持ち帰るために荼毘に付した。引き揚げと共に遺骨を持ち帰らなければ、二度とくることはできないかもしれない。男手がある家族は埋葬場所を掘りかえし遺体を取り出した。土中の遺体は、服をきたままふくれあがっていた。なけなしのお金で薪を買い集め、遺体を火葬した。棺桶の入手もかなわない。大切な家族を薪でそのまま焼かなければならない苦しみ。遺骨を持ち帰るためといえ遺族は断腸の思いだった。またそれすら出来なかった人も多く、遺骨を持ち帰れなかったことが、戦後になっても人々を苦しめた。

一年におよぶ収容所生活を生き延びた人々にとって、引き揚げは希望であった。と同時に、弱りきった体での移動はさらに死者を出すこととなった。厳しい道のりで、沖繩帰郷を果たせず、命を落とした人々も多かった。開拓団は一九四六年八月二八日、チチハル駅を出発した。乗車した汽車は、材木運搬用の貨車のようなだった。避難民はリュックにこしかけて、物資のように運ばれていた。食料は配給に頼るしかなかった。貨車はごった返し、親戚でも一緒にのるための融通すらきかなかった。「沖繩^{うちなー}んで まじゅんならやー（沖繩で会おうね）」。再会を誓い合い、チチハル駅で別の貨車に乗車した親族が、途中で亡くなってしまふ悲劇も起きた。

貨物用の汽車に乗せられ、ハルビンを経由、国民党軍と八路軍支配地域の前線⁴²、陶頼昭で下車。約一〇キロの道のりを歩き、第二松花江⁴³を渡った。第二次国共内戦のさなか八路軍と国民党軍は、米国の仲介で、交戦地域で汽車を通すために一時休戦した。避難する人々は陶頼昭で貨車をおり、約一〇キロ歩いて、河を渡って国民党軍の支配地域に入っ

41

戦後、海外からの引き揚げは民間人約三五〇万人、軍人復員が約三〇〇万人。沖繩へは一九四五年（昭和二〇）一〇月から一九五二年（昭和二七）までに約十七万人が引き揚げた。朝鮮、中国などからは浦和、大竹、佐世保、鹿児島⁴⁴の五カ所を経由した。GHQは一九四六年三月、業務を一時停止し、「非日本人登録」をした上で送還した。

42

八路軍は、一九三七年に組織された中国国民党革命軍第十八集團八路軍の通称。ゲリラ戦をしかけ、日本軍の作戦に打撃を与えた。一九二七年より内戦していた中国共産党（一九二二年結成）と中国国民党（一九一九年結成）は、日中戦争当時は「国共合作」し協力関係を結んだが、日本の敗戦後、再び内戦を開始した。満州にいた日本人は、共産党軍と国民党軍が争う中を逃避行することになる。特に八路軍を編入した共産党軍を「バーロー」と呼んで恐れられた。最終的に、毛沢東率いる共産党軍が勝利し、一九四九年、共産党による中華人民共和国が成立した。蒋介石率いる国民党軍は台湾へと撤退した。

43

河川は現在の吉林省と徳恵市の間を流れる幅四五〇メートルの川。当時は一時休戦中だったが、徒步行を含めて前線を歩く難所となった。

た。

陶頼昭は難所だった。衰弱しきった親が、子どもを連れていけないからと地元の人に渡してしまふ事例も他の開拓団ではあったという。

宮城高進さんの家族は、一人も欠けずに沖縄へ戻ろうと必死だった。

避難民の長い列に、子どもをもらうため、地元の人々がついてきた。歩き疲れた子どもを運んであげるとうそをついて、連れ去られた人もいた。子どもたちの運命は一瞬で分かれた。「僕の弟は四歳だった。父は弟についてこないと捨てられるよと、心を鬼にして論していた」。父と五人のきょうだいは、ぼろ布のように疲れた足を引きずりながら歩いた。「弟はずっと泣いていた。それでも家族と歩いた」⁴⁴。

また嘉数キク子さんは河を渡った時の様子を振り返る。「病弱な母親は歩くのが遅かった。苛立つ国民党軍兵士が母を銃でつついて急がせた。つらかった。河さえ渡れば生きられる」。対岸に渡った後も、汽車に乗るためさらに一〇キロを歩いた。

九月一日、奉天では病人が下ろされた。引き揚げにおいては、連合軍が完全に健康な人を上陸させるように指示していたためだった。移動中に亡くなった人は、開拓団が埋葬する余裕もなく、線路脇に遺体を置いていったという証言もある。さらに南下し錦州で、船出までを収容所で過ごした。この間に働いて食費を稼ぐ人もいた。十六日に青雲開拓団二六七人がコロ島を出発し、二〇日に長崎県の佐世保港に到着、検疫後の二五日に上陸している。沖縄着は九月末から一〇月ごろと考えられる。那覇港に到着後、米軍のトラックでインヌミヤードイに収容。一〇月初めに、出身地へと戻っていった。

棚原亀助さん（八一）の家族は、チチハル中学校で両親と長兄を亡くした。七人家族から生き延びたのは亀助さんと二男兄だけ。十一歳と十三歳の兄弟は「標準語を話す人についていけば間違いない」と本土の人の後を追って、日本に引き揚げた。最初は福岡県小倉市の個人施設に引き取られ、その後、東京都東村山のハギヤマ実務学園病院に移った。社



第二松花江に架かる鉄橋（2012年）
又吉盛清撮影



引揚船 高砂丸 舞鶴引揚記念館提供

44 沖縄タイムス 前掲 二〇一三年二月
二四日

会が貧しく、孤児院の生活も苦しかった。「食べ物なんかみんな大きい人にとられるさ」。嫌気がさし、逃げては戻され、施設三か所を転々とした。

親戚の存命がわかり、寺の養子になっていた兄とともに、十九歳のころ沖縄に帰った。親戚たちは亀助さんの両親の無念の死を「子どもたちだけで帰ってきた。墓だけ残して」と嘆いた。兄は母方の大伯母、亀助さんは母方の叔父の家に引き取られた。親戚の高校教師が進学を勧めたが、亀助さんは遠慮した。「人に迷惑かけたらいかんと思って」という。「戦争がなかったらまだ向こうにいたはずです。食えることには絶対に困らないから、帰ってこなかったと思います」と振り返る。二年にも満たない満州の暮らしは、亀助さんにとって、家族が元気で楽しかった時代として記憶されている。

米軍占領下の生活も苦労を重ねた。生死不明の夫を待つてがむしやりに働いた女性、働き手を失った家族を支えた青年、満州へ行くため土地を処分し裸一貫で戦後を始めた人など辛苦をなめた。

戦闘とシベリア抑留

開拓団から徴兵されて男性たちの戦中、戦後について記述する。

約七〇万人の兵力を擁した関東軍からは沖縄や日本本土、中国の戦線へ兵力を移した結果、開拓団の男性約十五万人を「根こそぎ動員」し、兵力を補充した。

真壁村出身の青雲開拓団員、宜野座仁一郎さんは龍江省近くの部隊で、飛行場などを爆破する特殊部隊に配属された。野戦経験があったためだが「任務が危険で、ソ連に攻められたら、もうだめだと思っていた」という。部隊はハルビンまで撤退、関東軍倉庫に食糧受け取りにいった時に、日本敗戦を告げる天皇の玉音放送を聞いた。⁴⁵ 関東軍兵舎は既にがら空きになっていた。ソ連軍に武装解除される前に、三八式銃の銃口に土を詰め、使えないようにする人もいた。⁴⁶ 「武装解除され、すぐにソ連軍の捕虜になった。もう彼らのいう通りにするしかなかった」。

捕虜となった日本軍兵士たちは「トウキョウ ダモイ（トウキョウへ帰れる）」という

46

沖縄タイムス 前掲、二〇一三年十二月三十一日

45

大本営は一九四五年（昭和二〇）八月十六日に関東軍司令部に戦闘をやめて武装解除し、投降するように命じた。同十七日、満州国皇帝溥儀が退位を發表、満州国は崩壊した。



葫蘆島 舞鶴引揚記念館提供

ソ連兵に追い立てられ、徒歩や汽車で西へ西へと向かった。兵士たちを待ち受けていたのは過酷なシベリア抑留⁴⁷の強制労働⁴⁸の現実だった。捕虜とされた人々は炭鉱や植林伐採、道路建設など重労働を課された。

宜野座さんは食料やテントを背負い、徒歩で行軍した。携帯した米はすぐに底をつき、ソ連軍から配られるのは動物の飼料であった大豆粕^{かす}という惨めな扱いだった。汽車に乗ったのはわずかな間、北方地域の長い昼間を日暮れまで歩き続けた。夜になると路傍にテントをはり野営する。九月とは言え、夏服では寒さを防ぐことができなかった。弱った人々が次々と死亡した。

連行されたのは沿岸州のニコリスク。身体検査後の結果、体が頑丈と判断されたのか、最も重労働だった炭鉱労働へ振り分けられた。地下数十メートルでダイナマイトで爆破し、高さ二メートルほどの坑道を作る。落盤防止に松の木の坑木を組む。のこぎりとおのでその場で加工した。「一杵八時間で作った。慣れないとそれも難しかった」。石炭を掘ると、自動運搬機でトロツコ^{トロツキ}の場所まで運んだ。時折、ロシア人監督がやってきて、頭をさわり汗をかいているかで、働いているかをチェックした。作業は死と隣合わせの危険なものだった。ある時、坑内に充満したメタンガスに照明のランプの火が引火し爆発した。被害が出たのは二四時間交代で働くグループの三番方だった。「私たちは二番方。三番方は相当死んだと聞かされた。本当にいやな仕事だった」と振り返った。

氷点下三〇℃を下回れば、ほかの仕事は中止だったが、炭鉱は二四時間操業を続けた。捕虜が少しでも不満や抵抗を見せると、営倉にいれられた。厳冬の下、氷が張り、すぐに凍傷になった。仲間が次々と営倉で命を落とした。営倉入りは、死を意味していた。

冬、凍った土は岩より硬い。死者を埋葬するため、土を少しずつ削ってくぼみをつける。そこに亡骸を横たえ、わずかな土をかぶせた。氷が溶ける季節になってあらためて埋葬しなおした。

収容所の食事は朝夕二回、パンや汁だった。時にはご飯が出ることもあったが、ごみが混ざり、茶碗半分ほどしかなかった。炭鉱に行っている間に、配給されたパンを盗まれるこ



引揚げ情景 舞鶴引揚げ記念館提供

48

ソ連は第二次世界大戦の復興についてヨーロッパ、西部シベリアはドイツ軍捕虜、東部シベリア、極東は日本人捕虜を使用することを当初から計画していた。日本軍兵士が抑留された収容所は約二〇〇カ所に上るとされる。戦後強制抑留史編纂委員会 前掲

49

ソ連は一九四五年八月十六日、日本兵を領内へ連行しないという命令を出した。しかし、同二三日、スターリンによる「九八八八命令」で、労働に耐える五〇万人の日本軍将兵を連行するという命令に変更した。ポツダム宣言（武装解除後の兵士の送還）に違反する内容にもかかわらず、同九月から移送が開始され、数カ月かけて約六〇万人が、ソ連領内の収容所へ送られた。

ともあった。そうなれば食べるものは何もない。暴力沙汰になることもあった。重労働で弱った体は階段を上る時ですら、足を自ら引きあげなければならぬほど弱っていた。

「民主教育」と称して、共産党歌を練習させられることもあった。早く帰国したい一心で、皆大声で歌い、ソ連兵を喜ばせた。辛い抑留生活を支えたのは一日も早く帰国したいという思いだった。

一九四八年（昭和二三）、日本への帰国が始まった。宜野座さんがいた収容所からは弱っていた四〇人が最初に帰国。宜野座さんも一九五〇年（昭和二五）にナホトカ、舞鶴を経由し、佐世保、沖縄へたどりついた。⁴⁹

抑留者約五七万六〇〇〇人のうち、帰還できたのは四九万八〇〇〇人。七万八〇〇〇人が死亡・行方不明となった。当時の復員局の調査によると抑留者七〇〇〇〇人の死亡原因は、病氣九五%、事故一%、不明四%だった。（謝花直美）

おわりに

浦添からの渡満者が、青雲開拓団として入植し開拓した^{チハル}齊齊哈爾地区の龍江県とはどのような土地で、そこに「満州国」が開拓民を投入した意図はどのようなことだったのか。齊齊哈爾地区は中国東北部でも元々資源の豊富な産地であった。この地は中国にとっても資源の豊富さと合わせて、政治、軍事、経済、産業と振興政策の重要な開拓地であり、早くから第一の移民地として国内からの入植者を受け入れていた。

「満州国」の建国以前から、疲弊した農村から逃散したり、一九二九年（昭和四）の世界恐慌時に日本植民地下の朝鮮総督府の移住・移民政策で送り出されたりした朝鮮人が居住していた。齊齊哈爾地区の朝鮮人の数は、一九三五年（昭和一〇）には、三八八戸一六二人になっていた。そのうちの三〇戸九九人は、後に沖縄人が入植した龍江県に住んでいる。今後の調査課題であるが、満州開拓公社の土地囲い込みや収奪の対象になって、彼らを追いついたことも考えられるのである。

日本の中国侵略は重要な国策であり、特に齊齊哈爾地区の国境守備の軍事的な位置と土

シベリア抑留に関しては、『浦添市史』にもわずかながら証言がある。県立農林学校を卒業後、朝鮮に渡り朝鮮師範学校に学び、朝鮮の公立国民学校で教員をしていた末吉常次は、朝鮮で召集され入隊した。敗戦後まもない一九四五年九月八日にソ連軍の捕虜となり、一九四六年一月まで朝鮮の捕虜収容所、その後シベリアへ移送されウチヤースト収容所に収容された。一九四九年七月まで炭鉱や森林で労働させられた。同年八月にナホトカ港から舞鶴、佐世保を経由してに帰国した。佐世保収容所で一緒になったシベリア抑留者は、浦添だけでも四人いたという。（『浦添市史』第七巻 四〇～四三頁）

地資源の豊富さは、収奪の開拓地として見逃せないものであった。その動きは早くも一九〇四年（明治三七）から一九〇五年の日露戦争の勝利後すぐに現れる。一九〇八年（明治四一）に日本領事館を設立して足がかりを築き、追って一九一一年、満鉄事務所が置かれた。一九三一年（昭和六）の満州事変前には、日本人の商工業者が一二八人になっていた。そして翌年の「満州国」建国後は、斉齊哈爾地区への日本人の居住、入植は増加していくことになる。

一九三六年（昭和十一）四月一日に斉齊哈爾が市制になると、開拓庁と各県に開拓科を置き、翌年の六月には、満州開拓公社龍江省拓殖分社を設立して本格的に斉齊哈爾地区への日本人の入植取り組みに入った。このような中で日本人の商業従事者も更に増加し、一九四一年（昭和十六）には二三七戸になる。浦添からの最初の入植はその二年後の一九四三年三月のことである。

満蒙開拓団の浦添分村計画は、「満州」の地に新しい村づくりを目指すものであった。そのため単身ではなく、家族親戚での入植が進められた。そのことが引き揚げ時の女性、子供、高齢者の死亡や残留につながったのである。青雲開拓団には、団で出生した子供が三七名いた。浦添からの引き揚げ乗船名簿にも十一歳以下が二四名いたことが記録されている。

開拓団は、日本の敗戦後は国策の救援もなく、「支配者」からいっぺんに避難民に転落して引き揚げることになった。家族を支え守る男たちが関東軍の「根こそぎ動員」の召集を受けて、防備態勢が弱くなっているときであった。ソ連との国境に近い青雲開拓団も侵攻の矢面に立たされて略奪、暴行、強制労働など受けることになる。収容所では病死、栄養失調、餓死も毎日のように続いた。残留孤児、残留女性、シベリヤ抑留もあった。

こうして青雲開拓団は、引き揚げ中に五九九名のうち二一〇名が亡くなり、帰郷できたのは三八九名であった。満州開拓移民を沖縄戦の兵役免除にと考え、窮乏した沖縄を脱して新天地で幸せを掴みたいと思ったことなどは、植民地支配と侵略戦争の国策移民では、満たされることはついになかったのである。（又吉盛清）



筆者が主宰する「沖縄大学又吉学級」と臥牛吐入植地の住民、児童生徒との交流会。学生、一般社会人、作家、マスコミ関係者が参加した。

■ 沖縄の日本復帰が生んだ沖縄系人のグアム移住 ■

仲 地 清

太平洋上のマリアナ諸島の一つ、グアムは米国領で沖縄と自然、文化、歴史などの面でよく似た島である。面積は沖縄本島の三分の二、人口約十六万人（二〇一〇年）で先住民のチャモロ人の外、米国に移住したフィリピン人、韓国人、中国人、日本人などが住む。米軍基地と観光業に依存する経済体制は沖縄とよく似ており、特に海の観光資源は沖縄のライバルである。一八九八年の米西戦争で米国領となり、戦前、日本の委任統治下にあったサイパン、テニアン、パラオ、ポナペなど日本人移民が多かった南洋群島とは違った歴史を歩んだ。

私はこの島にあるグアム大学に一九九〇年（平成二）から一九九四年（平成六）まで勤めた。グアムは私にとって第二の故郷である。それ以来、毎年一度の割で島を訪れている。私の島での一番の誇りは土産店や免税品店で働く同郷のウチナアンチュ婦人の働きぶりであった。グアムの主要産業の観光業を支えているのはウチナアンチュであった。

グアムの沖縄系人の歴史は、戦前の南北米、ハワイ、フィリピンなどとは違い、沖縄の戦後史から生まれた移民史である。戦後の早い時期、米国はアジア太平洋戦争時に協力したフィリピン人軍属に対して、アメリカで働くことができる市民権を与えた。また、沖縄で米軍基地の建設が始まると、米国民政府は親米国のフィリピン人を採用し、沖縄で働かせた。英語ができ

るフィリピン人は米軍にとっては重宝であった。その頃の賃金は米国人、フィリピン人、日本人、沖縄人の順序で、フィリピン人家庭の生活水準は高く見えた。当時、約六〇〇〇人のフィリピン人が沖縄にいた。フィリピン人はカトリック教徒が圧倒的に多かった。軍属以外の子弟向けの学校が必要となり、カトリック教団は一九五七年（昭和三二）、宜野湾市にクライスト・ザ・キング・インターナショナル・スクールを開学し、一九八九年（平成元）まで続いた。



観光客でにぎわうグアムのホテルストリート
グアム大学のフレド・シューマン教授提供

ベトナム戦争への深い介入で、国内財政が危機に陥った米
国は基地従業員数を縮小する方針を出し、一九六五年（昭和
四〇）、長年雇用していたフィリピン従業員の全員解雇を
発表した。また、一九七二年（昭和四七）五月十五日の沖縄
復帰を前に、復帰前に沖縄に来た台湾人、インド人も同じよ
うな不安を抱き、沖縄外に活路を求める動きもでた。一方、
米国民政府は親米国のフィリピンの人々には市民権を与える
配慮をした。その結果、大多数のフィリピン人は米国領グア
ム行きを選択した。中にはフィリピンへ帰国した家族もい
た。

二〇一二年（平成二四）三月、グアムの戦後移民を調査し
た。一九七二年から約五〇年も経過しているのではほとんどの
婦人は免税品店を退職していたが、六〇歳、七〇歳を過ぎた
今でも働いている婦人もいた。那覇市出身のある婦人は「仕
事に恵まれたのでグアムに来てよかった」と語った。「子供
たちに日本籍の申請をしたが、当時の日本政府は母親の国籍
を引き継ぐことを認めてくれなかった」とグアムへ来ざるを得
なかった事情も聞いた。グアムに移住した沖縄系人は八〇代
を迎え、人生も終末に近くなった。その沖縄系の葬式には約
四〇〇人のウチナーンチュが集まるといふ。現在の沖縄県人
会の世話役人は城間盛義さん（一九四二年生）と新崎康弘さ
ん（一九四七年生）。城間さんと新崎さんは那覇市出身で、
一九七〇年（昭和四五）の初め頃、グアムへ来た。城間さん
は現在、沖縄小林流空手道協会志道館グアム道場で空手を広
めている。新崎さんは免税品店などの支配人として働いてき

た。また、宜野湾市にあった国際学校キング・スクール出身
者は今ではグアム経済界で、ゴルフ場マネジャー、不動産
業、レンタカー経営など、多方面で活躍している。フィリ
ピン人、日本人、グアム人意識が混ざった形で自己のアイデ
ンティティを持つ。

沖縄の日本復帰を契機にグアムに移民した、かつて沖縄で
働いていたフィリピン人や彼らと結婚した沖縄出身者、さら
にその二世・三世たちの歩んだ歴史やアイデンティティか
ら、沖縄戦後史の特異な側面が浮かび上がってくる。



グアムで空手を教える城間盛義さん（2012年）仲地清撮影

「ラサン神山」の子孫たち

三 木 健

ダバオの中心街から車で北東へおよそ一時間、かつてラサン耕地と呼ばれていた地域がある。浦添からも何世帯もの人たちが住み着き、アバカの栽培やハゴタンで麻縄を製造していた。浦添市小湾出身の宮平忠一さん（昭和七年生まれ）によれば、小湾の人たちはほとんどがラサン耕地に入植した、という。一九二八（昭和三）年に父親の仁王さんが、呼びよせでラサンに入植。浦添の城間出身者から土地を分けてもらい、他は開墾で広げた。

山にはラワンの大木が茂り、それを切り倒したが、木が倒れるときバッタの大群が舞い上がり、空が見えなくなるほどであったという。周りにはワニもいた。家を取り巻くほどの大蛇もいた。先住民の人たちも住んでいた。高床式の自宅にはいつもイヌが七〜八匹も放し飼いされていた。自営業で麻を売ったお金で、小湾の実家に送金していた。

そんなラサンでよく知られていたのは、那覇久米士族出の神山鴻吉である。一九〇五（明治三八）年に単身ダバオに行き、商売をしているうちにモロ族の名望家の娘と結婚、広大な土地を手に入れる。呼びよせた兄弟たちと麻製造工場を持ち、マニラに販売店を構えた。神山自身はラサンに住んでいたのも、日本人入植者からは「ラサン神山」と呼ばれていた。日本人向けに発行されていたダバオ案内書などにも、しばしば登場してくる。

「ラサン神山」の子孫がいるという話を耳にしたので、訪ねてみた。車にはバカカ耕地生まれで浦添出身の知念和子さん、ラサンで少女時代を体験した那覇市の島田竹千代さん（昭和十二年生まれ）も同行。現地の運転手に「ラサン・カミヤマに行きたい」というと、名前だけは聞いたことがあるらしく、二度ほど道をたずねただけで目的地に着いた。



ラサン耕地跡に広がるバナナ農園（2011年）三木健撮影

木立に囲まれた玄関先のベンチに、初老の女性が腰掛けていた。初代神山の孫に当たるジェネットさんだ。御年七〇歳で日本名をミチコという。「沖縄から来た」というと、とても喜び「自分たちも沖縄の子孫だ」と自慢げに話した。玄関続きの応接間の壁に、初代神山鴻吉、その下に二代目のオステロさんの写真が額に飾ってある。ジェネットさんの父親である。しかしオステロさんは病気で入院中だという。

そこへ子供を抱いた女性が入ってきた。近くに住む娘のジャックリーヌ・アリスさん（四二歳）だ。彼女が抱いていたのは一歳になる孫のリンドリーちゃん。「この子で六世になるよ」と誇らしげに抱き上げた。彼女はバナナ農園を案内してくれた。かつてのラサン耕地は、一本残らずバナナに代わっている。初代の神山が残した七八ヘクタールという広大な農園だ。農園内にはバナナ収穫用の取手をつるした電動ケーブルがめぐらされていた。

彼女は家の近くの小学校も案内してくれた。今はナバロ小学校となつてはいるが、島田さんがかつて通ったラサン小学校が前身らしい。島田さんはわずか一年だがその小学校に在籍していた。「毎日、飛行場の石ころ拾いばかりしていた」という。やがて軍用車でタモガンへ避難し、そこで三歳の弟を、生まれたばかりの妹を収容所で亡くしている。

再びカミヤマ家に戻り、島田さんが「私もこの小学校にいたのよ」というと、ジェネットさんはうれしそうに「私の先輩だ」と、彼女の肩を抱き寄せた。ダバオに根を下ろした神山一族は、今もラサンの地に脈々と生きている。



6代目が生まれた神山家の家族（2011年）三木健撮影

■ニューカレドニアの沖縄移民■

三 木 健

南太平洋のニューカレドニアに、沖縄から出稼ぎ移民が初めて渡ったのは、一九〇五（明治三八）のことである。これはハワイやフィリピンなどに次いで古い。既に一世紀を超える長い歴史を刻んでいる。にもかかわらず、この地域への移民の歴史については、近年までよく知られていなかった。それがまた同地の特殊な移民史に由来していた。

ニューカレドニアはオーストラリアの東、ニューギニアの北、南緯二〇度～二二度に位置し、南半球の亜熱帯である。主島のグランドテール島は南北四〇〇キロ、東西五〇キロのゴーヤーの形をした細長い島である。島とはいえ面積は日本の四国ほどもある。人口二五万人で首都のヌメアに四四％が集中している。民族構成は先住民のメラネシアン（カナックと呼ばれる）が四四％、ヨーロッパ系（主にフランス系）が三四％、その他ベトナム、インドネシア、日本などである。現在もフランス領（フランスの海外県）で、外交、防衛、通貨、財政などはフランスが握っている。

一七七四年にキャプテン・クックにより西欧世界に紹介され、一八五三年フランスが植民地になっている。その一〇年後の一八六四年にニッケル鉱山が発見され、この島の歴史が大きく変わる。ステンレスの原料となるニッケルの開発に乗り出したフランスは、自国の労働者だけでは対応できず、中国やベトナムなどから労働者を入れていたが、一八九二（明治

二五）年から日本の労働者を導入する。六〇〇人の熊本県人が送られたのがそのはじまりである。

その十三年後の一九〇五（明治三八）年に沖縄から三五八人が初めて海を渡る。五年後の一九一〇（明治四三）年に二四六人、さらに六年後の一九一一（明治四四）年に一九一人、合計七九五人がいずれも五年契約の鉱山労働者として渡航する。その後、第一次欧州大戦（一九一四年）で鉱石輸出ができなくなり、移民の受け入れも中断されたが、一九一九（大正八）年自由移民として二六人、その後も数十人が渡航、延べ一〇〇〇人余が渡っている（渡航者数は小林忠雄著『ニューカレドニア島の日本人』に基づく。海外旅券の発行数と実際の渡航者数には誤差がある）。

契約移民のほとんどが男ばかりである。初期のころは沖縄への送金もかなりの額に上っていたが、炎天下の鉱山労働は厳しく、なかには鉱山を離脱する人もいた。島の東海岸の先住民の集落地域に行き、漁業や農業に従事する。日本に帰りたくても鉱山会社の鉱石運搬船しか手段がないため、叶わぬことであった。そのうち島の女性と家庭を持つようになり、蓄えたお金で雑貨屋をひらいたり農地を広げたりした。子供たちも生まれて生活は落ち着いてきた。

ところが一九四一（昭和十六）年十二月、日本の真珠湾攻撃で日米戦争が勃発、連合国のフランス政府は「敵性国民」の故をもつて、日本人一世を一斉に逮捕、オーストラリアの収容所に送る。島の妻子と生木を引き裂くように別れさせた。その上、財産は没収され、競売にかけられた。

それから五年、戦争が終わるまで収容所生活を余儀なくされた。一九四六年二月、収容所を出たものの、ニューカレドニアに戻ることは許されず、日本に強制送還される。日本人抑留者は二五六二人であった。

沖縄に引揚げた人たちは、ニューカレドニアに残した妻子との音信もままならず、むなしく戦後を送った。一方、島の妻子も捜す術もなく母子が肩を寄せ合って耐え忍んできた。一九九二（平成四）年、「日本人移民百年祭」がヌメアで開催されたのをきっかけに「日本親善協会」（アミカル・ジャポン）が発足し、日系人を名乗るようになり、親せき捜しが始まる。

沖縄については、ごく一部の家族が戦後ニューカレドニアに戻ったものの、ほとんどの引揚者は再会できないまま世を去った。このため同地に沖縄系の人たちがいることさえ知られなかった。二〇〇六（平成十八）年八月、ヌメアで開かれた津田睦美写真展「私たちの亡き父」で沖縄系の二世、三世たちの存在が明らかとなり、同年十二月「沖縄ニューカレドニア友好協会」が沖縄で結成され、翌年にニューカレドニアの沖縄系の多く住むポワンディミエを中心に「沖縄日系人会」も結成され、相互の組織的交流が始まる。

ハワイや南米各地の沖縄系移民が、両親共に沖縄出身であったのに対し、ニューカレドニアでは父親のみが沖縄であった。したがって沖縄語や沖縄文化が継承されることもなかった。しかし、自分たちが沖縄系だという意識だけは持ち続けていた。

現在、沖縄系はヌメアにも多く住み、全島で四世、五世まで含めおよそ二〇〇〇人ほどとみられる。二〇一一年一〇月の第五回世界のウチナンチュ大会には、約五〇人が参加して県民の関心を集めた。その後、ポワンディミエには「メゾン・ド・オキナワ」（沖縄の家）も建てられた。



メゾン・ド・オキナワの落成祝いに集まった沖縄系の人たち
（2011年11月12日、ニューカレドニア・ポワンディミエ）三木健撮影